



Title	長期的なボランティア活動における参加者の継続要因と心理的変容 ―ボランティア活動に対する意味付けに着目して―
Author(s)	Chen, Zhongdao
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105393
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

博 士 論 文

長期的なボランティア活動における参加者
の継続要因と心理的変容
ーボランティア活動に対する意味付けに着
目してー

2026 年 3 月

大阪大学大学院人間科学研究科
人間科学専攻未来共生学講座共生社会論分
野

(陳 重 道)

目次

序章 研究背景と課題の設定	8
0.1 日本におけるボランティアの歴史.....	8
0.2 日本における「ボランティア」概念	11
0.3 本研究の目的、方法と対象	15
第一章 ボランティア活動とその動機付け	20
1.1 ボランティアの参加動機.....	20
1.2 継続要因になりうるもの	27
第二章 現象学的アプローチの応用	34
2.1 A.シュッツの現象学的社会学と「生活世界」	34
2.2 現象学的アプローチの方法	38
2.3 ライフストーリー法と現象学的アプローチの親和性	41
第三章 最初の経験に拘る災害ボランティアー金光教大阪災害救援隊の事例からー .43	
3.1 はじめに	43
3.2 金光教大阪災害救援隊と本章での現象学的還元の基準.....	44
3.2.1 金光教と大阪災害救援隊	44
3.2.2 筆者と救援隊の関係及び本章での現象学的還元の基準.....	46
3.3 A のライフストーリー	48
3.3.1 A の物語.....	48
3.3.2 初めての活動とその際の感想	49

3.3.3 活動における信仰の関わり	51
3.3.4 活動における葛藤	54
3.3.5 活動現場での繋がり	56
3.4 Bのライフストーリー	58
3.4.1 Bの物語	58
3.4.2 初めてのボランティアの体験と感想	59
3.4.3 活動のなかでの葛藤と印象が深い体験	60
3.4.3 活動における宗教の関わり	63
3.5 まとめ	65
第四章 電話相談ボランティアで繰り返される「意味」の探究ー大阪自殺防止センターの事例からー	68
4.1 はじめに	68
4.2 大阪自殺防止センターとインタビュー対象	69
4.2.1 大阪自殺防止センターの活動内容	70
4.2.2 筆者とセンターとの関係と現象学的還元の基準	71
4.3 Cのライフストーリー	73
4.3.1 Cの物語	73
4.3.2 センターと接触する以前のボランティア活動経験	73
4.3.3 センターの活動へ参加する理由	76
4.3.4 はじめての活動の感想	79

4.3.5 活動の長期化に繋がる出来事	82
4.4 D のライフストーリー	85
4.4.1 D の物語	85
4.4.2 センターの活動に参加するきっかけ	85
4.4.3 センターでの最初の経験と感想	87
4.4.4 長期的活動における葛藤と支え	89
4.5 まとめ	94
第五章 職業としてのボランティア	97
5.1 はじめに	97
5.2 本章の研究対象	98
5.2.1 日本災害救援ボランティアネットワーク(以下：NVNAD)と E	98
5.2.2 あそかビハーラ病院と F	100
5.2.3 本章における現象学的還元の基準	101
5.3 E のライフストーリー	102
5.3.1 E の物語	102
5.3.2 人生最初のボランティア活動経験	103
5.3.3 NVNAD に入るまでの社会貢献活動	105
5.3.4 NVNAD の活動初期での心理的変容	105
5.3.5 長期的な活動の継続要因	107
5.4 F のライフストーリー	110

5.4.1 Fの物語	110
5.4.2 ビハーラ僧になる以前のFとボランティア活動	110
5.4.3 ビハーラ僧として活動する理由	113
5.4.4 あそかビハーラ病院での活動の初印象	115
5.4.5 それ以降の葛藤と活動を継続する要因	118
5.5 まとめ	120
第六章 ボランティア活動が「日常」に変化する道程	123
6.1 人生のストーリーとともに綴られたボランティア活動	124
6.2 活動における他者との相互関係	127
6.3 家族・本人の過去のボランティア歴と宗教的な関連による影響	129
6.4 活動意味の変容のなかで見られた〈贈与のパラドックス〉の超克	130
第七章 結論	133
7.1 リサーチクエスションへの返答	133
7.2 現象学的社会学の視点から見えたもの	135
7.3 本研究の限界と展望	136
参考文献	138
註	148
謝辞	149

図表目録

表 1	本研究のインタビュー調査対象者	17
表 2	調査対象者が所属する組織の性質	18
表 3	先行文献における状況での認識要因とそのカテゴリ	31
表 4	代表的な現象学的アプローチの手順	40
表 5	各研究対象者の活動継続要因一覧	123

序章 研究背景と課題の設定

0.1 日本におけるボランティアの歴史

1995 年の阪神・淡路大震災は、日本における「ボランティア」に対する認識を大きく変えた。被災地で救助・支援活動を行うおよそ 138 万人を超えるボランティアは、その人数や果たした役割などから、政治やメディアを含む多くの領域の注目を集めた。それまでは社会福祉分野を中心に語られてきた「ボランティア」という概念が、市民生活全般へのサポート活動へと拡散するようになったのである。その後、ボランティア活動に参加する人口は少なくとも 2003 年まで増え続けた¹。活動団体に関しても「特定非営利活動促進法（NPO 法）」が 1998 年 12 月に施行され、ボランティア団体の法人化が推進された。この未曾有の災害は、国内における「ボランティア」を取り巻く環境が整う契機となり、「活動するもの、してもらったもの、見守る者、すべての面でボランティアについてのこれまでの意味づけが再定義されていった」（山下, 2008 : 34）。そのため、1995 年は「ボランティア元年」としてもよく知られている。こうした一連の展開に伴い、ボランティアに関する研究も盛んになってきた。これらの研究は組織の運営、活動参加の動機、社会的な役割など多くの視点から行われてきたが、その共通点として、「そのいずれかでも『ボランティアとは何で、それがどういう価値をもっているか』について、何かしらの言明が行われている」（仁平, 2011 : 1）。一方で、こうした指摘は有償か無償か、公共性の有無などで見解が分かれることもあり、必ずしも一致するものではなかった。本稿ではまず、本研究における「ボランティア」という語の定義について触れる。

現在では既に日本社会に定着している「ボランティア」という言葉であるが、これが誕生したのは 1950 年代頃である（仁平, 2011）。その由来は英語の「volunteer」であり、この「volunteer」の起源はラテン語の「voluntarius」にある。つまり、ラテン語の「volo（ウォロ）」は「喜んで～する」「～を欲する」を意味する言葉であるが、この派生語「voluntas（自由意志）」（ウォルンタース）に英語で「人」を表す接尾語「er」を付加して成立したのが「volunteer」である（佐野, 1999）。『オックスフォード大辞典』によれば、「volunteer」という言葉が最初に用いられたのは 17 世紀半ばのイギリスで、その際は町や村を守る自警団員への呼称であった。18 世紀にはイギリス軍で「志願兵」を意味する言葉となり、それから 19 世紀前半までの間、アメリカ合衆国の独立、フランス革命、ギリシャの独立などに参加する義勇兵もボランティアと呼ばれるようになった（筒井, 1997）。「セツルメント運動」が起きる 19 世紀後半になると、貧困者のために活動する人たちの呼称となった。つまり、「ボランティア（volunteer）」という言葉は、その語源や起源のいずれから見ても、貢献活動を行う者の自由意志と自発性を強調する言葉だといえる。

一方、日本において「ボランティア」という言葉は 20 世紀に海外から伝来したものであるが、それ以前から日本社会にはこれに類似した、他人のために自己犠牲を払う「奉仕活動」という概念が存在した（仁平, 2011）。「ボランティア」の端緒となる事例を遡及する検討はこれまで数多く行われてきたが、それぞれの研究者の「ボランティア」概念に対

する解釈によって見解が相違する場合が多い。そして、これらの検討では宗教との関わりがよく指摘されている。大澤（2021）は社会福祉の観点に基づき、日本で最も古い活動施設として、推古元（593）年に聖徳太子（574～622 年）によって大阪に建設された「敬田院」（仏を祀り僧侶が居住する建物）、「悲田院（貧窮孤独の人を収容する施設）」、「施薬院（薬草を栽培し病人に施す施設）」、「療病院（ハンセン病等の患者の収容施設）」を列挙した。そして、奈良時代になると、僧である行基（668～749 年）が諸国を行脚して仏教を伝道する一方で、弟子たちとともに池や溝を掘り、橋を架け、宿泊所や伝道所を開くなど民衆への布教と慈善活動を熱心に行った。平安時代には、空海（774～835 年）が延暦 23（804）年に留学した唐から帰朝して真言宗を開き、満濃池の修築をはじめとした多くの社会事業を行った。

上記は仏教による社会奉仕活動であるが、1549 年のフランシスコ・ザビエルの日本上陸によってもたらされた西洋文化であるキリスト教の活動からもボランティアの萌芽が見られた。その代表例として、1552 年に貿易商として来日したルイス・デ・アルメイダは、1555 年には外科医の免許を取得し、宣教師兼外科医として再来日した。同年には孤児院を建設し、また病院を開設して無償で治療を行った。さらに、「ミゼリ・コルディア（慈悲の組）」を設置し、病院経営や福祉活動のための募金を集めた（大澤, 2021）。江戸時代ではキリスト教の禁教や檀家制度による仏教の影響力の減少とともにこれらの奉仕活動も衰退したが、明治期になると、社会福祉活動に従事する人が再び増加し、代表的な人物も現れた。

明治政府は 1874（明治 7）年、「恤救（じゅっきゅう）規則」を制定した。恤救とは、「憐れみ救うこと」という意味である。この法律の内容について、小笠原（2013：182）「貧困者にあくまでも人民がお互いに救済し合うべきこと（人民相互の情誼による救助）」を強調し、極貧独身老人、障害者、病人、若年児童等の放置しておくことができない者（無告の窮民）に限って一定の米を支給する（後、金銭給付となる）としてものである。ただし、保護を受ける権利はもちろん認めず、労働能力のあるものや身寄りのある者には一切保護を認めなかった。したがって、血縁や地縁による扶養（親族相救、隣保扶助）を当然のこととして先行させ、同姓者に扶養を求める例までであった」と解釈した。大澤（2021）はこの規則を「貧民の救済は本来、『人民相互の情誼』（付き合いの上の義理・情愛）でなされるべきものという相互扶助の原則に立ち、その上で障害者、病人、子ども等に米を給付するというもの」だと述べた上、その対象がかなり限定されていることを指摘し、その間隙を埋めるための民間による救済活動の必要性を示唆した。明治政府のこうした政策の間隙を埋めるべく呼応して行動したのがキリスト教徒と仏教徒である。キリスト教徒である石井十次（1865～1914）は孤児のための収容・養護施設、留岡幸助（1864～1934）は監獄の受刑者のための家庭学校（感化院）、山室軍平（1872～1940）は娼婦、受刑者、ホームレスなど様々な人に向けた更生施設、病院などを設置した。仏教徒の方では、今川貞山（1826～1905）は貧困家庭の児童のための育児院、奥田貫照（1846～1900）は貧困者のための救済施設を立ち上げ、救済活動に尽力した。

また、明治時代ではセツルメント活動も始まっている。セツルメント活動とは貧困地域に住み込んで、その住民に幅広い教育活動を提供することによって貧民が貧困から抜け出せるように援助をする活動である。日本ではキリスト教社会主義者の片山潜（1859～1933）が 1897（明治 30）年に東京の神田三崎町にキングスレー・ホール（琴具須玲館）を設立し、幼稚園、職工教育、大学普及講演、英語教授、西洋料理教室などを行った。こうした彼らの活動は、現在でもその理念とともに孤児院、街頭での炊き出しなどといった別の姿で日本社会に残っている。彼らが活動した時期は、現代日本におけるボランティアの萌芽とも位置づけられる（南, 2002）。明治時代までの社会福祉活動を振り返ると、そのほとんどが宗教の信者によって展開されていることに気付く。しかし、大正時代になると、第一次世界大戦後の社会運動活性化により、政府はこれまでの救済政策の見直しを余儀なくされた。この見直しにより「恤救規則」は「救護法」に代わり、「社会事業」という言葉も政府用語になり公的な立場を得た。そして、1923 年に関東大震災が起きると、その救援現場では東京大学の学生の姿も見られ、セツルメント運動が大学に拡散していることが分かった。こうした社会福祉活動の展開は 1930 年代になると日中戦争遂行のための集権化のために一時中断されたが、それでも宗教者以外の一定の層にボランティアの精神を伝えることができたと考えられる。この精神が開花したのは戦後のことである。1947 年に京都女子専門学校の学生が集まり青少年健全育成を目的として京都少年保護学生連盟が結成された。彼女らは、非行少年少女との交流を通じて更生に協力をする BBS（Big Brothers and Sisters）運動の先駆けとなる活動等を展開した。1950 年代になると子ども会活動や Voluntary Youth Social Worker (VYS) 運動、蚊やハエの駆除やゴミ処理、下水清掃等の地区衛生活動、遊び場設置・点検活動等が展開された。

その背景として、1947 年から施行された日本国憲法で「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。」（日本国憲法第 25 条第 1 項）、「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。」（日本国憲法第 25 条第 2 項）のように、国の福祉に対する社会的使命が明記されることになった。また、同憲法では「公金その他の公の財産は、宗教上の組織若しくは団体の使用、便益若しくは維持のため、又は公の支配に属しない慈善、教育若しくは博愛の事業に対し、これを支出し、又はその利用に供してはならない。」（日本国憲法第 89 条）²とも明記されており、民間の社会福祉活動の政府からの独立性を規定した。1951 年には資金繰りに難航している民間の社会福祉事業のために、政府への所属を前提とした公費による資金援助を受ける「社会福祉法人」の規定が設けられた。こうした一連の政策の制定は、各種の社会福祉事業が展開するための下地を整えた。1960 年代になり、国家が経済高度成長期に突入すると同時に、従来の生活環境が一変し、国民間の所得格差もより顕著なものとなった。それまで対応したことのない社会問題への改善を自ら求め、各地では市民運動が活発化した。具体例として、1961（昭和 36）年に「学生ボランティア会議」が開催され、1962（昭和 37）年には、徳島県社会福祉協議会に「善意銀行」が誕生し、「日本病院ボランティア協会」が設立された。1965（昭和 40）年には、「大阪ボランティア協会」、

「富士福祉事業団」（東京）が、青少年分野では、1967（昭和 42）年には「日本青年奉仕協会」が発足した。また、発展途上国で国際協力にあたる「青年海外協力隊」も設立された。日本のボランティア活動を推進するための組織が生まれたのもこの時期といえる。

1970 年代に入るとボランティア活動が政策対象となってきた。その背景には、当時の自治省（現・総務省）が策定した「コミュニティ（近隣社会）に関する対策要項」がある。この要項は「住民が望ましい近隣生活が営むことができるような基礎的な地域社会をつくるため、新しいコミュニティづくりに資する施策を進める」ことを目的として作成されたものである。さらに、経済の高度成長を遂げた日本の国際的役割が問われるようになり、1980（昭和 55）年に「日本国際ボランティアセンター」の前身の「日本奉仕センター」が発足、1987（昭和 62）年には「NGO 活動推進センター」も発足するなど、さまざまな NGO（非政府組織）が設立され、若者を中心に海外協力活動などへも関心が向けられていった。一方、1970 年代後半より都市部を中心に、主に介護サービス事業を提供する「サービス提供者」とサービスを受ける「利用者」とが同じ会員として平等の立場で参加し、サービスの提供に関しては利用者が利用料を支払い、サービスの担い手が一定の金銭を受け取るという「有料・有償」サービスを行う「住民参加型在宅福祉サービス」についても急速に普及した。しかし、そのサービスの担い手である「有償ボランティア」をめぐる賛否両論があった。こうしたボランティア活動の発展のなかで迎えたのが 1995 年の「ボランティア元年」である。

0.2 日本における「ボランティア」概念

前節で見たように、日本におけるボランティアは長い期間をかけて発展し、それぞれの時期の政府の施策によって試行錯誤を繰り返してきた。そのため、研究者の間でも「ボランティア」という言葉に対する定義は様々である。本節では、まず公的な立場を代表する政府による定義を確認した後に、研究者らの諸説を検討する。政府がボランティアに言及した代表的な文書は文部省（現・文部科学省）の生涯学習審議会が 1992（平成 4）年に出した答申と、厚生省（現・厚生労働省）の中央社会福祉審議会が 1993（平成 5）年に出した意見具申だといわれている（大澤, 2021）。まず、文化庁生涯学習審議会答申『今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について』をみると、ボランティア活動について次のような説明がなされている。

『ボランティア活動は、個人の自由意志に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献することであり、ボランティア活動の基本的理念は、自発（自由意思）性、無償（無給）性、公共（公益）性、先駆（開発、発展）性にあるとする考え方が一般的である。』（生涯学習審議会答申, 1992：17）

次に、厚生省（現・厚生労働省）中央社会福祉審議会地域福祉専門分科会意見具申『ボランティア活動の中長期的な振興方策について』のなかでは、ボランティアについてこのような記述をみることができる。

『ボランティアは、一般的には、自発的な意志に基づき他人や社会に貢献すること

をいい、その基本的な性格としては、一般に、「自発性（自由意志性）」、「無給性（無償性）」、「公益性（公共性）」、「創造性（先駆性）」がいわれている。「自発性」とは、自分の意志が尊重され、自己の決定によって行う行為であることを示している。「無給性」は、金銭的利益を目的としたり労働としての対価を求めたりしない非営利の行為である。「公益性」とは、その成果が広く社会に利益をもたらすこといい、「創造性」は、新しい分野や問題に対してより積極的に取り組み、社会を開発していくことを指している。』（中央社会福祉審議会, 1993：195）

上記の二つの文書では、ボランティアは自発的な意志によって社会に貢献することだと規定され、さらにその性質として「自発性」、「無償性」、「公共性」と「先駆性」が明記されている。他の研究でも、ボランティア活動は「自発性」（田中・廣瀬, 2013; 富樫, 2013; 内海・中村, 2014; 小野, 2004）、「無償性」（田中・廣瀬, 2013; 富樫, 2013; 内海・中村, 2014; 小野, 2004）、「先駆性」（内海・中村, 2014; 小野, 2004）及び「公共性・社会性」（富樫, 2013; 内海・中村, 2014）と結びつけられて検討されている。

具体的な定義を整理すると、入江（1999）は「自発性・無償性・公益性という三つの条件…が揃っていれば、それはボランティア活動である」、田尾（2005）は「ボランティアとは、自発的に、無償で、…利他的に働く人達を支える価値観であり理念」、大森（1980）は「個人が自由な意志に基づき、自らの身銭を切って、金銭や名誉の対価を求めず、何らかの重荷を背負っている他人に対して、その相手の了解のもとに、理解と支援の手を差し伸べることによって、ともに人間らしく生きようとする連帯の活動である」、森井（1994：8）は「広義の社会福祉の領域で、自ら進んで報酬を期待せずに時間や労力を提供し、社会的な目的実現に参加することを志す人をいう」など、様々な研究者によって「ボランティア」の定義がなされている。そして、これらの定義のなかで共通する要素として最も多く見られるのは、やはり上記の自発性、無償性と公益性である。「公益性」は「社会性」、「公共性」とも言われ、これについて早瀬（2011：19）は「社会的課題を解決し公益の増進をはかることも、ボランティア活動を規定する要素の一つです。自発的だからといって、趣味の活動や仲間内の利益（共益）、あるいは自分自身の利益（私益）のためにするのは、ボランティア活動とは呼ばれません。」と解釈した。つまり、この活動の対象は活動者が所属する輪以外の者であり、これによってその者、ないしは公ともに何かしらの利益がもたらされるということである。また、大澤（2021）によれば、この「社会性」は「公平性」に重みを置く国や行政などの公的サービスの見落としに対応する役割も果たしていることから、社会をより良く導くための「先駆性」にも関係している。これらの要素を含めつつ、横須賀基督教社会館館長の阿部志郎氏は、ボランティアに期待される役割について、①地域社会の福祉ニーズに積極的に応えようとする先駆的役割、②公的制度の不備を補う補完的役割、③制度や行政施設に対して建設的批判をする批判的役割、④行政施設と住民のあいだで理解・協力者として活動する架橋的役割、⑤地域の福祉を守り育てる相互扶助的精神を普及する啓発的役割の5点を挙げている。（阿部, 1997）

「無償性」も「ボランティア」にとって不可欠な要素である。しかし、前節でも言及し

たように、日本では1970年代後半から地域福祉活動の取り組みにおいて「有償ボランティア」の活動が行われるようになった。その活動自体では、ボランティアに対する金銭の提供はサービスを提供する側と受ける側両方に認められたものだが、この仕組みに対する反発も存在し、現在でも「ボランティア」を議論する際に有償ボランティアを取り入れるべきかが争点の一つとなっている。「有償ボランティア」の展開を危惧する論調でよく取り上げられているのは「『ボランティア』が体のいい安上がり労働力として利用されてしまう危険性」（大澤, 2021）であり、これは国家システムの視点でも言及されている（中野, 2014）。しかし、小谷（2002）は、「有償ボランティア」の問題点を認めつつも、ボランティア活動が十分に普及しているとはいえない現状では、あまり厳密にボランティアというものを定義することでボランティア活動の範囲を狭めてしまうよりも、ボランティア活動にはさまざまな形があるということを認めて、一人ひとりが自分の考えに合った形のボランティア活動を選択することを求める立場もあると主張した。「無償性」に関するこれらの論調の争点はあくまでも有償化によるボランティアの活動での立場の変化に注目していることから、森井（1994）が言及した自ら進んで報酬を求めないという姿勢は、論じるまでもない前提とも考えられる。最後に「自発性」であるが、前節でも触れたように、これは「ボランティア」の概念が誕生した際に既に有しており、決して切り離せない最も重要な性質とも言える。ただし、この性質にも二重の意味が含まれている。「言われなくてもする」と「言われてもしない」である。早瀬（2011）によればこれは「しなければならない活動」というのではなく自分で納得して、したいからやっている活動であって、「続けられないと感じたら周囲にきちんと事情を説明さえすれば休んでよい」ものである。そのために、ボランティア活動を考察する際に、「自発性」の対極にある「強制性」が潜んでいる可能性には十分に気をつける必要がある。また、「自発性」はその活動者個人の意志を尊重する側面から、自己責任にも結びついている。いわば、ボランティア活動の活動者は自分の責任で状況を把握し、価値判断を行い、行動を起こし、またその行為によってもたらされる責任も取る必要がある（入江, 1999）。ボランティア活動に対して「ありがた迷惑」という評価もしばしば現れるが、これはまさに活動者の「自発性」への理解不足によるものだと考えられる。

これまで日本における「ボランティア」の概念を整理してみたが、これに対して定義を行うのは至難の業である。こうした不安定な「ボランティア」に対して意味論的検討を行ったのが仁平（2011）である。仁平（2011）はあえてボランティア活動ではなく、「ボランティア的なもの」という言説的なものを扱い、その生成プロセスを明らかにしたが、その動機付けは「ボランティア」の活動が偽善、自己利益、交換などに解釈され、「冷笑」されることの居心地悪さの解消である。この問題の中心にある矛盾を仁平（2011）は「贈与のパラドックス」と指摘した。

「贈与のパラドックス」の意味論では、「〈贈与〉は、被贈与者や社会から何かを奪う形で反対贈与を獲得していると観察されがち…〈贈与〉は、贈与どころか、相手や社会にとってマイナスの帰結を生み出す、つまり反贈与的なものになる」とされ

(仁平, 2011 : 13)

この概念で掲げたように、ボランティアは常に外部の観察により被贈与者から何らかの形でお返しを受けていると判断され、偽善の烙印を押される。仁平は「贈与のパラドックス」を解決するための意味論形式を見つけるために、「ボランティア的なもの」の歴史における言説の変化を振り返り、「ボランティアとは何か」という問いに挑んだ。仁平の考察ではボランティアが国家の政策と資本に操られる「動員」に注目したが、本稿ではあくまでも「ボランティア」そのものへの解釈に議論の中心を絞りたいため、その考察の内容のなかで特に注目したのが1970年代の「自己効用論的なボランティア論」が台頭した以降の「ボランティア」である。1980年代では、自己効用論的な語りでは「活動自体の楽しさ」が重視され、1990年代になると、ボランティア活動における「交換」の意味に対する理解度がさらに深まり、ボランティアを特徴付ける概念として「互酬性」が登場した。この概念の変化により「ボランティア」という概念の適用範囲が広がったが、このことは同時に「ボランティア」という語の中身がより複雑化していき、誰にも捉えがたい記号になったことを宣告した。実際の活動現場でも、「どこまでがボランティア」について人々は悩み、その結果としてボランティア依存、組織の存続、「動員モデル」や過度な制度化といったリスクが見られた。特に長期的な活動を行うとなれば、活動参加者がこうしたリスクにより遭遇しやすくなるのは想像に難くない。言い換えれば、あらゆる形で関わってくる〈贈与のパラドックス〉にいかに対応していくのかも、ボランティア活動が長期化する過程のなかで必ず乗り越えていくべき問題である。

仁平(2011 : 438)は「〈贈与〉のパラドックスのまなざしに怯むことなく、〈贈与〉の領域を一純粋贈与や交換へと性急に逃避せずに—引き受ける」ことを指摘し、矛盾を解決するために〈贈与のパラドックス〉を受け入れるという一案を提示した。この考察は知識社会学に基づき、社会全体というマクロな視点に重心を置いていることから、特定の組織のボランティアに対する理解の変容への言及はあるものの、個人に視点を絞り、個人の活動体験のなかでの〈贈与のパラドックス〉の映り方に対する考察へのフォローはなかった。言い換えれば、〈贈与のパラドックス〉を受け入れるにしても、そもそもボランティア個々人の視点に立ち返った場合、〈贈与〉のマイナ斯的な側面の現れ方は活動の場所、活動参加の理由などといった多くの要因に左右されており、これらの存在の受け止め方も周りの声に影響されつつも最終的には本人の主観によって決められるものである。それを〈交換〉と交じれ合わせる場合、〈交換〉の対象(金銭、謝礼、個人の自己効用感など)によってボランティアにもたらされる効果も多種多様に加え、本人のなかで新たなパラドックスを引き起こす場合も考えられる。例えば、仁平が言及した〈交換〉の導入によるボランティアの身分の同定の問題は確かにマクロな視点からすれば客観的に存在する極めて重要な課題の一つだが、個人ボランティアによってはそもそも問題視されていない可能性も存在する。つまり、どのような人(人間性、過去の経歴など)、どのようなボランティア経験、どのような環境が〈贈与のパラドックス〉への対応に資するか。これについての議論が充分になされたとは言えない。そして、この課題を考察するのに適するのはやはり長期

的に活動し、その過程のなかで自身の生活環境、活動する際の世論環境、活動で働きかける対象が変わる確率が高いボランティアだと考えられる。

長期化するボランティア活動を検討の視点に入れた際に、その活動継続に関わる葛藤と要因は社会、組織ないし個人の視点でよく一般化した概念として捉えられた。例えば災害ボランティアの場合、活動参加者個々人の性質は活動の参加、継続に大きな影響を及ぼしていると指摘されている（高木・玉木, 1998; 陳, 2022）。しかし、こうした指摘の多くは性質そのものに留まり、その由来と活動継続の意思に影響する過程までの探究は行われていなかった。そのために、長期的な活動の継続を検討する場合、それ以外にも、活動参加者個々人に対する意味づけとその変容を把握する価値は高いと考えられる。そして、こうした考察を行う際には、我々は「自発性」に潜んでいるある落とし穴に注目すべきである。吉田・桜井（2004）によれば、ボランティアはその自由性から「不安定で期待できない存在」というネガティブな特徴を持ち合わせている。言い換えれば、ボランティアはその自発性ゆえ、参加・継続するのも活動するそれぞれの個人の意志に依存しており、本人が「したくない」と思えばいつでも辞められてしまう。そのため、活動の組織、活動を受ける側にとってボランティアはニーズの有無に関わらず期待しづらい存在である。その結果、多くの非営利組織ではボランティアという人的資源のマネジメントに難航しており、その共通の悩みの一つとして挙げられたのがボランティアのバーンアウトである。特に対人支援のボランティアの場合、営利・非営利、専門職・非専門職に関わらず、活動者にとってバーンアウトは共通の問題である（吉田・徳田, 2012）。しかし、同じくバーンアウト現象がよく観察されている介護職、看護師などの他分野と比べて、ボランティアの分野では重要な要素である個人の「自発性」を追及した研究が不十分である。全国社会福祉協議会によれば、2024年11月時点では日本のボランティアの数は2000年代から2010年代のそれに比べると減少の傾向を見せている。一方、日本では近年において水害、地震の復旧、万国博覧会をはじめとする公的事業など、ボランティアへのニーズが絶えない。したがって、本稿では長期的なボランティア活動を行ってきた複数の個人に注目し、彼ら・彼女らの視点においてボランティア活動に伴う〈贈与のパラドックス〉はいかに表れ、そして克服されていくのだろうか、そもそも長期的に活動するのに彼ら/彼女らはどのような葛藤を経験し、自己変容してきたのかという二つの問題意識に基づいて考察を行いたい。

0.3 本研究の目的、方法と対象

本稿は、以上の問題意識に基づき長期的なボランティア活動における活動参加者の活動の「意味」の生成過程を解析し、それと活動の継続との関係を明らかにするものである。近年では、ボランティア活動が教育の一環として学校や一部会社に取り込まれるようになり、市民がボランティア活動に触れる機会がある程度確保されている。しかし、こうしたボランティア活動は、公共性、社会性や無償性が保証されている一方、明示的に、または暗黙的に活動を勧めた学校、会社での評価に繋がる可能性を孕んでいるため、自発性の欠如という問題を抱えている。また、こうした活動は一度きりのパターンも少なくないため、

「体験」という意味も含まれており、長期的な活動に繋がるのは難しい。逆に言えば、活動を継続する自発性に寄与する活動への意味づけにボランティア活動の参加者が成功した場合、活動の長期化を期待することができる。詳細は後述するが、物事の「意味」をそれを経験する主体の「主観」と「客観」の関係性から追求するものとして、現象学が挙げられる。本稿では現象学の視点をボランティアの活動に対する意味づけの考察に加える。したがって、本稿の主な研究目的は長期的なボランティア活動における活動参加者の活動の「意味」の生成過程を現象学の視点を加えて解析し、それと活動の継続との関係を明らかにすることであり、さらに本稿ではその結果に基づいてボランティア活動に長期的に関わる個々人に有利な条件を提示することを目指している。

本研究において、筆者が採用する研究方法は参与観察と半構造化インタビューである。谷富夫（2009）によれば、参与観察の基本は調査者が対象集団のメンバーとして日常の時間を過ごすことである。宮本・渥美・矢守（2012）は、我々の経験の社会的構成には「言語の水準」と「身体の水準」が存在すると指摘した。参与観察を通して、研究者は研究対象者が過ごす日常の中に入り込み、その体験や考えを間近で観察、共有することができ、対象者に関する情報をより立体化することができる。本研究では、筆者は主に研究対象の内の二つ、金光教大阪災害救援隊（以下：救援隊）と大阪自殺防止センター（以下：センター）を対象に参与観察を行った。それぞれの組織での参与観察の詳細は第三章・第四章で後述するが、観察の対象をこの二組織に絞った理由は、この二組織から選出した調査対象者のボランティア活動形態が非雇用形態であることと、この二組織の活動現場が比較的参入しやすいことである。他の二組織の場合、活動の拠点が筆者の居住地域から離れていることや、活動に加わるのに一定の資格、または身分が求められることが参入しにくい理由となっている。

本研究では、筆者は目的の達成のために研究対象者の語りから彼ら・彼女らのボランティア活動に対する意味づけとその変容を捉える必要がある。こうした語りのデータをより詳細にするため、本研究では半構造化インタビューの方法を採用する。筆者はあらかじめ参与観察と文献調査に基づいて基本の質問項目を設定するが、インタビューの際では研究対象者の具体的な語りに基づき、その意識をより明確にするために追加の質問を行うことがある。また、研究対象者の各時期におけるボランティア活動への意味づけは極めて主観的なものであり、それを発言者本人ではない筆者が現象学的還元の手法で妥当な解釈を行うには、筆者自身の主観を可能な限り遮断し、対象者の立場から理解する必要がある。したがって、本研究では、それぞれの対象者の立場をより詳しく捉えるために現在のボランティア活動はもちろん、それ以前のボランティア活動に関わる経験、成長過程中的家庭環境など、意味づけを行う際に影響を及ぼす可能性が高い情報に対する認識を把握しなければならない。これらの課題を解決するために、筆者は研究対象者が最初にボランティア活動に関わった時期から現在までのライフストーリーについて尋ね、語りを収集した。

ライフストーリーはナラティブ・アプローチの一種であり、個人が生活史のなかで体験した出来事やその経験についての語りであり、特別な会話形態を持ち、それによって語り

手の自己概念や自己と社会の関係のあり方が表される（桜井・小林, 2005）。桜井（2002）は、ライフストーリーには「実証主義」、「解釈的客観主義」と「対話的構築主義」という三つのアプローチが存在すると指摘した。このうちの「実証主義」と「解釈的客観主義」は質的手法でありながらある程度の客観性を保つことを求めることから、ライフストーリーの「生の全体性」や少数の、あるいは個人的な特性のあるデータを扱い切れない恐れがある（桜井, 2012）。一方、「対話的構築主義」は語り手と聞き手双方の語りを解釈学的に扱うアプローチであるが、社会的対象の機能と内的ダイナミズムを理解するのに不十分であるという指摘がある（Daniel, 2003）。したがって、本研究では、これらのアプローチを踏まえて、現象学的視点を加えたアプローチを採用するが、その詳細は第二章にて説明する。

本研究の研究対象者は四つの組織から選出した、活動に長期的に参加してきた六名である（表 1）。継続要因を考察するに当たって、対象にはある程度同じ現場で活動を行った経験/体験が求められる。「長期的」の定義については人それぞれであるが、先行文献では 5 年単位で区切る場合が多く見られた。例えば古賀・横澤・井上（2015）は電話相談のボランティアの辞める時期を検討した際に、5 年と 10 年の減員率が最も顕著だと指摘した。本研究では活動に対する本人の認識は本人が置かれる周辺環境に絶えず影響されており、これに左右されずに活動を継続した参加者を特定するために、4 年制大学の学生ボランティアを参考に、学生時代を終えた後も含めた 5 年間と設定した。また、本研究で選出された調査対象者らが所属する組織は合計 4 つであり、それぞれが金光教大阪災害救援隊、大阪自殺防止センター、日本災害救援ボランティアネットワークとあそかビハラー病院である（表 2）。本研究では筆者はそれぞれのボランティアが活動に対する意味づけの変容を考察することを目指している。災害現場と終末期現場は自他の死生観、実際の生死、居住環境の崩壊など、活動参加者に衝撃的な体験を与え、日常から引き離し、世界観、人生観、価値観の崩壊と変化を起こしやすい現場である。こうした現場では、活動参加者のボランティアに関する葛藤も生じやすいと考えられるため、本研究の調査対象として適合していると考えられる。そして、この四つの組織はさらに災害現場と終末期現場での宗教関連組織と一般 NPO 組織、研究対象者と雇用関係がある組織とない組織に分類できるため、個人の定義付けに対する宗教的な関わりと雇用形態の有無による影響を考察できると考えられる。

調査対象者	所属団体・機関	実施回数、時間	実施場所	方法
A（50 代・男性）	金光教大阪災害救援隊	102 分	A が所属する教会	対面
		74 分	救援活動車内	対面
B（20 代・女性）	金光教大阪災害救援隊	59 分	O 学校の会議室	対面
		60 分	Zoom	オンライン

C (30 代・男性)	大阪自殺予防センター	96 分	センター内	対面
D (30 代・男性)	大阪自殺予防センター	111 分	センター内	対面
E (60 代・男性)	日本災害救援ボランティアネットワーク	92 分	O 市内のカフェ	対面
F (40 代・男性)	あそかびハーラ病院	88 分	病院内	対面

表 1 本研究のインタビュー調査対象者

	災害ボランティア	終末期現場
宗教関連組織	金光教大阪災害救援隊	終末期医療現場で活動するチャプレン(臨床宗教師)
一般の認定 NPO 法人	日本災害救援ボランティアネットワーク NVNAD	大阪自殺防止センタービフレンダーズ

表 2 調査対象者が所属する組織の性質

本研究では、筆者は以上の 6 名に対し、以下の問題を中心にインタビューを行い、インタビューの語りからそれぞれの調査対象者のライフストーリーを記述し、現象学的アプローチで分析を行った。

- 1 最初にボランティア活動に従事した経験とそのきっかけ；
- 2 最初にボランティア活動に参加した際に残った印象と自覚できる自身の変容；
- 3 ボランティア活動中に自身に大きな影響を与えた経験、葛藤；
- 4 活動現場での支援対象者との接し方と相手から受けた影響；
- 5 現在の団体ならではの活動を継続したい理由。

本研究の内容は七つの章に分かれている。次章の第一章では、ボランティアの動機付けに関する先行文献に注目し、宗教的な視点を加えながら活動の参加と継続動機についての従来の議論を整理し、活動を継続させる暗黙的な動機付けを検討する必要性を説明する。第二章では、シュッツの現象学的社会学の主要な観点を整理し、それらと個々人の活動に対する意味づけを捉える本研究との相性を提示した上、各先行文献での現象学的アプローチの応用を踏まえ、本研究での現象学的還元の枠組みを説明する。第四章から第六章は各研究対象者のライフストーリーの記述と分析である。第三章では、災害現場で活動する宗教関連組織のメンバーの活動に対する意味づけを分析する。対象者らが所属する団体の特性とその活動の詳細を紹介した上で、対象者のライフストーリーを通じて災害救援活動現場での活動と乗り越え方を説明する。第四章では、電話相談という現場の特徴と実際研究対象者らが所属する組織を紹介した上で、対象者らのライフストーリーを通じて彼らの活動

への意味づけを捉える。第五章では、別々の活動分野にある組織に雇われる形式でボランティア活動に関わり続ける研究対象者らのライフストーリーを綴り、有償のボランティア活動という環境が活動の継続にもたらす影響を探究する。第六章では、研究対象者全員の活動に対する意味づけとその変容を整理し、それぞれの特徴と共通点を明確化した上で、個人の内に流れるストーリー、ショックな体験、宗教性を中心に長期的な活動参加者の個人的条件を明らかにする。第七章は結論にあたる。これまでの考察を踏まえて、活動が長期化する過程での〈贈与のパラドックス〉の関わり方を論述し、活動を長期化させるのに寄与する個々人の性質、経験を提示する。

第一章 ボランティア活動とその動機付け

ボランティア活動を主題とした議論は、その性質、成果、参加者の参加頻度、属性や社会的役割など多岐にわたるが、そのなかでもとりわけ重要視されてきたのが、ボランティア活動における動機付けの調査である。多くの場合、ボランティア活動は見知らぬ他者のために参加者が自身の何らかの資源（金銭、時間など）を提供して行う行為であるため、損得勘定では測りにくい。だからこそ、「人はなぜボランティア活動に参加するのか、どのような人がボランティアになるのか」を解明することは、時間や空間を問わずボランティアに関する研究や調査において注目されるテーマの一つである。

日本では、平成 25 年度（2013）から内閣府が年に一度（2016 年からは三年に一度）の頻度で「市民の社会貢献に関する実態調査」を実施しており、そのなかでは当然、ボランティア活動の参加理由に関する調査も行われてきた。直近となる 2022 年の調査結果によると、2021 年中にボランティア活動に参加したことがある調査対象者の回答では、「社会の役に立ちたいと思ったから」（59.1%）が最も多く挙げられた参加理由であった。それ以外では「自己啓発や自らの成長につながると考えるため」（34.3%）、「自分や家族が関係している活動への支援」（25.4%）、「職場の取り組みの一環として」（11.4%）、「知人や同僚からの勧め」（11.4%）も主な参加理由として挙げられている（内閣府, 2023 : 13）。

上記の調査以前、内閣府は社会福祉法人全国社会福祉協議会（以下、全社協）に「全国ボランティア活動者実態調査」を委託していた。全社協の調査が最後に行われたのは 2010 年である。その報告書によれば、ボランティア活動の参加動機として最も多く挙げられているのは「自分自身の関心や趣味から自然につながった」（39.3%）であり、それ以外では「社会やお世話になったことに対する恩返しをしたかった」、「地域や社会を改善していく活動に関わりたかった」、「地域や社会を知りたかった」が上位の動機となっていた（全社協, 2010 : 107）。

このように、日本においてもボランティア活動の動機付けに関する調査は公的機関にも需要があり、これまで一定の頻度で繰り返されてきた。そして、その結果も常に一致するわけではなく、最多の参加理由に関しては、調査の時期、主体、回答基準といった影響により、趣味・関心や社会貢献への希求といった、異なる傾向が見られた。いずれの時代においても、ボランティア活動の動機付けに関する議論は必要とされているのである。

1.1 ボランティアの参加動機

西川（2000）が「ボランティアの参加動機はなにか、これはボランティアの研究のなかでもっとも重要な課題」と述べているように、公的機関による調査とは別に、ボランティア活動の参加動機に関する学術的研究にも、国内外を問わず多くの蓄積が見られる。ボランティアの発祥地であるヨーロッパでは、活動の動機付けに関する研究は社会福祉分野で最も盛んに行われてきた。社会福祉分野のこれらの研究には量的調査（Marx, 1999; Omoto and Snyder, 1993）や質的調査（Chambr'e, 1993; Snyder, 1993; Yeung, 2001）によ

るものがそれぞれ存在し、その結果も様々だが、ボランティアの動機付けのテーマとして利他主義、社会との繋がり、個人の関心、感情的欲求などを挙げた研究が複数存在する。特に利他主義はボランティア活動の参加動機を検討する際の主な争点の一つであり、Clary (1986)、Allen & Rushton (1983) がこれをボランティア活動の特徴の一つとして捉えているのに対し、Smith (1981) はボランティアを本質的に利他的だと見なすことは誤りだと主張した。こうした流れのなかで、ボランティアの動機はより複雑な、利他主義と利己主義が混在するものとして説明されるようになった (Clary et al., 1996; Davis Smith, 1996)。

こうした思想は日本のボランティア研究にも引き継がれている。桜井 (2002, p.112) はボランティアの参加動機に関する研究には三つの「群」があるとし、それぞれを「利他的動機アプローチ」、「利己的動機アプローチ」、「複数動機アプローチ」と名付けた。桜井によれば、この分類の根拠は、それぞれの研究者によるボランティア活動の動機構造に対する見方の相違にあるという。ボランティアの参加行動を「利他主義」の精神の表出として捉える見方が「利他的動機アプローチ」であるのに対し、「利己的動機アプローチ」は何らかの見返りを期待したものと捉える見方であり、活動の報酬やコストの増減によって常に影響されると主張している。一方、海外と同じく近年のボランティア動機研究の主流となっている「複数動機アプローチ」は、人々がボランティア活動に参加する動機の構造は複雑なものであり、さらにそれは個人差があるものだと捉える。いわば、利他主義と利己主義が混在するという見方である。

そして、桜井 (2002, p.112) は「複数動機アプローチ」の利点を「他の 2 つのアプローチと比べてボランティアの心理をより多面的にとらえることができる」と指摘した上で、このアプローチ法を採用した代表的なモデルとして Clary や Snyder による VFI (The Volunteer Functions Inventory) モデルを提示した (Clary et al., 1998; Clary and Snyder, 1991)。このモデルにおいて Clary ら (1998) はボランティア活動の参加動機をボランティア活動の心理的機能から分析し、合計 6 つの機能に分類した。一つ目は「価値機能」(value) であり、己の価値観 (多くの場合は利他的なもの) を行動で示す考え方である。二つ目は「知識機能」(understanding) であり、ボランティア活動を通して人生に役立つ実践的なスキルや知識に触れようとする考え方である。三つ目は「キャリア機能」(career) であり、ボランティア活動への参加が参加者の今後のキャリアに関わる技能と知識の習得に資するという考え方である。四つ目は「社会機能」(social) であり、ボランティア活動への参加が参加者の社会関係を強化し、交流する能力を向上させるという考え方である。五つ目は「強化機能」(enhancement) であり、ボランティア活動が精神面における参加者の自己鍛錬に資し、自尊感情を強化できるという考え方である。六つ目は「保護機能」(protective) であり、自我を守るためにボランティア活動に参加し、罪悪感など個人のネガティブな感覚や問題からの離脱を求める考え方である。

前述のように、Clary ら (1996) はボランティアの動機は複雑なものであり、複数動機の観点から捉える重要性があると指摘したが、その根拠となったのが、VFI モデルを用い

たボランティアの参加動機構造に対する個人の属性、過去のボランティア活動経験の有無や活動分野の影響に関する調査であった。その調査の結果では、ボランティアの個人の属性、過去の活動経験の有無や活動分野は確かにボランティア活動の参加動機の構造に影響を与えており、加えて個別の項目まで具体的に考察すると、一つの項目が複数の機能に影響を与えていることが分かった（例えば性別の場合、男性よりも女性の方に強い動機が見られ、特に「価値機能」、「知識機能」、「社会機能」、「強化機能」において有意差が確認された）。これに対し、桜井（2002）は分析の結果を評価する一方、これを支えるための理論や経験が十分ではないと指摘した。

VFI モデルは桜井・桜井（2000）、富重（2002）、坂野ら（2002, 2004）によって再度検証され、その度に上記の六つの動機が確認されていることから、その考案された欧米社会とは文脈が異なる日本社会にも適用可能な適合性があり、信頼性が高い尺度であると考えられる（桜井, 2002; 上床, 2023）。また、伊藤（2011）はあえて VFI モデルが示した六つの機能を利他的動機、利己的動機として分別することを試みた。その結果、利他的動機には参加者の利他的な価値観を評価する「価値機能」が当てはまり、個人の成長への影響に注目する「キャリア機能」と「知識機能」は利己的動機に分類された。そして、「社会機能」は社会的報酬、「強化機能」と「保護機能」は心理的報酬につながる動機であると指摘された。一見すると、「価値機能」以外では利他的動機がほとんど確認されないのだが、実際のボランティア個人の活動参加にはこれらの動機が複合的に関わっていると考えられる。

VFI モデルはボランティア活動が参加者に果たす機能を軸に分析し、理解しやすい枠組みを提示しているが、日本のボランティア活動の動機構造研究では既にこれを超えた数の次元が確認されている（桜井, 2002）。そのため分析の段階では、より網羅的な分析尺度の導入が求められてきた。その代表的なものとして Cnaan & Goldberg-Glen（1991）のモデルが挙げられる。このモデルはボランティア活動を行う参加者の考え得る動機を計 28 項目にわたって網羅的に挙げ、それに基づいて実際のボランティア活動経験者を対象に調査した結果、そのうち 22 項目の有意性が検証されたことで確立された。桜井（2002）と谷口（2001）は、このモデルの日本の文脈での運用を試みた。

桜井（2002）は Cnaan & Goldberg-Glen（1991）のモデルの中から日本のボランティアの社会的文脈になじみにくい「人々が助け合うのが神の期待に添うから」という 1 項目を取り除き、残った 27 項目を採用した。因子分析の結果、①「アイデンティティ形成や自己成長感を求めてボランティア活動を始める」傾向のある「自分探し」、②「よりよい社会を創り出すから」といった理想と「価値ある行為」、「恵まれている立場の恩返しの意味」といった利他的な動機を示す「利他心」、③「自分がやらなければだれもやらないから」、「社会の不公平を変える機会」といった理念を実現したい姿勢を表す「理想の実現」、④自分を試し、将来に役立つスキルを身につける意志を示す「自己成長と技術習得・発揮」、⑤活動自体に新しい体験を求め、楽しむことを望む「レクリエーション」、⑥「以前からこの組織やスタッフと関わりがあったから」、「さそわれた」といった他律的な姿勢を示

す「社会適応」、⑦「自分は利用者と同じような境遇で（だったので）、よりよい活動が利用者に対してできると思ったから」で表される「テーマや対象への共感」の 7 因子を抽出している。

一方、谷田（2001）は Cnaan & Goldberg-Glen（1991）のモデルをアレンジした上で、ボランティアサークル所属の大学生を対象に活動参加、継続する場合の動機について調査を行った。因子分析の結果、①サークル活動の一環（興味ある活動の一環として軽い気持ちで開始）、②利他心（利他的経験のなかで働いている欲求や感情）、③福祉ボランティア活動の大切さを実感、④民主的社会的理想の実現、⑤不充足感（寂しく満たされない感情から逃れるため）、⑥周囲の人々の期待、の 6 因子を抽出している。桜井（2002）と谷田（2001）の研究はまさに前述した複数動機アプローチに基づく調査研究に含まれる例であろう。近年では、複数動機アプローチによるボランティアの参加動機の研究が主流となり、それらの研究で抽出された因子は、分野によって変わることもある。

例えば、緊急時のボランティア活動として災害ボランティアが挙げられるが、高木・玉木（1996）は阪神・淡路大震災後のボランティア活動参加の動機を検討する際に、①共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容（「被災者が気の毒に思えたので」、「自分が援助しなければならないと感じたから」など）、②他者による援助要請（「援助するように直接誰かに頼まれたので」）、③利得・損失計算（「援助すれば何らかの報酬や返礼が期待できたから」、「援助しないためにこうむる犠牲が大きかったから」など）、④良い気分の維持と高揚（「援助しようと思ったときに気分が良かったから」など）、⑤好ましい援助・被援助経験（「以前にこのような経験をして良い気持ちになった経験があったので」、「今までに誰かに援助されて助かった経験があったので」）、⑥被災地との近接性（「自分が被災地の近くに住んでいるので」など）、⑦被災者や被災地への好意的な態度（「被災地の神戸やここにすんでいる被災者たちが好きだから」、「被災地に知り合いがいたから」など）といった七つの因子を挙げた。この研究において、少なくとも⑥と⑦の二つの因子は災害ボランティアにのみ抽出することが可能な因子と考えられる。

上記の因子分析研究とは別の角度から、三谷（2016）は計量社会学の視点でボランティア活動の参加者の背景を検討した。三谷（2016）は国内外における人々がボランティア行動に至る背景を説明する従来の仮説群を、①資源理論、②共感理論、③宗教理論、④社会化理論の 4 つに分類し、全国調査データを二次分析することを通してこれらの群の統合化を図った。その結果、フォーマルなボランティア活動については、高学歴の影響が持続するのに対し、収入の多寡や職業の有無、職位の差の影響は弱まったことが分かり、1990 年代以降に長期化した不況に起因するボランティア活動の“脱階層化”の可能性が見出された。一方でインフォーマルな援助行為については、ボランティア・NPO 活動への参加傾向から見ると、収入や学歴の低さが援助実施に結び付くことが確認されたが、その背景として高齢者ケアの専門職化やボランティア活動の多様化等が指摘された。これに加え、心理的要因である「共感性」と「宗教的態度」がフォーマル、インフォーマルなボランティア活動を促す効果があることも指摘され、特に近隣の人々の支援行動に日常的に接する社会化過

程の持つ効果の大きさが強調された。

さらに視野を広げると、行為の動機づけを包括的に捉える自己決定理論を用いたボランティア活動の動機付けに対する検討も行われてきた。自己決定理論では外発的動機付け（その活動自体ではなく、その外部にある目標を達成するための手段としての動機付け）と内発的動機付け（その活動自体にやり甲斐を見出し、自ら働きかける動機付け）が強調されている。Güntert, S. T. ら（2016）は自己決定理論の観点から、Clary ら（1998）が提示した VFI モデルに含まれた 6 つの因子を自己決定動機と制御的機能に分類した。自己決定動機には「価値機能」と「知識機能」が当てはまり、周囲に対する順応、同調が強調される制御的機能には「キャリア機能」、「強化機能」、「保護機能」と「社会機能」が含まれていた。

このように、ボランティア活動の参加動機は従来の研究で多くの分野、理論とアプローチ方法によって解明されてきた。これらの議論では、研究対象、方法などの相違により抽出された因子、分析の結果には一部相違も確認される一方、全ての議論に通底しているのはやはり利他的な因子、利己的な因子（または各因子における利他的・利己的な側面）に対する検討と分類である。そもそも、ボランティアの特徴として「無償性」が指摘されている以上、その活動における利他的な志向の有無やその必要性が繰り返し問われるのは当然である。日本の議論においても、遡ればボランティアに関しては社会福祉分野より拡散する前から「他者志向的動機」と「自己志向的動機」（野上, 1974）、「社会的ボランティア動機」と「個人的ボランティア動機」（長ヶ原ら, 1991）というような二元的な議論が既になされていた。言い換えれば、ボランティア活動の動機付けを議論する際に、「利他主義」は決して避けられない概念なのである。

「利他主義（altruism）」は利己主義（egoism）の対概念としてフランスの社会学者オーギュスト・コントによって造られた造語であり、日本では稲場（2011）がこれを「社会通念に照らして、困っている状況にあると判断される他者を援助する行動で、自分の利益を主な目的としない行動」と定義した。コント（1844）は、『実証精神論』のなかで人間の精神史の発展に対し「三段階の法則」を提示した。同書によれば、その最終的段階としての「実証主義的」段階では人が持つ他者への関心は「人類」というより普遍的な概念へ広まり、同種の共生関係を求める概念に至る。これは「利他主義」が発生する段階とも考えられる（加藤, 1997）。「利他主義」はその発見以来、長い間社会学の研究者によって重要視されてこなかったが、近代になりこれに研究の焦点を当てたのがピティリム・ソローキンである。人間の善なる面、つまり、他者への思いやり、利他主義を研究するべきだという信念から「利他主義研究センター」を設立したソローキンは、「いかにして、人は利他的になるのか」に焦点を合わせて、アメリカにおける「善き隣人」とカトリックの聖者たちが示す利他性に関して研究を行った。第二次世界大戦後、ほとんどの学術的研究関心が人の負の側面に集まり、センターが設立されていた間には注目を集められなかったソローキンのこうした研究だが、20 年代末期から再評価されるようになった。特に彼が提示した「善き隣人」の人物像こそが、現代社会に求められている人々の生き方であると位置

づけられた。その背景として経済、取引市場のグローバル化とともに、通信手段もまた大きく発展し、人々はグローバル化により多様な文化との関係を問い直され、個人の幸せとともに多文化の共存が求められたことがある。ソローキンの研究が再評価されてから利他主義に関する研究が多くなされ、そのなかでは宗教的利他主義に関する研究も含まれていた。欧米主導の宗教的利他主義の研究では、教会参加がボランティア活動をはじめとする様々な利他的行為の重要な要因と分析される（J・Wilson, T・Janoski, 1995）。Gerard（1985）は教育、収入、年齢は利他主義と相関がなく、宗教的コミットメントのみが利他主義と正の相関を持つことをヨーロッパ価値観調査の結果に対する分析のもとに指摘した。

このように、ボランティアが誕生した西洋社会ではその根幹に関わる「利他主義」は、しばしば宗教的信仰と関連づけて検討されてきた。それにも関わらず、桜井（2002）が「人々が助け合うのが神の期待に添うから」という因子を自らの分析モデルから取り除いたことに見られるように、日本でのボランティア活動動機付けの説明を目的とした因子分析の多くでは、「利他主義」は単なる VFI モデルにおける「価値機能」を代表する一要素にしか見られず、宗教への言及は避けられていた。しかし、一見すると無宗教者が多い日本社会でも、宗教的信仰がボランティア活動をはじめとする多様な社会貢献活動に寄与していることは既に指摘されている。

序章で述べたように、日本社会という文脈のなかで考察する場合、ボランティア活動はその源流の一部を宗教信仰に基づいて行われた「奉仕活動」に見ることができる。世界における主要な宗教の教えに注目すると、仏教が提唱する慈悲の念や利他行、キリスト教新約聖書で記述された「よきサマリア人」、イスラムの五つの信仰義務の一つやユダヤ教の經典で説かれる喜捨など、多くの宗教はその思想、教義の中にすでに利他的な要素を含んでおり、実際には古くから社会貢献活動に強く関与していることは明白である。後期近代では政教分離に影響され、地域における宗教組織の重要性が希薄化し、抱えてきた公共の機能も縮小してきた。これは、宗教組織が近代化する社会との接点をなくしつつある状態とも言える。そんななかで、1995年に発生した阪神・淡路大震災では、現場に駆けつけたボランティアの中に宗教関連のものも確認された。これを機に、ボランティア活動は急速な活発化を見せたが、その際にボランティア活動に参加する団体の一形態として宗教を基盤とする組織の存在が確認された（稲場・桜井, 2009）。宗教関連組織が「新たな公共」の担い手という新たな社会的役割の獲得に挑戦したのである。

欧米の宗教社会学研究では、R・パットナム（2006）はボランティア活動を行う際に宗教の関与は「特に強力な予測変数」とであると分析し、宗教参加とボランティア活動参与との間に存在する有意な相関を示した。それ以前でも J・ウィルソンら（1995）が社会貢献活動へ参加する傾向には宗教それぞれの差があると示唆し、ボランティア活動に対する神学的な解釈と教会活動の頻度が重要であると指摘した。欧米と比較して、より世俗的に見える日本の社会で宗教参加は、欧米で行われた研究の結果のように社会活動への参与度に強い影響をもたらしているか否かを明らかにするために、寺澤（2012）は JGSS のデータを元に分析を行った。その結果、「宗教施設参加頻度」において「定期的参加層」は「非

参加層」や「行事参加層」よりもボランティア組織に所属する傾向が高く、「非参加層」よりボランティア活動を行う傾向が高いことを明らかにし（寺澤, 2012）、日本においても宗教参加と社会貢献活動との間には有意な相関があることを実証した。一教会に視点を絞った場合でも、稲場（1998）は立正佼成会を対象とした研究のなかで、法要・集会・法座に参加する人ほど教会のボランティア活動に熱心であるという結果を示した。これに類似した議論として、前述した三谷（2016）は「宗教的態度」を掲げ、自宅に仏壇を置くことから見られる個人的な祈りや神仏によって生かされているという広義の宗教観が社会活動への参加を促進すると主張した。

また、前述した「利他主義」については、21 世紀を迎える前後で日本でも議論が展開されるようになり、その際に宗教と利他主義との関係も論じられた。稲場（2011）は宗教者の利他的行動の主な動機を共感、合理的選択と救済論の三つに分類した。稲場によれば、ここでの共感とは困難な状況にある人への共感や感情移入であり、彼の研究で取り上げた二つの研究対象では「神からの愛に通じる」や「他人の苦痛を自らも感じる」といった異なる表現法が存在した。次に合理的選択について、稲場はこれを利他的な行動が自らの利益にもなるという観念に基づいた自己の行動選択だと説明した。そして、救済論に関して、稲場はヴェーバーの救済論に基づき、救済への希求は信者の利他的行動に結びつくと論じた。これらの動機はいずれも的確であるが、同論における調査結果を吟味すれば、信仰の相違によってこれらの動機が違う形で表現され、その程度に差があることにも注目すべきだと筆者は考えている。また、同書で稲場は宗教者の利他的精神が発達する要因についても説明した。先述した動機と同じように、彼は要因を説明する際にも三つを挙げ、それぞれを教義と宗教的实践、ロールモデル、共同生活・友情関係だと指摘した。これらはいわゆる宗教が信仰者に提供する生活環境そのものを表していると筆者は考えており、信仰者は教義の実践を目的として努力し、そのためにロールモデルを自らの模範とするとともに、同じ信仰、同じ志を持つ者との相互作用によって互いの目的を達成するイメージだと解釈している。

一方、日本ならではの研究対象として、神社神道と社会貢献に関する研究も増えてきている。藤本（2009）は近代から現代にいたる「神道」と「福祉」との関連性について論じており、板井（2011）は鎮守の社に象徴されるような「場」としての神道に注目した。近年では、神道文化そのものの社会的役割に注目した黒崎（2019）は、地域再生、メディアと災害復興の三つの視点から神道文化に関する事例を考察し、地域をつなげる「宗教文化資源」としての神社像を見出した。こうした「場」として地域をつなげる機能は神社のみではなく、仏教の寺院にも見られた。その際、「場」を維持、発展させる担い手として、地域のボランティアの姿が確認された（大河内, 2022）。この場合、ボランティア活動の「場」を提供する寺院は参加者の動機付けの一環として機能していると考えられる。

本節では、筆者はボランティア活動の参加動機に関する先行文献の概観を行ってきた。日本の場合、従来の研究では VFI モデルや Cnaan & Goldberg-Glen（1991）のモデルに基づいて行われるものが多く見られ、災害、スポーツ、地域活動など分野による差異が存在

する一方、それらの結果の多くは抽出した因子を利他的・利己的・両方の性質を有するものとして分別した。これに対し桜井（2002）が提唱した「複数動機アプローチ」は後の研究の主流となった。ボランティア活動の参加者個人の参加動機が各調査で抽出したどれか一つの因子のみではなく、複数の因子によって構成されているというこの考え方は、ボランティア活動の動機付け研究の目をより参加者個人へと向けさせ、個人の中の複数動機の構造を考える必要性を提示した。しかし、今回レビューした従来の研究はボランティア経験のある人、あるいは一般の大規模な集団に対して質問紙調査を実施して因子を抽出するという調査方法を採用したものがほとんどである。こうした研究では集団全体の平均的な動機の構造の説明ができて、各個人の各動機の関連づけ、または生成プロセスの説明は難しい。そのため、視点をさらにボランティア活動参加者個人に絞った調査が必要だと考えられる。最後に、例えばVFIモデルの中にある「価値機能」、「知識機能」のような、短期間での活動参加では目的の達成には至らない、あるいはそもそも達成すべき目標が不確かである活動参加動機は、長期間の活動に寄与し、活動の継続要因に転化する可能性があるため、本節で明らかにした参加動機の一部は引き続き継続要因として検討を重ねるべきである。

1.2 継続要因になりうるもの

「人はなぜボランティア活動に参加しているのか」についてある程度の理解を得ると、「なぜ人はボランティア活動を継続しているのか」という次の問いが現れるのも容易に想像できる。そのため、ボランティア活動の動機付け調査において、参加動機は常に注目されているが、継続要因もそれに結びつく形で検討されている。実際、内閣府による「市民の社会貢献に関する実態調査」では、「ボランティア活動に参加した理由」に続いて、「ボランティア活動への参加の妨げとなる要因」という調査項目も設けられた。直近の2022年の調査結果³によれば、調査対象者がボランティア活動に参加できない・できなくなった主な理由として「参加する時間がない」（45.3%）、「ボランティア活動に関する十分な情報がない」（40.8%）、「参加する際の経費（交通費等）の負担」（23.1%）が挙げられた。その他にも、「参加するための手続きがわかりにくい」（21.2%）、「一緒に参加する人がいない」（14.5%）、「ボランティアを受け入れる団体等に不信感がある」（9.7%）などが理由として指摘されている。この設問は直接活動参加、継続要因を問うものではなかったが、より多くの人に継続的なボランティア活動に参加してもらう策を講じる際の参考資料を提供できるという点において、ボランティアの継続に関わるものだと考えられる。

序章で述べたように、「ボランティア」という概念自体が「自発的」という性質と強く結び付いているため、ボランティア団体にとって長期的なボランティアを募集し、維持することは困難である。この状況は国内外を問わず発生しており、特に一部の論説によれば、近年のボランティア活動は衰退の一途を辿っている（Salamon et al., 2012）。こうした現状の中こそ、「誰が長期的なボランティアになる可能性があるのか」という疑問に対する

検討は必要だが、そのための研究は未だ十分とは言えない。Arzu ら（2015）は、ボランティア活動、特にその動機付けに関する従来の研究は対象者が自己申告した動機と個人の資質に焦点を当ててきた一方、持続的な活動を潜在的に動機付けている可能性のある暗黙的・無意識的な部分を看過してきたと述べた。その理由として、桜井（2005, p.103）が指摘した「ボランティアの活動継続については、活動者自身にとってはたいした問題でないが、もっぱら活動者を取りまくその周辺で議論になりがち」な点が考えられる。調査対象者自身が暗黙の了解、または大前提として認識してしまったものは、特に質問紙調査では結果に反映されにくい。そのため、ボランティア活動の継続要因に関する従来の研究は各活動分野、研究現場の地域に限定され、それらの特徴を強く反映しているものが多いと考えられる。

日本でボランティア活動の継続要因の研究が注目されている分野の一つとして介護ボランティアが挙げられる。ホスピスボランティアはその代表的な一例である。ホスピスボランティアは終末期医療現場に多く見られ、その役割上患者に長い時間をかけて寄り添う必要があるからだ。ホスピスボランティア活動に関する海外の研究ではボランティアコーディネーターの存在（Planalp, 2009）、地域も含めた組織化の必要性（Roessler, 1999）、トレーニング受講の機会等のサポート（Paune, 2001）や友人の存在（Field et al., 1993）、適切な役割分担（Black, 1999）などが継続要因として指摘された。これらを踏まえて日本では鈴木ら（2012）が病院をフィールドとした調査を行い、「自己成長への報酬」、「自己能力活用の実感」、「自己能力活用の期待」、「環境条件の肯定的認識」の 4 つを有意な因子として抽出した後、ボランティアコーディネーターの存在の重要性を再び強調した。

環境運動のボランティアの現場でも継続要因に関する検討が行われた。その結果、大学生を対象とした調査では「組織への帰属意識」と活動における重要な他者（友人・知人）からの期待からなる「主観的規範」が有意な因子として抽出された（安藤・広瀬, 1999）。これに対し、高齢者を対象とした調査では「年齢」と「参加者同士の交流の機会がある」が抽出され（町田, 2022）、組織への帰属意識の重要性がより強調されたとともに、定年による退職が活動時間の確保に繋がり、長期的な活動に寄与する効果も確認された。電話相談ボランティアの現場では深夜のシフトが多く、通話環境が個室であるという活動の特徴から、電話の対応を活動者が 1 人で行うのが通例であり、そのためにボランティアの個人要因としてのレジリエンスが重要視されている。前田・伊藤（2025）によれば、電話相談活動では「獲得的レジリエンス」がボランティアの長期継続動機に正の影響を与えていると指摘された。言い換えれば、ボランティア本人がもともと持っている資質としてのレジリエンス力よりも、活動を通じて自他双方の相互理解を意識した際に獲得した対応力の方が重要性は高いという考えである。

特定の活動分野に限定されず、より一般的な活動現場で行われた調査もいくつか存在する。例えば米澤（2010, p.39）は、ボランティア連絡協議会のボランティアを対象に質問紙調査を実施し、それらの主な活動継続理由として「自分の辛さや苦しさを相談できる相手の確保」とボランティア活動での「楽しさ」を提示した。コミュニティカフェをフィー

ルドとする村社（2018）は、援助対象者との積極的な双方向体験から生じる活動への意欲と無理のない活動形式から生じる活動参加の気楽さを活動の継続理由として述べ、それぞれを「推進機能」と「維持機能」と名付けた。上記の調査現場の特性を軸にした研究群とは異なり、特定のテーマからボランティア活動の継続理由の探究に寄与した議論もわずかながら存在する。Arzu ら（2015）は、継続的なボランティア活動に対する暗黙的な動機付けの効果を確認するために、中国、ドイツ、トルコ、アメリカの 4 カ国において文化的文脈を跨いだ調査を行った。結果、国家や文化圏による有意差こそ見られなかったものの、Arzu らはボランティア本人による自己申告などの明示的な動機付けとボランティア活動の継続との正の関係を再確認した。さらに、明示的な動機付けとボランティア活動の継続との正の関係は暗黙的な動機付けのレベルが高いほど強くなるという潜在的な相関を提示した。また、この研究では個人の育った家庭環境が暗黙的な動機付けの一つの要素として規定されているが、Antonia ら（2025）は家庭環境について、親のボランティア活動の参加歴は子どものボランティア活動への継続的な関与に大きい影響を与えていると指摘した。

一方、日本では桜井（2005）が長期的なボランティア活動の参加者の年齢に注目し、ライフサイクルの視点から活動の継続要因を検討した。この研究で特筆すべき点は、桜井がボランティアの活動継続要因を、①個人的要因（demography/personal variables）、②参加動機要因（motivational variables）、③状況への態度要因（situational/attitudinal/organizational/managerial variables）という3つの種類に分類したことである。桜井（2005）によれば、①個人的要因は個人の背景、パーソナリティを反映する変数であり、②参加動機要因は活動参加動機の個人差による活動継続への影響を反映する変数である。そして、③状況への態度要因は活動のなかでボランティア自身が感じた「認知態度（特に満足感）」を反映する変数であり、桜井はこれを3つの種類のなかで唯一ボランティア組織側が調整できる変数だと述べた。その具体的な要因の項目として、組織によるボランティアへの配慮が活動を促す「組織サポート」、ボランティア活動の内容と参加者との相性を表す「業務内容」、ボランティア活動を通じて形成される人間関係や集団性を表す「集団性」とボランティアが社会に対し役割を果たしている自認を表す「自己効用感」の4つを挙げた。調査の結果、状況的態度要因の4つの項目のなかで、若年層ボランティアでは「業務内容」、壮年層ボランティアでは「集団性」、高齢層ボランティアでは「自己効用感」が活動の継続性に最も有意な正の影響を与えていたことが指摘された。また、桜井は同研究において、それまでボランティア活動の典型的な動機である「利他主義」が活動の継続にさほど寄与していなかったとも指摘した。言い換えれば、利他的な動機はボランティア活動の参加を促すものの、その活動を維持するための情熱や意志の提供には効果が薄い可能性が考えられる。

宗教によるボランティアの活動動機付けに関する研究も宗派別、活動類型別、事例別で多数行われてきた。そのなかでのボランティア活動の継続要因に関連する先行議論の整理を試みた者も存在する（陳, 2022）。陳によれば、既往の研究では、宗教団体に関連するボランティア活動の存続要因として主に指摘されたのが信仰、教団内部の支援、キーパー

ソンの存在の三つである。この三つのなかで最も理解しやすいのは、恐らく信仰であろう。仏教が提唱する慈悲の念や利他行、キリスト教新約聖書で記述された「よきサマリア人」、イスラム教の五つの信仰義務の一つである喜捨など、多くの宗教はその思想、教義の中にすでに利他的な要素を有している。具体例でいえば、天理教の災害救援ひのきしん隊の場合、そもそも隊の名前の中にすでに天理教の信条の一つである「ひのきしん」が入っており、この信条こそが「天理教および天理教信仰者が社会的活動を行う際のきっかけや意欲、主体性を内発させる根拠となっている」（渡辺, 2011）。

教団内部の支援もまた、宗教関連の災害ボランティア組織の存続に深く関与している。こうした支援でよく見られるのは地の利と人の和である。まず、「地の利」だが、災害ボランティア組織はその存在意義として、ニーズに応じて全国各地の被災地へ飛び回る必要があるが、これを他の組織よりも成立させやすくしているのは、それぞれの宗教が各地に展開する教会施設である。真如苑 SeRV は平常時の備えとして、100 を超える全国の真如苑施設に防災訓練などの地域活動を展開し、緊急時のための基盤を構築してきた。2011 年に発災した東日本大震災では、他地域から駆け付けて救援活動を展開する新宗教の信仰者は同じく被災者である現地の教会の信仰者たちによってサポートされていたことが指摘された（藤井, 2019; 寺田, 2019）。一方、「人の和」に関して論じた高橋（2014）によれば、立正佼成会のインドシナ難民支援の事業の発展と持続化はそれとほぼ同時期で行われていた教団の変革と深く関わっていた。高橋によれば、立正佼成会が多岐に展開する社会貢献活動の裏には開祖である庭野日敬の意向の強い影響があった。高橋が取り上げたインドシナ難民への支援活動も当時展開されてから間もない WCRP（世界宗教者平和会議委員会）を通して国際問題への関心が高まった開祖の決断によるものである。

最後に、キーパーソンは、宗教組織に限らず、組織の存続のために欠かせない存在である。世界規模でボランティア活動を展開している曹洞宗関連の NGO シャンティ国際ボランティア会（SVA）がその一例である。大菅（2006）によれば、団体のキーパーソンといわれる有馬実成は曹洞宗の一僧侶でありながらカンボジア難民への支援に対し強い関心を寄せ、曹洞宗による支援組織の創設に尽力し続けてきた。SVA が創設された後も、彼は SVA の専務理事を担当しながら、国際協力 NGO センター JANIC や東京災害ボランティアネットワークなど他の組織でも役員を担当し、国際協力、災害救援の領域における自らのネットワークを生かして SVA を後押しし続けてきた。本稿の研究対象の一つである金光教大阪災害救援隊もまた、その活動様式、人員募集の方法から、キーパーソンと密接に関連している災害ボランティア組織である（陳, 2022）。こうしたキーパーソンらは自身のリーダーシップとネットワークを駆使することで、他のメンバーを引率するポジションでありながら組織内外の架け橋としての役割を常に果たしている。

以上の三点に加え、本研究では災害ボランティア活動を行う宗教関連組織を支えてきたもう一つの要因として「利他行ネットワーク」を追加したい。稲場（1998）は「利他行ネットワーク」を「自由意志で、他者を思いやり行動する、あるいはそのように努める人々の緩やかな人間関係」として定義した。「利他行ネットワーク」は、島藺（1992）が言及

した「和合倫理」を一部参考にしているが⁴、そこで排除されがちな「和を求めてない」対象に対しても働きかける志向があるとされている。新宗教に親和性があり、「宇宙全体を一つの生命の現れと見るような思想」とされた「生命主義的救済観」も「利他行ネットワーク」の参考元の一つとされている。しかし、稲場によれば、参考となったのはあくまでもそれが新宗教の大教団化に伴って希薄化し、信徒の日々の内省や社会貢献活動を含む実践活動を示す傾向として残された「修養主義」と「社会改良主義」への親和性である。稲場はさらに「利他行ネットワーク」について、自身の利益を主な目的としない、流動的で、固定化された集団ではない、排他性のある内部の相互扶助にとどまる人間関係ではないと説明した。そして、「深いつながりを持つ共同体が崩壊した近代以後」の宗教団体に時と場合によって形成される緩やかな人間関係だと提示している。「利他行ネットワーク」の概念は、宗教の実践と理念によって誕生したものであるが、その影響が及ぶ範囲は決して宗教という世界に留まらない。利他行を行う大衆も活動で出会った宗教者によってこの緩やかな繋がりを身につけ、広く伝播していくと考えられる。

本節では、これまで先行研究におけるボランティア活動の継続要因に関する諸論説を整理してきた。ここでは従来の研究のなかで最もポピュラーな桜井（2005）の類型論に基づいて既に提示されている継続要因の分類を行った（表 3）。ただし、桜井が提示した活動の継続要因の類型③「状況への態度要因」では「集団性」の項目で活動現場における支援者同士の縁による活動継続への促進が言及されている一方、支援者として支援される側との接触で生じる縁については提示されていなかった。本研究では、特に活動においてボランティアがいかに自身と他者の関係の絶え間ない変化から活動を捉え直し、継続動機を確保していくのか、その意味変容のプロセスの解明に重点を置きたいため、ここではあえて「状況への態度要因」の具体の項目の中に「現場での縁」を増やし、類型名を「状況での認識要因」に変更した上で分析の枠組みとしたい。

状況での認識要因				
組織サポート	業務内容	集団性	自己効用感	現場での縁
ボランティアコーディネーター （Planalp,2009；米澤,2010）； 組織からの支援、スタッフへの満足度 （Pierucci and Noel 1980；Paune,2001；高橋, 2014）； 組織化の必要性（Roessler,1999）； 信者同士の助け合	経験差による役割意識 （Black, 1999）； 業務達成、仕事の挑戦感 （Gidron,1985）	友だちの存在 （Field et al.1993）； 他のボランティアとの関係 （Gidron,1985；安藤・広瀬,1999；町田,2022）； キーパーソン （大菅,2006；陳,2022）； 組織への帰属意識 （安藤・広瀬,1999）	「楽しさ」 （米澤,2010；村社,2018）； VFIモデル （Clary et al.1998） 獲得的レジリエンス（前田・伊藤 2025）	活動に対する宗教的解釈、被災者との信頼関係 （陳,2022）； 被災地や被災者への好感度（高木・玉木,1996） 推進機能 （村社,2018）； 利他行ネットワーク（稲場,1998）

い(藤井,2019、 寺田,2019)				
------------------------	--	--	--	--

表3 先行文献における状況での認識要因とそのカテゴリ

本研究における「現場での縁」では、表3から見られるように、ボランティアが現場で被支援者、同じ時間、空間、感情を経験することによって生じる関係性である。そうした関係性は余所からは観測しづらい(例：活動に対する宗教的な解釈)か、過剰なもの(例：被災者との信頼関係)として扱われる可能性が存在する。これを活動の継続要因として機能するためにはボランティア本人による意味付けに頼る必要がある。また、本研究の分析のなかでは「集団性」で既に提示されている「他のボランティアとの縁」もこのカテゴリの中に入れたいのだが、その際に本研究の主張として、「現場での縁」に帰属される「他のボランティアとの縁」はあくまでも時、空間を共有する「共在者」(この概念は次章で詳述する)の経験から培った関係性だと予め指摘しておきたい。

表3に見られるように、従来の研究ではボランティア活動の継続要因に関する検討は分野、視点の相違が多かったものの、それらの結果として抽出された因子の大多数には共通する性質が見られ、理論的飽和に達しつつあるように見える。しかし、研究の手法まで追及する場合、これらの研究の多くは大人数に対する質問紙調査によるものであり、そのために調査対象者の回答から抽出できる因子は表出的な特性、またはある程度完成された形を有している。これは、Arzuら(2015)が指摘した明示的な動機付けと似ている。こうした明示的な動機付けはボランティアの活動継続要因を簡潔に表している一方、特に「状況での認識要因」の場合、諸要因の獲得までにそれぞれのボランティアが経験した葛藤、本人の性質と要因の獲得との関係など、要因の獲得、変容プロセスを十分に説明することが困難である。

例を挙げると、統計データからはボランティアの活動参加経験の有無による新たなボランティア活動の参加への影響を明らかにすることは可能だが、参加した本人のその経験に対するイメージの善し悪しとその理由や体験中における衝撃的な体験の有無とその影響など、その活動が本人のその後のボランティア参加に対する直接な影響の有無とそのプロセスまで洞察することはできない。要するに、このようなデータに基づいた考察の結果では暗黙的な動機による影響が反映されておらず、そのため現場で活動する個人のバーンアウトや他の葛藤に対応する際にこれらが発生する本質的な理由にたどり着かず、適切な方法

が見つからずに失敗する。先述した桜井(2005)もライフコースによるボランティア活動への態度と活動継続要因を対象とした検討の不足を指摘している。つまり、従来の統計データに基づいたボランティア組織側、または社会動員論の視点からのボランティアを増やす対策の制定は可能だが、その実施現場で発生しうる様々な状況への対応が不足したり、柔軟性を欠いたりする恐れがある。

総じて言うと、長期的なボランティア活動の参加者がいかに活動の継続要因にたどり着くのか、彼ら・彼女らが現場で活動に対して、何をきっかけに、いかに意味づけを行っていったのかに対する考察が——言い換えれば、Arzu ら (2015) の言う暗黙的な動機付けの部分に対する考察が——日本の現場でも不十分だと言える。そのために、本研究では長期的なボランティア活動の参加者である少数の個々人を対象とし、彼ら・彼女らの継続要因の獲得プロセスとそのなかで起きる自己変容の解明を目指していく。

第二章 現象学的アプローチの応用

本研究では、長期的なボランティア活動参加者の活動における変容と活動の継続理由を、個人の視点から解明することを主な目的とする。前章で述べたように、ボランティア活動の参加者が活動を継続する理由は「個人的要因」、「参加動機要因」、「状況での認識要因」の3つのカテゴリに分類できる。特に「状況での認識要因」はボランティアが活動の経験のなかで新たに獲得する要因であると想定され、本研究においても重点的に考察すべき種類であると位置付けられる。そのためには個々のボランティアが活動の経験に意味づけを行うプロセスを考察する必要があるが、こうした個々人の思想や行動をそれぞれの視点を通して研究するのに適した理論として「現象学」が存在する。本章では、本研究で主に取り上げる現象学のいくつかの概念について概説し、これまで現象学的手法を用いた研究を振り返った後に、本研究で使用する現象学的アプローチの内容と手順を提示する。

2.1 A.シュッツの現象学的社会学と「生活世界」

「現象学」という言葉の語源はギリシャ語の「*phainomenon*」であり、その元々の意味は「出現」である。この概念を学問として確立させたのは19世紀後半の哲学者 E.フッサールである。フッサール（長谷川訳, 1997）は、人文科学の研究において客観的な事実の世界——「理念化」を繰り返した結果構成されたものであり、極めて特殊な理念化による「主観的形成体」である（奥村, 2001）——に固執する自然科学的研究方法を採用することは不適切だと考え、その代わりに「事象そのものへ」というスローガンとともに現象学を提唱した。その内容とは、物事が示すものを、体験している事象そのものの側に立ち返った視点で捉え、アプローチするという研究姿勢である。すなわち、現象学は人の「主観」と「客観」という2つの認識の次元を認めた上で、人が物事を認識する際には一旦己の意識の外部に「客観」が存在するという確信を保留し、その「客観」に対する確信が成立する証拠を物事自体の「主観」から求める考え方であり、このような「主観」と「客観」の本質的な関係の究明を目指した学問である。そして、「主観」からのアプローチで我々が得ようとするのはその物事の「本質」だが、ここで言う「本質」は個々の「主観」の直接経験から生み出された意味に基づくもので、多くの主観によって共有されうる物事であると考えられる（植田, 2012）。この「本質」を基礎づける様々な意味が求める次元として、同じくフッサール（1962）によって提示された「生活世界」という概念が挙げられる。

「生活世界」という概念は社会科学に親和性がある概念だとされているが、その内容は提唱者であるフッサールからシュッツを経てハーバマスへと継承されていくなかで常に展開されつつあり、ルーマン（1986）はこれを「今世紀の最も稔り豊かな造語のひとつ」と指摘した。フッサール（1968）はその未完成の著作『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』において「生活世界」に対する理解を示したが、その内容には内在的世界、外在的世界、個性、歴史、文化、感情、経験、意味など、我々の生活に関する全てが含まれて

いた。このことに関しては、この概念を引き継いだシュッツとハーバマスも受け入れている。フッサール（1986＝細谷訳 1995：145）によれば、「生活世界」は物事の源泉となる領域であり、「われわれのあらゆる現実的・可能的実践の普遍的領野として、したがってあらゆる学的に解釈された世界の基盤として、われわれにとってつねにあらかじめ直観的に、直接的に与えられてある世界である」と述べている。さらに、これを「単なる事物的世界でなく、私にとっての価値世界・財貨世界・実践的世界などの、主観的な意識と相關的な意味連関の地平」だと提示した。したがって、「生活世界」は主観的な意味世界としても理解できると考えられる。

つまり、フッサールにとって「生活世界」は科学的思考だけではなく、日常的思考をも含んだ全ての思考が前提としている領域である。そこでは、人々が自覚しうる明確な目的、または意志で行った行動であっても、その奥にはもう一つの、潜在的で自覚しづらい理屈がこの行動の選択を支えている。この場合、一見主観的に行った行動でも、実はその根底にある論理によって受動的に行ったものだとして解釈できる。奥村（2001）はこの背景にある論理が含まれた世界を「感性的所与の世界」と指摘し、その内実を「主観的理念化に拘束された理性には到達できない倫理的基準とは別の明らかなさをもって与えられており、思考的理性はここで世界が開かれていることに基礎づけられていながらこれを忘れていた」といったものである」と述べた。本研究にとって、ここで特に重要なのは、「感性的所与の世界」、あるいは、その個々の単位である行動の背景にある論理は、常に忘却されているという点である。なぜなら、ボランティアのみならず、あらゆる活動の動機付けは、活動参加者それぞれが自明的に有している根底の論理によって行われ、改変されてきたと考えられるからである。

フッサールの「生活世界」概念は哲学の概念として抽象的な性質を持っているが、これを社会科学に应用できるよう再構成したのがシュッツである。シュッツはパーソンズの「主観主義の不徹底」を指摘し、その主張を「行為の主観的範疇を分析せずに、むしろ行為の主観的見地を科学的に記述するための客観的範疇を分析している」と批判した。シュッツによれば、実証主義に基づいて行われた従来の研究で扱われてきた「社会的事実」は客観的なものではなく、あくまでも社会学者の二次的構成によって形成された主観性のある客体に過ぎない。そして、社会科学において真に注目すべきなのはこうした「社会的事実」ではなく、社会的事実に含まれた意味そのものであり、その意味の基礎こそが「生活世界」である。シュッツにとって、「生活世界」は現実の社会世界を内包した世界だとも言えよう。その「生活世界」の中には、シュッツが注目していた社会的世界も含まれている。

シュッツは社会的世界を深く読み解き、これを最終的に人々の間の「我々関係（we-relationship）」の解説に应用する試みとして、その構造を時間、空間、社会の3つの視点から詳細に分析した。シュッツ（Schutz, 1932, 1971; 西原, 1998）はまずそれぞれの視点に分別するための基準を設けた。具体的に説明すると、時間には同時期、前人の時代と後の時代があり、空間には現実的な力が及ぶ世界、潜在的に影響可能な世界があり、社会に

は直接経験可能な他者と間接的に経験する他者がある。そして、シュッツはこれらの基準に基づいて社会的世界を、①直接世界（Umwelt：私という存在が確認されている今の世界、ここでの他者と私との間には直接的な関係が存在する）、②同時世界（Mitwelt：私と同時期であるが、その空間には私がない世界）、③先行世界（Vorwelt：私の生に先行して存在する世界）、④後世界（Folgewelt：私の生が終わった後の世界）という4つに区分した上、行為を理解するために必要なそれぞれの世界における他者のことをそれぞれ、①共在者（Mitmenschen）、②同時代者（Nebenmenschen）、③先行者（Vorfahren）、④後続者（Nachfahren）の4つとして名付けた。シュッツによれば、社会的世界における人は直接的な経験をもって共在者を知り、さらに間接的な経験を通じて同時代者を知るのである。

シュッツの「社会的世界の諸次元」の定義は、フッサールが提示する「生活世界」の概念を補強すると同時に、その「意味」を求める性質をより発揮しやすいようにした。この定義の試みのなかでは、「意味」を追求する際の「時間」の重要性が大きく反映されている。実際、品川（1991）によればシュッツはフッサールの「内的時間意識」概念とベルクソンの「持続」概念を引き継ぎ、「意味の問題は時間の問題である……もちろん、分割可能で測定可能な物理学的な空間時間の問題ではなく、また、外的な出来事によって充たされた経過につねに留まる歴史的な時間の問題でもなく、そうではなくて、体験をする者が自分の体験の意味をそのなかで構成するような各自それぞれの持続の意識、『内的時間意識』の問題である」と内容の規定を行った。その上で、シュッツは内的時間意識と体験の意識は人それぞれが持つ、独立性のある意識だと指摘した。そのため、一般的には、我々が「私」以外の誰かの特定の行為に対する個人的な意味づけを完全に投射し、理解することは難しい。そして、その他者が前述した共在者である場合のみ、「私」はその他者の実際の行動や身体動作といった言語を捉えることができ、これらを材料にその他者の主観に近づき、その主観で行われた体験への意味づけにアプローチすることができる。

また、ここで提示した「意味（Sinn）」について、シュッツ（1945a：210=1985：13）は「個々人の意識の流れにおいて生じる一定の体験に内在している特性ではなく、現在今から反省的な態度をもって過去の体験を解釈した結果である」と説明しているが、ここで言及した「意識」も「体験の流れ（Erlebnisfluß）」としてシュッツ（1932）によって定義づけられている。この「体験の流れ」では、時間が流れるとともに「体験」も同じく絶えず生成され、消失していく。要するに、シュッツにとって、時間とともに常に生成し、消失していく「体験」には本来「意味」が存在しない。そこに「意味」が生じるのは、これらに対して人が反省のまなざしを向け、何らかの性質を規定したときである。この過程が「意味付与（Sinngebung）」である。

このように、シュッツの議論において、体験の「意味」が発生するのはあくまで現在であり、その過程を最も正確に行えるのはあくまでその体験の持ち主である。他者の体験への意味づけを有効に捉えられるのは、「私」がその他者と同じ時間を共有できる場合——「共在者」と「同時代者」——のみである。一方、「先行者」と「後続者」の体験も、あ

る程度の解釈、あるいはこれらを「現在」の枠で捉えることは可能である。その方法について、シュッツ（1932）はフッサールに由来する「把持」の概念を用いて、志向性が存在することを前提とした上で、先行の体験は過去「把持」によって現在に保持することができ、後続の体験は「予持（Protention）」によって方向づけられると指摘した。そして、この「把持」された「過去」と「予持」された「未来」を限界まで伸ばした際に生じる境界の間に存在する領域である「現在」を、シュッツ（1962）は W.ジェームズを参照し、「生ける現在」（vivid present、訳者によっては「見かけの現在」、「直接的現在」とも言われる）と定義づけた。

「われわれは、外的時間と内的時間という両次元を生ける現在と名づけたい単一の流れに統合し、そうすることによってワーキング行為を外的時間において生じる一連の出来事として体験すると同時に、内的時間において生じる一連の出来事としても体験する」（Schutz 1962：216）

このように、「生ける現在」には外的時間と内的時間の2つの次元が含まれている。ここでの外的時間は先述した絶えず流れていく「体験」であり、内的時間は人が反省を通して「意味」を付与した「体験」である。「私」が他者を理解し、その行為の意味を捉えようとすることは、その「生ける現在」に近づこうとすることに近い意味を持つのであろう。そのためには、やはり「私」は他者が「体験」に「意味」を付与する「現在」、相手に働きかけられる立ち位置に存在しなければならない。ここでは、シュッツが指摘した「共在者」と「同時代者」の区別が見られる。それは、同じ時間を共有していても、「共在者」とは違って「同時代者」は「私」の直接働きかけられる範囲にいないことである。「私」と「共在者」は互いの表情や動作を直接観測し、相互に働きかけ、直接影響することが可能だが、「同時代者」では互いの身体が現前していないためにそれができないのだ（品川, 1991）。これは他者が自らの行為に主観的に付与した「意味」構造を「私」が捉える場合、その他者が「同時代者」の場合よりも「共在者」の場合の方が、「私」が把握に用いる根拠が圧倒的に多く、「私」が構成する「意味」がより精確になることを意味する。したがって、シュッツの理論では、身体的現前のある「共在者」は他者理解を考察するのに重要な立ち位置を持っていると考えられる。

実際、「共在者」を重視する傾向は晩年のシュッツ（1951）が他者との相互理解関係について論じた『Making Music Together: A Study in Social Relationship（ともに音楽を作る：社会関係の一研究）』にも反映されている。この論説においてシュッツは、人々の社会的なコミュニケーションの発生プロセス、他者と相互理解する過程を音楽演奏の例で説明することを試み、「Mutual tuning-in relationship」（訳者によって訳語が複数存在するが、以下では田邊（2014）に倣って「相互同調関係」とする）という概念を提示した。シュッツ（1951）によれば、「相互同調関係」において「私」と「汝」（他者）は「生ける現在」をともに当事者として体験し、この共同の経験によって自他の両方が含まれた「我々関係」が構築され、あらゆるコミュニケーションの基盤となると主張している。そして、この流れのなかで「私」と「汝」の間で共有される主な対象は「内的時間」であ

る。ここでの内的時間はベルクソンが提示した「持続」の概念に由来し、上述した「生ける現在」に含まれた内的時間でありながらも、「意味」が付与された「体験」が人の内に持続的に存在する側面がより反映されている。この「内的時間」を共有する行為をシュッツは「growing older together（ともに時（年）を重ねる）」と表現するが、これは「私」と「汝」が同じ時間を共有し、そのなかで互いの持つ「内的時間」を同調し、重なり合う行為だと理解できる。当然、個々人の主観によって形成されている以上、他人の「内的時間」を全く同じように捉えることは不可能だが、これをより精確に行うためにシュッツが提示したのが我々と同じ時間、空間を共有している「共在者」との関係である。すなわち、音楽の聴き手と演奏者がその場で同じ旋律と演奏者・作曲家がその中に付与した意味合いを共有するように、同じ場、同じ時間を共有する「私」と「共在者」は相互行為を通じてお互いの「生ける現在」に近づけていく、その関係こそが「相互同調関係」である。長期的なボランティア参加者が過去の経験に付与する意味は極めて主観的なものである。ボランティアは時には己の活動に関する過去の体験を把持することで活動に「意味」を付与していくのだが、時には活動の現場にいる「共在者」——この場合、メンバーも支援の対象者も含まれる——と「相互同調関係」に基づいて互いの内的時間を共有し、「意味」を生成する。本研究ではこうした主観的な意味づけをアプローチの対象としているが、そのためには研究者も対象者のボランティア達と内的時間を共有できる「相互同調関係」を持つ必要がある。

2.2 現象学的アプローチの方法

シュッツが提示した現象学的社会学のみならず、現象学の本質はその創設者であるフッサールが目指した哲学にあるのだが、その「事象そのものへ」という格率は、客観的な事実固執する従来の自然科学の研究方法を批判すると同時に、物事を人間一人ひとりの主観的解釈から捉える考え方を提供した。そのため、現象学は哲学以外でも、心理学、教育学、社会学など様々な分野で質的研究を行う際の基本的な方法論の1つとして取り上げられることがしばしば見られる。こうした現象学を軸とした質的研究のアプローチ方法は、現象学的アプローチとも呼ばれる。現象学的アプローチでは、対象者の「生きられた経験（lived experience）」の解明が主要な目的とされている。ここで言う「生きられた経験」こそ、前述した人が「把持」を通して絶えず流れていく「体験」に「意味」を付与した産物である。当事者の視点からその経験の意味を追求するこの性質から、近年では、特に対人援助の領域における質的研究では現象学的アプローチが重要視されつつある（岩崎，2018）。これに対し、植田（2018）はさらにその理由として「患者やクライアントがどのように自らの疾病や障害を経験しているのか、また彼らが治療や援助をどのように経験しているかについての理解は、職種に関係なくあらゆる対人支援専門職に求められる」ことと、現象学的研究がすでに「学問横断的」に展開されつつあることを挙げた。また、データ上では、ヘルスケアに関する国際誌 Journal of Qualitative Health Research（QHR）で発表された論文において、現象学が研究方法として言及される回数が「質的研究」、グラ

ウンデッド・セオリー・アプローチに次ぐ3番目に多いことが指摘された（Shin, 2007）。一方、日本での類似した統計の結果では現象学は6番目になっている（戈木ら, 2012）。この状況に対して、植田（2018）は日本において現象学的アプローチの質的研究法としての採用はまだ少ないと指摘し、この領域における現象学的アプローチの可能性を示した。

具体的な方法論までみると、最もよく採用されているのはハイデガーが提示した「解釈学的現象学」である。ハイデガーは著書『存在と時間』（細谷訳, 1994）において、存在の意味を追求した。そして、同書では「われわれ自身が各自それであり、そして問うということ」を自己の存在の可能性のひとつとしてそなえているこの存在者（Dasein）を現存在

（Dasein）とし、「現存在がいつもなんらかのありさまで関わりあっている存在そのもの」を実存と名付けた上、「現存在の『本質』はそれの実存にある」と述べた。つまり、現存在は実存によって規定されており、これを言い換えれば、物事をそのありのままのように解釈するのは不可能であり、必ず解釈する人間によって規定され、影響されるということである。したがって、解釈学的現象学を用いた研究では、この研究者による解釈の規定をある程度認めた上で対象者（特定の現存在）の経験の意味を理解しようとする。その際には対象の視点からのテキストが必要である。これは従来の質的研究方法の1つであるナラティブ・アプローチと類似した点と言える（内野, 2018）。

現象学的アプローチを実施する場合、それには2つの段階が含まれている。それぞれが「現象学的還元」と「本質観取」である。「現象学的還元」では、行為者は己の意識の外部に存在する常識、社会通念などの「自然的態度」を一旦保留（エポケー）し、己の視点を意識の内側に引き戻す。「本質観取」では、行為者は現象としての意識体験が構成するプロセスを分析し、そこから事柄の本質を取り出す（岩崎, 2018）。さらに、岩崎はこの過程のなかで意識は3つの段階的過程を経由すると指摘し、その3つの過程を以下のように示した。「まずはこの「直接経験」をインタビューの逐語録などとして記述することから始める。②そこで得られた記述を、想像によって自由に変更する。そして、③さまざまな現れ方の向こう側にある同一性を直観する」岩崎が示した過程は非常に有効なものだと考えられるが、具体的な研究の研究手順においてはそれが必ず当てはまるとは限らない。

Van manen, 1990	Colaizzi, 1978	Moustakas, 1994	Giorgi, 1989, 2009
1. 生きられた経験のありのままに還る 2. 私たちがそれを体験するように対象者の経験を探求する 3. 解釈学的現象学による反省的分析	1. データを読み、対象者の世界像の意味を理解する 2. 重要な文章やフレーズを抜き出す 3. 2の文章やフレーズの意味を描き出す	1. 元データを読み 2. 不変の構成要素を見出す 3. 不変構造にある意味単位を作成する 4. 意味単位からテーマを作成し、それらを統合する	1. 何度も繰り返し読む 2. データの本質の意味によって意味のユニットを作成する 3. 複数の意味のユニットを構成する

4. 解釈学的現象学により記述する	4. 3 で描写された意味をテーマに分ける 5. 4 のテーマを用いて可能な限り世界像として完成させる 6. 上記の描写から同一であることの文章を形成する 7. 研究参加者とその描写を確認する	5. 本質的自然に向けてそのテーマを確証する	4. 構造を明らかにするために 3 で構成されたユニットを関係化する
Smith, 1999	Ricoeur ² , 1976, 1981	Giorgi, 1985 Yeung, 2004	植田, 2010
1. 重要なテーマを探求する 2. テーマをカテゴリ化する 3. カテゴリを根拠づける 4. カテゴリを関係化する 5. 現れ出たテーマをコード化する 6. テーマを編集し、組み合わせる 7. 解釈的工程により理解を深める	1. 素朴に理解する ストーリーライン、トピック、内容 2. 構造分析 意味単位の特定 意味単位の組織化と検証 3. 構造分析により、最初の素朴な理解を確かめ修正する	1. 全体の把握 2. 全文の再読による心理学的視点からの文脈依存的意味単位の識別 3. 対象者の日常的表現を、全ての意味単位を分析し、内省と想像的変容によって心理学的言語（一般カテゴリー）へ変換する 4. 変換された意味単位を統合し、現象構造の一貫した記述を構築する	1. 現象の記述 対象から得た情報のテキスト化 2. 現象に対する判断保留 3. 対象者の「身体性」及び「欲望」（実存構造）を熟考する 4. 上記 1、2 を踏まえて、現象を対象者の「実存的意味」として書き改める

表 4. 代表的な現象学的アプローチの手順

表 4 は筆者が K.R.Shin (2007) と植田 (2010) に基づいて整理した先行研究の手順例である。これらの手順はいずれにおいても研究者が対象者の発言、行動をテキストにまとめた後に、それを熟読した上で「意味の単位」の抽出とそれらに基づいた関係付けの作業が行われた。こうした作業手順にはいくつかの問題点が見られる。まず、植田 (2010: 17) によれば、これらの方法の多くは「『テーマ』あるいは『意味単位』の抽出と関係化という手続きそれ自体が分析の目的とされてしまう」問題がある。この場合、研究は当初

の「テーマ」への思考から離れ、対象者が「意味単位」にたどり着くまでの過程の重要性も無視されがちである。次に、岩崎（2018）は現象学的還元を論じる際に自然的態度を一旦保留するエポケーの重要性を指摘しているが、上記では植田の研究以外ではエポケーに対する明確な手順が示されていないものが多く見られる。そのため、「本質観取」で抽出した事柄は必ずしも研究者の自然的態度から客観性を保てているとは限らない。最後に、上記の研究では心理学、教育学、介護支援などの領域から、解釈学的現象学の原理を用いて展開されているものが多い一方、社会学、社会福祉分野での試みと社会学的現象学の原理でのアプローチが依然として不十分であり、現象学的アプローチの応用の領域、分野を横断した展開の可能性を示すさらなる材料が依然として必要である。

以上の問題点を踏まえて、本研究ではシュッツの現象学的社会学の原理、特に「相互同調関係」に基づいて、以下のような現象学的アプローチの手順を設計し、これをテキスト分析の枠組みとして採用する。

- (1) 全体の把握——研究者は記述全体を読み、テキストの一般的な意味を把握する。
- (2) 現象に対する筆者の客観的判断を羅列し、一旦保留する（エポケー）。
- (3) テキストをもとに対象者の主観（当時の状態、傾向）を考察する。
- (4) 対象者の現象に対する解釈の意味単位を特定し、解釈的工程により理解する——最終的な一般記述に暗黙的に包含される形でまとめる。

2.3 ライフストーリー法と現象学的アプローチの親和性

本研究では、ボランティアから収集した言語、動作などのデータをテキスト化し、それを前節で示した現象学的アプローチの手順で分析し、それぞれのボランティアによる活動への「意味づけ」を理解しようとするが、それに適した調査方法として人々の体験への意味づけを探るための方法論であるライフストーリーが挙げられる。ライフストーリー研究は「仮説の生成」（箕浦, 2005）を企図した質的研究の調査手法の一つである（中尾, 2021）。この研究方法はナラティブ・モデルに位置づけられており（山田, 2007）、関心のまなざしが向けられるのはあくまでも「語られた『真実』」のみである（桜井, 2005）。ライフストーリーとはやや違いますが、個々人の視点とその体験に拘るアプローチ方法として、岸（2016：156）は生活史調査方法は「個人の語りに立脚した、総合的な社会調査である。それは、ある社会問題や歴史的事件の当事者や関係者によって語られた人生の経験の語りを、マクロな歴史と社会構造とに結びつける。語りを『歴史と構造』に結びつけ、そこに隠された『合理性』を理解し記述することが、生活史調査の目的である。」と述べている。この定義で筆者が注目したのは「個人の語りに立脚」し、それをマクロな社会構造、社会現象と結び付ける考えである。つまり、ライフストーリー法においても、我々は社会における現象を個々人の視点からより鮮明に読み取ることができ、その結果にはやはり、語り手の主観的な意味づけがより反映されていると考えられる。

日本でのライフストーリー研究の先駆者として桜井厚がよく言及されるが、その桜井（2002）によれば、「ライフストーリーには、過去の出来事や経験の語りである『物語世

界』と〈いまーここ〉で成立し過去の出来事や経験に対する評価的態度を表す『ストーリー領域』の2つの位相がある」とされている。ここでの「物語世界」と「ストーリー領域」を現象学的視点で考察した場合、これが語り手が過去の「体験」に「意味」を付与した際に形成した「内的時間」と、その語り手が「共在者」として聞き手である「私」と共有している「生ける現在」の概念に近い意味合いを持っていることが読み取れる。実際、桜井によって提示された対話的構築主義アプローチとしてのインタビュー方法は現象学的アプローチで提起されたそれと共通する部分が多く、桜井によるライフストーリー研究の理論的基盤も、A.シュッツの現象学的社会学から受けている影響が強く反映されている（岩崎, 2018）。

こうしてみるとライフストーリー法と現象学的アプローチには極めて高い親和性があるように思えるが、具体的な手順まで考察した場合に二者の相違点が見えてくる。前節で分かるように、現象学的アプローチには大まかな2つの段階「現象学的還元」と「本質観取」が存在するものの、エポケーの方法や基準、意味単位が抽出されるまでの過程など具体的な手順は研究者によってその都度改変されてきた。一方、桜井のライフストーリー研究方法において、データを逐語録化する時には定式化したルールが存在する。そのため、前者は後者よりも一般化されにくいとされる。しかし、植田（2010）の研究手順でも示されたように、現象学的アプローチを通して、研究者が最終的に追求するのは分析結果を実存的に解釈することである。そのため、本研究では、これがライフストーリー法を導入する意義の1つとして考える。

また、インタビューでの相互作用に対する考え方の視点からみた場合、二者の間でよく差別化されているのは聞き手の記述に対する態度だと考えられる。ライフストーリー法では、聞き手と語り手との間の相互作用が重要視され、お互いの「語り」は当然であるが、その相互作用が発生するプロセスを理解する手がかりとして聞き手の心理活動がテキスト化の対象になる場合も存在する。一方の現象学的アプローチでは、語り手が語る当時（「現在」）に付与した「意味」とそれが付与される過程はよく強調されているが、聞き手の動きに関してはそこまで重要視されず、必ずしもテキスト化の対象ではなかった。しかし、岩崎（2018）は逆に聞き手の「確信成立」のためにはこれが必要だと主張した。

本研究では、研究者は研究対象者が過去把持を通して、過去の「体験」に付与した「意味」とその過程をより間近で捉えることを目指している。そのためには、研究者は研究対象者と互いにとっての「共在者」になり、「内的時間」を共有できる「相互同調関係」を構築する必要があると考えられる。ライフストーリー法は、インタビューにおける語り手と聞き手の相互作用を重要視しており、聞き手の言葉の記述もその場における聞き手の「内的時間」を表し、語り手のそれと重なり合うのに有効であると考えられる。したがって、本研究においてインタビューの手法としてライフストーリー法を採用するのは合理的だと考えられる。

第三章 最初の経験に拘る災害ボランティア－金光教大阪災害救援隊の事例から－

3.1 はじめに

序章で論じたように、日本のボランティアに関する歴史のなかで、「ボランティア元年」と呼ばれた1995年は紛れもなく重要な意義を有している。そこでは特に災害ボランティア活動が注目を集め、それ以降のボランティア活動とそれに対する研究の活発化に繋がった。一方、震災後に一気に集まった大人数のボランティアは被災者の救助、生活面のサポートなど様々な面で助力となったが、同時に災害救援現場に混乱ももたらした。被災者の役に立ちたい一心で被災地に到着したものの、自身にできることや活動すべき現場を見出せずに彷徨う者もいれば、被災者との接し方や役割分担などでトラブルを起こす者もいた（渡辺, 1995）。言い換えれば、災害ボランティア活動には更なる改善と議論の余地が見られたのである。

災害支援活動に関する議論のテーマの一つとして活動の長期化が挙げられる。被災地での支援活動といえば、災害の種類による違いはあるものの、瓦礫撤去、泥だし、物資配布など、災害発生直後に多くのニーズが寄せられる活動が想起されやすい。炊き出し活動もよく言及されるが、多くの支援活動はある時点（例えば、避難所の閉鎖、支援物資の充足）をピークとし、それに到達した途端に一気にその数を減らしていくというイメージがある。しかし、災害救援はそこで終わることはない。稲場（2013）が提示した「丸ごとのケア」の概念にも見られるように、被災者支援、特にその精神面をサポートする「心のケア」支援において、ボランティアは傾聴といった単一的な活動を行うのではなく、瓦礫撤去、炊き出しなど、他の役割を担いつつ、被災者との関係構築をする必要がある。被災者が抱え込んでいる非表出的なニーズに近づくために、長期間の活動を通じて「ただ傍にいたいこと」（渥美, 2001）を被災者たちに感じさせ、安心感を与える必要があるのだ。事実、東日本大震災ではみなし仮設を含んだ仮設住宅は数年に渡って運営されたものが多く、長いものでは震災から十年経ってようやく最後の入居者が退去した。これらの被災者に対して同じく長期間に渡って支援活動を行っていたボランティアも確かに存在していた。各災害ボランティアセンターのデータによると、発災から3年半経過した後も数千人規模のボランティアが被災地を訪れていることが分かり、李（2015）は災害救援活動の一つの特徴が「息の長さ」だと指摘した。

そのため、災害ボランティア活動に携わる一部の組織では長期的な支援活動を行うことが活動の方針となっているが、これらの組織を詳しく見ると、その中に宗教関連の活動団体が存在している。宗教団体によるボランティア活動はしばしば布教活動を連想させ、多くの被災者に抵抗感を抱かせてしまうが、近年ではこれらの団体の活動に対する認識が変わりつつある。東日本大震災の新聞報道における、津波の被災地での「鎮魂の読経」を続ける禅僧の写真は多くの人を感動させ、災害救援活動に身を投じる宗教者の姿を印象付けた。これにより、宗教者は災害現場で祈りや読経など、布教とは異なった彼ら独自の手段

によって被災地、被災者の精神面を支えることができるという認識が広まった。また、曹洞宗に起源するシャンティ国際ボランティア会、真如苑 SeRV、天理教ひのきしん隊など、海外より伝来した仏教、キリスト教、イスラム教から日本の新宗教までの様々な宗教関連の災害ボランティア団体の活躍が前世紀から実績として語られ、宗教組織による支援活動が災害現場で受け入れられるための材料となっていた（稲場・黒崎, 2013）。にもかかわらず、長期的なボランティア活動を行う団体の数はそのニーズに比べると未だ少ない。

災害ボランティア活動に求められているもう一つの要素として、公的機関の指示に従うだけではなく、被災者に「寄り添う」ための自律的な行動力が挙げられる。直近の2024年に発災した能登半島地震においては、受け入れ先が見つからずに活動を断念せざるを得なかった災害ボランティアの姿がSNS上で見られた。これらの状況に対して、渥美（2014）はその要因を災害ボランティアの効率化を中心に置いた「秩序化」だと指摘し、それに対抗するためには被災者中心の「遊動化」の支援が必要だと提示した。具体的に言うと、渥美（2014）はただ行政や災害ボランティアセンターの指示を仰ぐだけでなく、自ら行動し、支援の手が薄い地域を探し、被災者たちに「寄り添うこと」に注力した災害ボランティアを取り上げ、それらの活動を遊動化のドライブがかかった活動の一例だと述べた。個別の災害ボランティア組織や個人の視点から見ても、こうした遊動的な活動様式は、被災者と活動参加者との間の関係構築を促進しやすく、ボランティア組織の活動理念の形成、維持に寄与する効果があると考えられるが、これは同時に組織や個人の自力で動く能力を試すものでもある。長期的な活動のなかで葛藤が生じやすいことも想像に難くない。

3.2 金光教大阪災害救援隊と本章での現象学的還元の事項

本稿の研究対象である金光教大阪災害救援隊（以下：救援隊）は東日本大震災の災害ボランティア活動をきっかけに設立された、金光教に所属する被災地での長期間の支援を専門とする組織だ。

3.2.1 金光教と大阪災害救援隊

金光教は教派神道連合会に属する日本の新宗教の一つで、赤沢文治、すなわち生神金光大神によって1859年（安政6年）に創設された創唱宗教である。金光教はその創立の時期もあり、同じ江戸時代末期に開かれた黒住教、天理教とともに幕末三大新宗教と呼ばれることもある。

一つの宗教が成立するにはその宗教独自の教えが必要である。金光教の場合、それが今の時代で信者たちが唱える「あいよかけよ」という言葉だろう。金光教において、「あいよかけよ」とは立教神伝での「氏子あつての神、神あつての氏子、あいよかけよで立ち行く」という言葉を縮めての表現になり、その意味は「神と人とのあるべき関わりを示した言葉で、人は神の願いを受け、真実な生き方を求めて立ち行くことになり、神もまた、人の真実な生き方によって、その働きを人の世に現すことができ、神も助かるということ」となっている。すなわち、金光教は根本から神と信仰者との助け合い関係の実現を目指し

ているだろう。小澤(2016)の指摘から、教祖の教えと人（または弟子）を思う心に信仰の中心を置き、個々の信者として環境に流されずに教祖の思想を追い求める傾向を持っているといえるだろう。このことに対し、奥原（2018）も「金光教における信心は、一人ひとりが自分の中に神を持ち、信仰的に自立していくことによって成就する」と指摘している。

また、奥原（2018）は「生きても死にても天と地とはわが住みかと思えよ」という教えに注目し、これこそが金光教の死生観を表現する言葉であると指摘し、その意味を「魂は永遠に生き通して、その居場所は天地（神の懷）であり、生きている間も死んだ後の魂も神のお恵みを受けている」という解釈を行った。つまり、金光教の信者と神との助け合い関係は生死を超えるもので、社会貢献活動のために献身することも神との助け合いだと考えられる。

森岡（1981）によれば、金光教は「いえ・おやこモデル」の組織であり、このモデルの宗教組織は本来的に重層型だが、金光教はさらにこれを単層化した。その結果、金光教では地方的単位がタテの位置で管理され、組織運営は分散的である。また、どのレベルの教会の信者でも本部広前の取次ぎ⁵を教主に願い出ることができるよう組織形態を持っている。本研究の対象らが所属する金光教大阪災害救援隊(以下：救援隊)の金光教教内における立ち位置は金光教大阪センターに所属する「各種団体」である。具体的に説明すると、金光教の本部は岡山県浅口市にあるが、国内に点在している 1500 個の教会を取りまとめるために教内では日本国内を 13 の「教区」に分けて事務取り運びなどを行ってきた。そのなかで、これらの教区を各自で担当し、教区内の諸教会をサポートするために教務センターが設置された。教務センターは組織としてはいわば教会と本部との間にある結びつきの機関であり、教会と本部とのやり取りは教務センターを通して行われてきた。救援隊が所属する大阪センターもまたこれらの教務センターの中の一つであり、金光教の中近畿教区（大阪・奈良・和歌山）にある各教会をサポートするところである。そして、救援隊は大阪センターに直属する「各種団体」として教内で登録し、(大阪災害救援隊の)会議で活動の場所、方針などを決めてきた。本部とは大阪センター経由でつながっている。このような教団本部と直接的な関連を持たない「やや遠い関係性」は、救援隊の活動の自立性と教団本部の救援隊に対する好意的な態度に寄与している（陳, 2022）。

救援隊以外でも、金光教内では少年少女連合本部、金光教首都圏フォーラム、みちのくボランティア隊など、各地域に所属する災害救援に関する組織が多数存在する。

救援隊の災害ボランティア活動の特徴は「長期間」と「関係構築」の二つの言葉で説明できる。まず、「長期間」についてだが、2025 年 4 月の時点において、救援隊は既に 2011 年東日本大震災に対して 44 回、2016 年熊本地震に対して 30 回、2017 年九州豪雨災害に対して 11 回、2018 年西日本豪雨災害に対して 24 回、2019 年台風 19 号被災地に対して 13 回のボランティア活動を行ってきた。また、2025 年能登地震、豪雨災害の被災地である石川県門前町浦上公民館に対して月 1～2 回程度で炊き出し活動を行い、同じく 2025 年 4 月時点で計 32 回実施している。このように、救援隊の支援活動は発災直後だけではなく、同じ被災地に対しては少なくとも一年以上、特に東日本大震災被災地の場合は十年以上続い

てきた。

主な活動の内容から見れば、救援隊は炊き出しを中心に様々な被災地で災害ボランティア活動を展開し、その場にいた被災者たちに温かい食べ物を届け、関心を寄せてきた。救援隊では炊き出しの器材と食材を一台の車に乗せて被災地まで走らせるのが活動の基本であり、支援先が宿泊地より離れている場合は炊き出しを行うたびに調理場の設営から調理、器材の撤収まで、丸一日の活動時間を必要とする。また、炊き出しと関連する形で、救援隊はその時々によって散髪ボランティアの活動も展開したことがあり、被災地における祭り、カフェの設営といった被災者の日常生活に深くかかわる事業にも参加してきた。このような真心を込めた活動姿勢の裏には、被災者と良好な「関係構築」を行い、彼ら彼女らが抱えている潜在的なニーズにより多く応じたいという願いが込められている。

また、陳(2022)は救援隊の活動の継続動機をそれぞれのメンバーの視点から考察し、その要因として「信仰」、「活動に対する宗教的解釈」、「メンバー間、メンバーと被災者との間の信頼関係」、「キーパーソンへの信頼」教団外部の組織との「協力」、教団本部との「やや遠い関係性」を提示した。陳によれば、「金光教教団本部は金光教大阪災害救援隊を資金面だけで支援しつつも、救援隊の活動に深い干渉をしないことで一定的な距離を保持している」ものだと指摘した。救援隊は「やや遠い関係性」により長期間の継続活動の様式を確立できているのに対し、教団本部から受けられるバックアップも物理的に制限されており、外部組織との協力関係を余儀なくされた。

3.2.2 筆者と救援隊の関係及び本章での現象学的還元の基準

本研究の参与観察において、筆者は修士課程の間、2018年10月の金光教大阪災害救援隊による真備町市場仮設団地に対する支援活動（カフェ）を機に救援隊のメンバーと接触し、同年度の11月に初めて救援隊の炊き出し活動に関与することになった。それから、筆者は2019年3月以降の西日本豪雨災害被災地での炊き出し、4月の熊本地震の被災地での炊き出しなど、救援隊の一員となって隊のボランティア活動に計9回参加した。博士後期課程の間では、筆者はコロナ禍のなかで一度活動から身を引いたが、2023年から再び救援隊の活動に関わりはじめ、東日本大震災被災地での救援隊の訪問活動に参加しながら、2024年4月から2025年4月まで計6回能登半島地震の被災地で行われた炊き出し活動に同行し、ボランティアの一員として活動に参加しつつ、救援隊の活動内容や被災者、他の支援組織との交流の様子を観察結果としてまとめ、それを参照して半構造化インタビュー調査を行った。

救援隊自体の特徴としてその参加メンバーの多様性が挙げられる。前節で説明したように、救援隊は金光教の本部に直属する組織ではなく、金光教大阪センターに所属する「各種団体」の一つである。この立ち位置から、救援隊の活動メンバーは本部主導の募集ではなく、あくまでも活動を展開する際に加わった各地の教会に所属する有志の信者や、活動に関心を持った被災者、現地の住民によって構成されている。これらに加え、2016年に発生した熊本地震の被災地では、救援隊は活動の際にO大学の教授に出会い、その遊動的な

活動様式から注目されるようになった。それ以降、救援隊はO大学の学生の実践の場の一つとなり、活動するメンバーのなかでは発災時にO大学に所属している学生も加わったのである。近年の活動では回ごとの参加者は基本4名前後で、そのうちにはAとBの姿がよく見られる。

Aは救援隊の参謀として、隊のほとんどの事務と活動に関わっている。救援隊の主な活動内容は炊き出しだが、食品安全や効率のために調理に関われるメンバーは非常に限られている。Aは救援隊のメインの調理担当として、全ての回の炊き出しにおけるメニュー決め、食材の購入と主な調理工程に関わっている。逆に言えば、Aが居なければ現在の救援隊が行っている炊き出し活動を継続するのは非常に困難である。実際の現場においても、Aの調理スタイルや要望に合わせて他のメンバーが食材の下処理、機材の用意、調理器具洗いなどそれぞれの役割のなかでAのバックアップを担当している。つまり、Aは現在の救援隊の炊き出し活動の要であり、現場のリーダーとしての役割を果たしている。筆者も救援隊の活動に関わって以来、自ら参加してきた全ての活動のなかでAに同行してきており、その度にAとの関係を深めてきた。救援隊のメンバー全員を見渡しても、活動参加の時間、回数や活動継続の困難に立ち向かった回数においてAの右に出る者はいない。そのため、筆者はAを本研究の対象として取り上げた。

Bは筆者が調査を実施した時点での救援隊の絶対的な主力メンバーであり、その重要度はAが能登半島地震の被災地での活動スケジュールを決める際にBのスケジュールを優先的に参考しているほどである。実際の活動のなかでは、Bは調理器具、食材の配置から入れ替わりの激しい他のメンバーの指揮、教育まで担当しており、Aのサポート役として活躍している。Bは現在一般企業で勤めているが、その活動への熱量は周りを活動に巻き込むほどである。Bが勤めている企業は金光教や救援隊に全く関係ないが、その企業が能登半島地震の被災地に対する支援活動を考案した際に、救援隊への援助という案を採用した。筆者とBは元々同じ大学の同じ分野に所属しており、救援隊の活動に関わり始めた時期は近い。これに加え、Bはこれまでの災害ボランティア活動の期間中に学生から社会人となり、学生として救援隊の活動に協力する立場から正式の主要メンバーとして救援隊の活動を牽引する立場へと立ち位置の変化を経験した。そのため、筆者はBを本研究の対象として取り上げた。

本研究では、筆者は研究対象者が語ったライフストーリーに基づいてそれぞれの時点での語り手のボランティア活動に対する意味づけを分析するために現象学的な還元を行う必要がある。そのためには、筆者が持つ研究対象者本人、対象が所属する組織である救援隊などの概念に対する事前認識やイメージとそれによる見方の一部を保留し、現象学的態度へと還元する工程が必要である。

したがって、保留すべき内容は本章で紹介した筆者が文献調査と活動を通じた接触のなかで無意識に形成しているA、B本人と救援隊に対する個人的な評価、災害ボランティアと金光教による社会貢献活動への価値判断である。これらをまとめた上で決めた本研究において保留すべき筆者の社会通念や先入観は以下の通りである。

(1) 伝統的なボランティア理論

具体例：ボランティアの基本的な性質：「自発性」、「無償性」、「公共性」など。

(2) 救援隊とその活動形態に対する筆者の認識と社会的通念

具体例：

①「遊動的に活動する志向の積極性」、「客観的に長期的な活動になりやすい」、「現地での協力の必要性」、「災害救援ボランティア活動は必ずしも現地のためになるとは限らない」、「災害ボランティアに取り組み続けるのは善行である」などの災害ボランティアに関する一般言説と筆者の主観的な意見。

②「他人を助けることは金光教の信徒の教義の実践の必然的な一環である」、「救援隊の活動での葛藤は「やや遠い関係性」に関わる」、「救援隊の活動は金光教の宣伝となる」、「現場では宗教に所属する団体ならではの葛藤がある」、「利他行ネットワークによる活動継続への貢献」などの金光教と救援隊に関する筆者の一般的なイメージ。

(3) 語り手に対する個人的な認識

具体例：救援隊における立場(現場のリーダー・主力メンバー)、語り手に対する筆者の個人的なイメージ(自己犠牲精神が高い、被災者に溶け込みやすい)など

以下の分析では、筆者は会話を精読し、理解する際に、上記の内容を可能な限り一旦保留することで会話の内容が発生した際の語り手の「生ける現在」に近づく。

3.3 Aのライフストーリー

A は救援隊の成立から今までの全ての活動に関わっており、隊の中心となる存在である。救援隊の活動に対する A の熱意は尋常ならぬ高いものである。重病で手術が終えた間もない回復期の際に能登半島地震が発生したが、A は有無を言わず発災の翌日から被災地へと赴き、そのまま災害救援活動を展開した。本節では A のライフストーリーを振り返り、現象学的アプローチを通して活動に対する A の意味づけを分析する。

3.3.1 A の物語

A の実家は金光教の教会で、生まれた時から金光教の教えとともに日々を過ごしてきた。しかし、青少年時代 A は教会を継ぐことを必然だと捉えておらず、学校を卒業してからは商社で働き、己の興味関心と向き合うことを優先する生活を送っていた。そんななかで、二十代後半 A は突然の友人の死を経験する。これを受けた A は人の生死について考え直し、再び宗教の道に戻ることを決め、金光教の教師になるための修業を受けた。修業を終え、正式に金光教の教師になった A はその後、金光教の大阪センターで一職員として働くことになったが、その勤務中に東日本大震災が発生した。A は被災地の映像に触発され、被災者を救援するためのボランティア活動に身を投じることを決めた。それ以降、A は筆者が論文を執筆する現在までずっと災害ボランティア活動を続けており、その活動のなかで全国各地を車で駆け回り、被災者のために主に炊き出しによるサポートを行ってきた。ま

た、教師としても実家の教会を継ぎ、その運営と勤めに力を注いできた。

最後のインタビュー調査を実施した時点では、A は既に 2011 年から 2025 年までの 14 年間、連続で災害ボランティア活動に従事してきた。能登半島地震から本研究が執筆される一年間では活動の内容が豊富になるに伴い、A は教会の業務を抱えながら月に一週間ぐらいの時間を被災地で過ごしているようになった。客観視すれば、災害ボランティア活動は A の生活の日常の一部になったと言えよう。筆者の構えとしては、長期間の災害救援ボランティア活動のなかで、A は様々な衝撃的な現場を経験し、多くの人と接触してきた。中には A の活動に対する意味づけを変容させる体験も数多く含まれている。しかし、A の主観のなかでは、活動に対する考えはこれまで一度も変わらずにいた。次の小節からは、こうした A の思いを実際に発生した対話に基づいて分析していく。

3.3.2 初めての活動とその際の感想

A の初めてのボランティア活動経験は 2011 年東日本大震災直後だった。当時は A が大阪センターの職員になってしばらく経った頃であり、ちょうど A が宗教者としての自分の役割について考えていた時期でもあった。そのなかで、被災地へと赴く過程と現地での体験は A に大きな影響を及ぼした。その影響が反映されたのが抜粋 A-1 と抜粋 A-2 の内容である。

【抜粋 A-1】

A：未曾有の災害が起こった時に自分は人としてどうあるべきかを考えた。そこで一晩中眠れずにずっとテレビの映像を見ていて朝方になるとやはり行きたくてしょうがなかった。一人でも行こうと思って、でもやっぱり仕事を抱えているのだから、その時の大阪センター所長のところに行って『所長すいませんけども、私東北へ行きたいと思いますのでしばらくお暇を頂戴したいと思います』って辞表を胸に入れていった。

...

W：当時の活動はどうだったのでしょうか？

A：行って最初に思ったのは、どういうところに行くのかも全く分からず。もう全くの素人だから、避難所がどこで開設されているとか、そういう情報も全くわからず、でも行ってみたら人が集まる場所がある、そこが避難所だと思って行って、でそこにおった行政の人に「すみません、少し物資をもってきているんですけども、ここで配らせてもらっていいですか」「どれぐらい持っているの」「いやあの車の後ろに乗せているだけです」「だったら混乱するだけだから、やめてほしい」ってそういうことを言われて引き下がるしかなかった。次の避難所、さらにその次もやっぱり同じことを言われて門前払いされるだけでした。段々悔しくなってきた。報告の任務もあって被災地の状況を見て回ることにした。-そのときに、ある大きな避難所で大きなトレーラーの上に六つも大きい寸胴を並べて、そこで豚汁をみんなにふるまっている光景に目が留まった。お坊さんだったな。で、豚汁を配っているのを見て、あの、それをもらった行列がすぐにできていくわけ。豚汁できまし

たよみtainな声がけがあって、寒い日のなかでバーツと行列ができていって。見ていたら母親とその娘がこう豚汁をもらって、バーツと近くまで来て、で、俺の近くにポツと座って、ほんで湯気が湧くそれをズズズッとこう飲んだ時に、もう涙ボロボロと流しながら美味しいねって二人で言ったよ。「あったまるね」って言って。あとはもう黙々とその二人でズルズルって豚汁を食べ、涙ボロボロって流しながら食べているのを見た時に、豚汁一杯で涙を流すというのが、どういうこと何だろと思ったんや、やはりよほどつらい思いをしたに違いないと気づいた。家、家族、友達が流されたりしたことがやっぱりあるよなと思った。

-それでも「ありがとう」って作った人に言った、それをみたときに自分はそっち側の立場の人間にならねばと決めた。同じような支援ができるような人になりたいその時の思いが救援隊の立ち上げにつながったと思う

抜粋A-1 はAが東北地方で初めて災害ボランティア活動を行った際の経緯と印象を振り返った際の語りである。Aは東日本大震災という未曾有の大危機を受け、自分の人生の意味を問い直した結果、現職を辞めても現地の人を助けたいという思いにたどり着いた。しかし、無事に所長からの肯定を得て現場に赴いたAが最初に経験したのは知識と力のなさによる失敗だった。そして、門前払いされ続け、報告を行うために現場を回っていたAはお坊さん(シャンティ国際ボランティア会)による炊き出しを目にした。その炊き出しでAが注目したのはとある母娘で、その母娘が炊き出しの豚汁を涙を流しながら食べていたのとボランティアに返礼をしたのを見たAは、被災者の苦しさに関感する一方、シャンティの活動に感動し、自分も「同じような支援ができるような人」になることを決めた。

Aの最初の活動経験は失敗から始まった。テレビの向こうで苦しんでいる誰かを助けるためにボランティアとして現地へ向かったAは経験不足によって逆にできることを見失い、飛び出した際の目的から迷走したが、シャンティの炊き出しでの被災者の反応からそれを見つけ直した。Aは活動の過程のなかでシャンティの活動という具体的な理想像を得ることで迷いから抜け出し、ボランティアを本気で目指すべき目標として意味づけられるようになった。こうした意味付けはAを後押しする動機となり、救援隊の結成の要因にもなった。Aが正式に災害ボランティアに関わるようになった過程では、「価値機能」、宗教の「利他心」による働きが顕著的に見えたほか、本人ではないが、被災者がシャンティのボランティアに示した「好意的な態度」とシャンティという「ロールモデル」も強い影響力を発揮していた。

「ロールモデル」であるシャンティがAに与えた影響はそれ以降の救援隊の活動の継続にも関わっていることを示したのが【抜粋A-2】である。

【抜粋A-2】

W：やっぱり最初にシャンティの活動を見て、得たその信心というのがすごく(活動の仕方を)考える軸になっていたわけですね。

A：考える軸っていうか。いつかはあんなりたいって思ったのがシャンティで、で、やっ

ぱりシャンティのことを調べていくわけよ、自分としては。…その歴史を見てしまうわけよ俺は。ほんで有馬実成さんはやっぱりしばらく経った頃に曹洞宗当局からも「役割は終えたから戻って」って言われるわけよ。ところが有馬さんは「これだけまだ困っている人がいるのに、ここで撤退するなんて何のための宗教団体か」って言って当局とやり合ったわけよ。それはもうやっぱ俺も金光教のいろんなところとやりあった。そこと一緒なわけよ。あのずっとやり合って。その時にそれと並行して有馬さんが何をしたかというたら…そうしていくうちに年間予算が曹洞宗当局からもついてきて、今や十億円。えげつないよ。十億円の団体になっていくわけよ。国際ボランティア活動、もう海外にも行くわけよ。もうその最初がやっぱ有馬さんだから俺は憧れているね…まあ、残念ながら金光教の人に憧れて俺はそうなったわけではない。ただ、同じ宗教者だっていうところでは、あの目的意識とかそういうものは恐らくそんなに大きくズレることはないんだろうなっていうのは思っているよ。

W：そうですね。

A：慈悲の心っていうかさ、あの、そうやりなさいっていう、こう、そうやりましょうって、やらせてくださいっていう気持ちは多分一緒なんやと思うから。

抜粋A-2 ではAはシャンティ、特にその発起人である有馬実成の存在と自身の活動との関係について語った。筆者はAとの対話のなかでシャンティへの憧れを感じ、その重要性について問うたが、この問いに対して、Aは再びそのようになりたい思いを示した。そして、その理由として、Aはさらに発起人である有馬実成の経歴について語り、自分が活動のなかで遭遇した困難と有馬のと比較し、相手は自身と似ており、自身に取るべき行動を示してくれていることを述べ、有馬に対する憧れを示した。筆者が相槌をすると、Aはさらに似ている部分が「慈悲の心」や活動の際の気持ちだと指摘した。

Aはシャンティの活動に魅了され、その内容を調べていく内に発起人である有馬実成を深く知り、有馬を宗教者の災害ボランティア活動の先駆者として憧れるようになった。Aは活動を長期化させることと活動の形式などで時々金光教の教団と交渉する必要があるが、こうした困難に対面する際にAの心の支えとなっているのは前例である有馬実成の相似した経験であり、Aは有馬実成という個人の「ロールモデル」を得ることで、活動における一部の葛藤に対応してきたと考えられる。また、Aが有馬に共感したのは似たような経験だけではなく、自身の利他的な心と宗教者としての役割を常に再確認から、ボランティア活動はAが憧れの有馬実成(という宗教者像)に近づくための活動としても意味づけている。

3.3.3 活動における信仰の関わり

Aは自分の宗教者としての役割について悩み、そのなかで東日本大震災とシャンティが転機となり、災害ボランティア活動に力を注ぐことに決めた。そもそもその当時のAが抱えていた悩みこそがAを大阪センターの勤務から災害派遣に移行した原因であり、活動を始める最も根本的な動機だと考えられる。抜粋A-3、抜粋A-4は当時のAの悩みについて筆者が追及した流れで発生した対話である。

【抜粋A-3】

W：初めての現場でのご経験で災害ボランティア活動の道を選ぶことになったのですけれども、それまでの教師としての実践だったり、金光教の一信者としての振る舞いというか、目指すべきところだったり、そういうところで迷っておられる時期とかもありましたか？

A：これは三十歳で教師になって、その時に、周りを見た時に迷った。なんか目指すべき教師がおらん。例えば、本を読んだ時に、金光教の昔の先生ですごい先生っていうのがやっぱりこうおるわけよ。あの俺は言うたら、憧れのあの三代目の教主とかね。そういうところのこう伝記をずっと読んでいくと、ものすごいやっぱり憧れる人が何人かおったわけよ。教師になって、もう希望とともに教師になって周りを見た時に、誰一人その理想像に到達している人が探せなかったわけ…それでやっぱりその学院を出てきて、最初大阪センターに入って、その時にやっぱり絶望するわけよ。…(勤務の内容と目指しているものと違う)、そういう迷いがずっと続いてて、気狂ってるって思って。想像と違う集団やと…そういう時期はあったよ。もう悩みに悩んだのよ。ずーっと悩んで…そうしている内に、何年目かな、なんかちょっと忘れたけど、その時に東日本大震災が起こるわけ。それで俺はもうその時こそセンターを辞めようと思って。「東日本の方に行きたいと思います。東北の被災地に少しでも力をこう、役立てていただきたいと思うんで、お役に立ちたいと思うんで」って所長に伝えた。

抜粋A-3 ではAは自分の悩みについて宗教者になった後からずっと抱えていた葛藤について語った。筆者はAがセンターを出て災害救援の現場で自ら活動したい理由を探したが、Aはこの質問に答えるためにまず教師になる頃の話振り返った。Aは金光教の昔の教師の実践を本で読み、その教師達を憧れるようになったが、いざ自身が教師になると、周りにはAが憧れの教師像に資する人はいなかった。これに加え、大阪センターでAが担当する業務もAが本に出ている教師らの実践とは違うもので、Aは自分の宗教者としての目標と現実との落差を感じ、なすべきことが分からず迷っていた。それがAがずっと抱えてきた悩みだが、東日本大震災の際に、Aは被災者の苦しみをテレビを通して共感し、自分のなすべきことを見つけた。

Aが災害救援活動に身を投じたのは、自らの信仰を貫き、宗教者としての役割を果たしたいという意志を持っていたからだ。Aは宗教者を目指す過程のなかで昔の教師の事跡を本で知り、その教師達に憧れるようになった。しかし、現実では、Aは周りからも、自身の大阪センターでの活動からも昔の教師達の実践に近いものを見られず、自分のなすべきことを分からずにいた。言い換えれば、当時のAは教師になったあとの自分と自分を取り巻く環境に対して不満を感じており、それを変える機会を見つけるために迷っていた。そして、東日本大震災の後、Aは苦しんでいる被災者に手を差し伸べることが自分が探してきたことだと気づき、現場に赴いた。

【抜粋A-4】

W：こういう風に炊き出しを作って、被災者のために真摯に振る舞うその像こそが、これまで見てきた、だから探し続けてきた昔の偉い先生、尊敬されている先生たちと重なっている部分もあったりしたんですか？

A：俺が崇拝しているのは金光教の三代目教主っていうか。その方は、地上の太陽と呼ばれて空前絶後って言われた…見抜き見通しの方。

-三代の教主金光様っていうのは。もう本当にすごかったんで、やっぱりその時代はお広前なんかに入りきれんから、それぐらい信者が多かった時代だった。で、教師拝命五十年になった時にお祝いの会っていうのが開かれたが、その時に(金光様)がおっしゃったのが、「私は、皆様と同じようにはゆきません。」「私は、この世のなかで難儀にあってる人を助けさせていただいて、この世を終えるつもりですから、今後はこのようなことはもうしてくださらないように」ってお断りするね。もう、エグいね、俺からしたらそなん。もうたった一つお祝いの席を用意されただけで、もうお断りするって、純粹。もう俺はそれをこう聞いたちうか、それを本で読んだ時に、やっばこう、涙出たんよ。俺はだからいつもそれやん。自分も絶対同じでないといかん。もう足元にも及ばんけど、自分もこの気持ちでさせていただこう。それが言うたら俺の信念やから。だから、この俺の気持ちをこう具現化していくためには、何をしたらええかっていうのをいつも考えるわけよ。こんなの炊き出しをします。みんなに喜んでもらいます。地元の人ともものすごく仲良くなりたい。もっと仲良くなりたい。こう、どんどん仲良くなっていって。もっとこう活動を展開していきたい。ここの場に馴染みたい…

-こういうことをずーっと俺は繰り返してきて、1年8ヶ月経って能登でもこういう風になったわけ。まあ言うたら自分の根本にあるのはそういうところなんよ。

抜粋A-4は抜粋A-3の会話を聞いた後、Aが憧れている昔の教師の詳しい像を筆者が尋ねた際に発生した対話である。Aは崇拝している人物として3代目の金光様(教主)を取り上げた。Aは特に3代目金光様が自身を祝うための会を断ったことに触れ、難儀に合う人のために身を捧げる金光様の純粹の思いに対する感動を示した。最後に、Aは自身が活動に参加する際の心構えは常に3代目金光様の生き方を参考としており、それが救援隊の活動を発展させてきた自分の根本だと述べた。

抜粋A-3ではAが悩みの末に災害ボランティア活動に出会った過程を表したが、その語りのなかでAの中の自明的な項目である「昔の教師の実践」の一部を示したのが上記の語りである。Aが3代目金光様から見出し、自身の救援隊の活動のなかでずっと求め続けてきた宗教者としての理想は周りに影響されず、純粹に「難儀に遭う人を助ける」ことである。教師になり、大阪センターで勤務するAは実際の救助現場に関わる機会が少なく、そのため周りの信者の中から目指すべき具体的な理想像を見つけることに失敗し、自身の「生ける現在」のなかでこの理想像を組み込むことも難しく感じた。その時に発災した東日本大震災が転機となり、Aが実際の救助現場で求め続けてきたものを実践する機会となった。この時期のAにとって、ボランティア活動は自身の信仰に基づき、本当に「難儀に遭う人を助ける」ことを通してその信仰を貫く活動であった。

3.3.4 活動における葛藤

前節で紹介したように、救援隊はその活動様式により、同じ被災現場で数年に渡って長期的に活動する必要がある、活動の際は少人数で大量の食事を作る必要がある。さらに、調理担当のAはこの役割のために全ての活動に中心として関わっているため、継続するハードルが極めて高いと考えられる。実際、Aは現在までの14年の間に活動を中断する思いを2回抱えた。抜粋A-5、抜粋A-6は活動を辞めたい経験について筆者が問うた際の対話である。

【抜粋A-5】

W：ここまでやってきたなかで、辞めたいって思った時期はあったのでしょうか。

A：少なくとも2回はある。一回目は、もうやめようと思ったよ俺。で、それこそ、もうこれこそちょっと宗教的な話にはなるけど、もう悩んだ時期がある。誰にでも反対されて、お前いつまでやってんねんとか散々言われ、結構きついなっていう時があったんよ。

W：東日本(大震災の災害救援)が…

A：ちょっと落ち着く頃に、もうやめとか終わりとかずっと言われて、いろんな人に責められた時期があって。で、俺その時気づけば、ご本部の広前に座ったんよ、一人で。もう救援隊やめようと思って。で、ただふとそこで思ったのが、これぐらい言ってやめだなと。ここまでお世話になったんだしなと思って、本部広前へのお結界に進んだわけよ。その時今は亡き五代教主金光様が座っておられて。「金光様」って。「私、実はもう悩んでおりまして」っていう話をし出してたら、金光様が「あなたの好きにしたらよろしい」っておっしゃって。(それを聞いて)俺、え？って思った。で、「え？」って言うてもうて、ほんならもう一回もう広前に響き渡るぐらい大きい声で「あなたの好きにしたらよろしい。」って言うてくれて。それで、俺その時にもう一気に頭の中がスカーっとして。「え？俺の好きにしていいいんやん？」って思って。そう思った瞬間、もう「よっしゃ、もうこれで俺はもう誰とでも戦ってやろう」と思って、バーッと向かってくるやつ全員ガンやり返して。

W：神様がずっと見ていて-

A：もうお見通しよ。もうお前はこういうことで。だって話なんて最後まで聞かれへんかったね。取り次ぎっていうのは話全部聞いてからこうあんたこんなこうしなさいとかっていうのを、金光様は全然そんななんもおっしゃない。「あなたの好きにしたらよろしい。」こうおっしゃるの。もう目の前の霧がスカッと晴れたよ

抜粋A-5では、Aは活動を辞めたいと思った1回目の経緯とそれを乗り越えた過程を語った。Aは辞めたい思いを抱いたのは東日本大震災被災地での活動が落ち着く頃だと説明し、理由として周りから辞めるようにしつこく責められたことを取り上げた。Aはこうした声に叩かれたことで混乱し、活動を辞めることを考え、それを当時の五代金光様(教主)に尋ねようとしたが、金光様はAが詳細を話す前に「あなたの好きにしたらよろしい。」

と答え、Aの活動を後押しした。その言葉を受けAは再び己の信念を貫くことを決めた。筆者が自分の解釈を示した後、Aはそれを肯定し、さらにこの経験の自身に対する大切さを強調した。

災害ボランティアでは一つひとつの被災地での活動の終了、または沈静化によって参加者が活動に区切りを付けることは想像に難しくない。Aの場合においても、当時ではそもそも教内の救援隊の長期活動に対する理解度がそれほど高くなかったため、一部の信者からの活動の沈静化を理由に反発を受けていた。それでもAがこれらの声に対抗し、活動を継続させることに成功したのは、当時の教主による精神面のバックアップがあったからだ。Aの場合、特に教主が話の詳細を聞く前に自身の悩みに回答したことで、Aの中のボランティア活動には教主によって支持されている宗教者としての実践という意味も加わったのだろう。

抜粋 A-6

A：父親が亡くなったが10年前やで、そのわずかヶ月後に母親の、これ話したことあるやろ？

W：はい。

A：で、母親の癌が見つかるわけよ。医者にもう余命数ヶ月って言われて。あの、もう俺も一緒について行って…それ聞いた瞬間、俺も涙出たんよそこで。で、その直後に熊本地震が発生した。もう、どうしようもなかったな俺。もうニュースも見ないておこって思った。母親が病気で、もう3ヶ月しか一緒にいられない人が目の前におるのに、これ俺熊本地震だって言って向こうに行っている場合かと。人を助けている場合か。自分の母親の最期を見とるのが先じゃないんかって思って、俺はもうニュースも見ない。ニュース見たらやっぱりもう行かなあかんって思ってしまうから、いいかって。そうしていたら、出動の準備をせえへん俺を見た母親が、「あんたちよっと」って夜呼ばれん、なら、立ち話や、あの自分の教会の中の自分の部屋と母親の部屋の間で

-「あんたな、」って言われんねん。「熊本地震には行かんのか？」って言われんねん。俺はもう黙っていたら、「あんた私の体がこんなんだから、行くことをためらっているんじゃないだろうな」って言われた。で、俺はもう凶星やけど、「そうです」って言われへんから黙っていた。ほんなら、めっちゃ叱られた。「あんたな、そんなんだったら最初からやめとき。そんな気持ちでやっていたなら人は助からんから。それやったら最初からやめとき」って言われる。で、「私はどんなことがあっても教会でご祈念して待っている。もし私の命が尽きたとしても、ここの教会で、待っているんだから。私が死んだとしても、絶対に帰ってきたらあかん」って言われた。「早く、あなたが、あなたを待っている人がたくさんいるんだから、早く準備を整えて行きなさい。私が死んだとしても、絶対にその活動が終わるまでは帰ってきたらあかん」って言われた。

-そう言われた時に、俺のなかでもうものすごい何かがこう、吹っ切れたんよ。よっしゃ、分かった。あなたがその覚悟やったら、俺にも覚悟があるで、「ほんならもう教会のこと

は頼むから、俺は行くで」って言って用意してマッハで飛んでいた。結果、熊本地震を経て、色んな人と繋がって、救援隊の転機を迎えた。

抜粋A-6 では、Aは活動を辞めたい思いを抱いた2回目の経緯とその際の葛藤を説明した。Aは熊本地震が発災する直前に、母親が不治の病を罹ったことを活動を辞めたい理由として語った。Aは母親との最後の時間過ごしたいと語りつつも、熊本地震に関しては「ニュースを見ない」ことで対応していると振り返り、当時の自身の矛盾していた精神状態を表現した。その状況のなかで、Aは逆に母親に呼ばれ、災害救援活動を避けていたことを指摘・説教をされた。Aは黙ることで対応しようとしたが、母親はそれも見抜き、Aに心にしがたって現場へ赴くよう説得した。母親の「覚悟」を受けてAは覚悟を決め、再び活動し始めたのである。

長期的に活動するボランティアにとって、家族を含め、自分の日常生活を取り巻く環境の変化が活動に対する影響は大きい。Aの活動における2回目の大きな葛藤は家族によるものだった。Aは母親の病状を聞き、息子の立場から母親と最後の時間を過ごそうとした。しかし、その直後に熊本地震が発生し、Aは救援隊の主要メンバーという立場から被災者の状況を気になり、その気持ちを抑えるためにニュースから距離を取っていた。ここでAは母親の傍に残ると被災者の傍に向かう二択を迫られ、そのどちらもAの本心から来るものことから、矛盾を抱えていた。そんなAに対し、母親は先に自身の意志を表明することでAを活動に向かわせ、結果的にAは活動を継続させられた。この一連の流れのなかで、母親である「親族からの理解」がAの活動継続要因となっており、Aは覚悟を決めると同時に、ボランティア活動を母親が後押しするほどなすべき行動だと意味づけたと考えられる。

3.3.5 活動現場での繋がり

前節で述べたように、救援隊は活動のなかで被災者との間の「信頼関係」の構築を重視してきた。この活動姿勢はAの意志でもある。その理由として、救援隊の長期活動は被災者からの協力もあつてのものであり、A自身も活動を通して培った様々な他者との繋がりを大事にしている。この「現場での縁」についてAが言及したのが抜粋A-7、抜粋A-8である。

【抜粋A-7】

W：炊き出しの現場での被災者との関係をどうお考えでしょうか。

A：被災した人は一回、二回支援を受けたからって支援者と関係ができるわけでもなくて、その人たちの本当の心というのは一回、二回では絶対見えない。うまく言えないけど、やっぱりまだまだ終わったわけじゃないよ。やっぱりちゃんと自分が家を建てて仮設（団地）から出ていて普段の生活に戻りましたってなるまでその人たちに安心ってないと思う。

...

A：ボランティア活動を繰り返していくうちに一から関係ができて、また自分の顔を見て

被災者がほっとされるのがその人たちの心の安らぎ。そのためにやっぱり何度も通い続けるのが大事だと思う。一回、二回で支援活動を終わる人たちに「実は私本当はこういうことで困っているんです」って言わへん。やっぱり仲良くなってからそれが聞けてくるのだと思う。それでこそ寄り添いだと思うから。

...

W：宗教者としてもこれまで被災者に受け入れてもらえたことがすごく大事だったんですね。

A：東北では、金光教の教会も少なく、やはり金光教を知る人はほぼほぼない、そのなかでずっと通っているとやはりどういうボランティアかって聞かれることもあって、答えていくうちに「わかってた」とか「宗教だろうな」って言われるが、その次の言葉が必ずこうだった「関係ない、宗教だからとか関係ない、俺とお前の関係だから」。これは本当にうれしかった

抜粋A-7 はAが現地で被災者との関係構築に力を注いだ理由についての語りである。筆者の被災者との関係の問いかけに対して、Aは被災者の心は一回、二回の支援だけでは見られないと述べ、その安心を得るためには長期的な関わりが必要だと指摘した。続いて、Aはこうした過程のなかで築いた関係性を前提に聞ける被災者の本当の悩みがあることを述べ、この関係性の重要性を強調した。筆者は宗教者にとってこうした関係性の重要性を問うと、Aは東北の現場を取り上げ、こうした関係性は宗教者という身分に関わらずに活動を展開するのに貢献していることを示した。

【抜粋A-8】

W：一緒に活動に参加してくれている隊員たちに対するお考えは？

A：今となって考えているのは、もちろんアイデアを出したり活動をしていきますが、自分が足りないものを補ってくれる仲間を見つけていくのがすごく大事であり。それが今のメンバーが集まること、(漫画の)ワンピースのように、役割分担ができるチームを結成する。

...

A：何か一緒にできる、一緒にしないかという、やっている活動内容が全然違う、向こうは作業、こっちは炊き出し、だから一緒にやらない理由はそこにあるよ。組織挙げての連携はないけど、個人の付き合いや助け合いはよくあるよ。そういう代表はやはり○大学や、○大学の先生とやっぱ被災地で会うといろいろとアドバイスをしてくれたり、各地でどんな状況が起こっているのか情報を提供してくれているね、発災したときに先生方からくれた情報っていうのは結構大きいもので、自分ももちろん行くけど、やっぱり現地で必ず会う。さらに、その先生方というのはいろんなところの発表のなかで金光教大阪災害救援隊のことについて言及してくれているんよ

抜粋A-8 はAが支援者同士の繋がり大切さを語った際の対話である。筆者はAの隊員での考えを問うたが、Aは漫画のワンピースを取り上げ、隊員達がそれぞれの「役割分担」

にしたがって行動できてきたからこそチームが結成されていると述べる。その後、Aはさらにこの関係性の範囲を拡大し、救援隊以外の被災地で活躍している組織とも、個々人のレベルでの助け合いは存在し、こうした繋がりや活動は円滑に展開することに貢献しているとO大学との交流を例に指摘した。

抜粋A-7と抜粋A-8ではAは活動の現場での繋がりやの大切さを被災者、支援者の両方から指摘した。被災者について、Aは長期的活動を通じて構築する被災者との「信頼関係」の効果を中心に話を展開していたが、Aが例として取り上げた被災者から本当の悩みを打ち明けられた経験と宗教者に関わらず活動する個人として受け入れた経験のどちらにも被災者による救援隊への積極的な反応がある。これは、言い換えれば、救援隊は活動のなかで「返礼」を受け取り、それを「寄り添う」という活動の最終的な目標と結び付くことで受け入れ、活動を継続する理由として認識していた。支援者の間の繋がりでは、Aは救援隊のメンバーたちの存在を大切に思っており、「役割分担」をきちんとこなしている隊員達が活動の継続を支えると認識していた。救援隊以外では、Aは他のボランティア、組織との個人的な付き合いと協力ができる「利他行ネットワーク」を重視しており、それを活動の継続に繋がる一因として考えていた。したがって、Aのなかでは、災害ボランティア活動は現場にいる被災者と支援者と「現場での縁」を絶えず築き、それ以降の救援活動に役立てる活動という意味も有しているのだと考えられる。

3.4 Bのライフストーリー

Bは本研究の調査対象者のなかで一番若く、活動の参加年数一番低いが、活動に対する熱量は他の調査対象者に引きを取らないぐらい高い。本節ではBのライフストーリーを振り返り、現象学的アプローチを通して活動に対するBの意味づけを分析する

3.4.1 Bの物語

Bの実家は寺院で、幼少期からお寺の環境のなかで育ってきたが、大学までの成長過程のなかではボランティアに関する特別な体験はなかった。BはO大学の学生となり、卒業に向けて社会学の勉強を積み重ねていた時に西日本豪雨災害が発生した。発災後、Bが所属している研究室に被災地でのボランティアの募集の情報が届き、Bはこの時期から初めてボランティア活動に関わるようになった。その後、Bは何度か活動に参加していた内に救援隊に出会い、自ら志願する形式で救援隊の一員として活動に参加するようになった。それ以降、Bは活動の展開が非常に難しいコロナ時期も含め、救援隊が行った大多数のボランティア活動に参加してきた。最終的には、活動の主力のメンバーとなり、現在も救援隊が能登半島地震の被災地で展開している炊き出し活動に最低月一回のペースで参加している。また、Bはこの長期的な活動の期間中に、大学生から社会人へと、生活環境の大きな変化を経験した

3.4.2 初めてのボランティアの体験と感想

B の初めてのボランティア体験は 2018 年西日本豪雨の後の 7 月からである。B はその際に所属している O 大学の教授を経由して来た本研究の対象でもある日本災害救援ボランティアネットワークのボランティアの募集に応募、そして西日本豪雨災害被災地である倉敷市での、泥だしボランティア活動に参加した。色んな団体と関わったボランティア活動のなかで B は 10 月のとある活動中に救援隊に出会い、その活動に加わるようになったのである。抜粋 B-1、抜粋 B-2 は倉敷市での泥だしボランティアと救援隊との最初の活動について B が語った際の対話である

【抜粋 B-1】

W：人生で初めてボランティア活動に参加してどうだったか。また、その概念に触れた際にどんな印象を持ったのでしょうか。

B：はじめてボランティアに参加したのは、2018 年 7 月の西日本豪雨が発災して 1 週間後くらいのときで、泥出しボランティアに参加しました。行ってみてはじめて、メディアではわからない、水害現場の匂いだったり、砂埃がまじっているような空気の悪さに、まず、災害の恐ろしさを感じました。だいぶ衝撃を受けたのが一番大きくて、ここに何か私ができないかなという思いはその頃からあったんですね。被災者宅の中の一部を泥かき作業させていただきましたが、複数人で取り掛かって半日で綺麗になったのはほんの畳二畳分ほどでした。被災者の方が冷静に対応されているなかで、家に私のような赤の他人がぞろぞろと入ってきて作業する異常さだったり、泥に浸かった家電や衣服すべて使えなくなってしまうという現実を目の前にして、ただただ大自然への畏怖の念と、自分の無力感を感じた時間でした。

抜粋 B-1 では、筆者が B の初めてのボランティア体験について尋ねた。これに対し、B はまず西日本豪雨の後の泥だしボランティアだと回答した。続けて、B は現場での第一印象として、「災害の恐ろしさ」に衝撃を受け、その時点で何かしたい思いが自分のなかで発露したと語った。そして、B はその日の具体的な活動内容に触れ、現場のシチュエーションの異常さと大自然を前にした際の自分が感じた無力感を示した。

B が泥だしボランティア活動に参加したのは利他的な精神による「価値機能」の他、学校や研究室との繋がりに反映される「知識機能」と「社会機能」も強く影響を及ぼしている。しかし、現場の惨状を目の前にした時から、B の主観のなかでは被災地、被災者のために支援を提供する活動としての意味合いが B のボランティア活動に対する意味づけの主軸となった。そして、こうした意味づけは B に活動の効果に対する不満足感を与え、B の次の活動参加を促したと考えられる。

【抜粋 B-2】

W：その流れ(倉敷市での単発なボランティア活動)で救援隊の炊き出しに参加したのですね。

B：炊き出しにはじめて参加したのはその約3ヶ月後の2018年10月です。イベントでの炊き出しでしたが、昼間の炊き出しを終えて、夜、できたばかりの仮設住宅に残った炊き出しを一軒一軒、ピンポンを押して配りにいきました。玄関先で炊き出しの焼きそばをお渡しして回っていたのですが、あるおばあちゃんの部屋で、足が悪いから中に入ってきてと言われて、中まで入って手渡ししたところ、おばあちゃんが本当にありがとうってこう涙を流しながら、今までの災害の被害があった時から、被害当時からこの仮設に入るまで、避難所に行って、老人ホームに行って、でもちょっと詐欺に遭いかけて、でもやっとこの仮設が決まっていたいな。そこから20-30分ほど、手を握ったまま、それまでの一部始終を話してくれました。初対面の名前もわからない私に、すぐるように手を握って話される様子を見て、炊き出し一つで、ここまで心を動かすことができるのかと、炊き出しがただの食事の提供ではないことを、炊き出しの活動がすごい相手に安心感を与えるものになって実感した瞬間であり、そのおばあちゃんのために、またボランティアにきたいと思った瞬間でした。

抜粋 B-2 では、筆者がBの救援隊との最初のボランティア活動の詳細を問うた。Bは初めての活動が10月のとあるイベントだと指摘した上で、最も印象が深い体験として、夜に弁当を配った時を振り返った。当時のBが取った行動はただ炊き出しを渡すことだったが、あるおばあちゃんの仮設住宅を訪ねた際に引き留められ、名前さえ聞かれないままそのおばあちゃんの震災後の苦しい経歴をひたすらに聞いた。Bはそのおばあちゃんの話と仕草から炊き出しという活動のすごさを感じ、おばあちゃんのために救援隊で活動し続けることを決めたのである。

Bは救援隊との最初の活動経験のなかで「好ましい援助体験」を得た。Bは救援隊の炊き出し配りの活動に参加し、そのなかでとある被災者の自己開示を聞いたが、Bはこれを炊き出しの効果だと考えていた。お互いに名前も知らない相手の心の中の話聞くことは、Bにとっては泥だしの際に被災者が第三者を家の中に入れると同じく異例な行動として捉えられているため、Bはこの体験からさらに被災者のために何かしたいと救援隊での活動の継続を決めたのである。この時点で、Bのボランティアに対する意味づけのなかで苦しんでいる被災者のためという考え方が定着したと考えられる。

3.4.3 活動のなかでの葛藤と印象が深い体験

救援隊での災害ボランティア活動は長期的で且つ様々被災地に及ぶため、特にBのような学生だった参加者にとっては葛藤が生じやすく、思想の変容を起こすきっかけも多いと考えられる。実際、Bは卒業に差し掛かる時期に活動を継続させる仕方について悩んでおり、それに関する対話が抜粋B-3である。

【抜粋 B-3】

W：ここまで活動してきたなかで一度もやめたい／しばらく休みたい思いはなかったという理解でよろしいのでしょうか。

B：はい。自分でも不思議なほどに、辞めたいと思ったことは一度もありません。ボランティアの予定が最優先事項で、少しでも多く現地に足を運びたいと、活動当初から今も変わらず思っています。

...

W：救援隊で社会人になっても活動を継続することを決めた際はどのような思いを持っていたのでしょうか？

B：社会人になる前に約1年半ほど、救援隊でボランティア活動をさせていただくなかで、いつのまにか、大学生で時間があるから、この期間だけボランティアをやろうという感覚ではなく、(救援隊の活動は)自分の人生にとって大きな軸となっていました。なので、社会人になってからも、忙しくなって現地には行けなくなっても、何かしら自分にできる範囲で携わってみたいと強く思うようになり、就職活動においても、できれば救援隊の本部がある大阪で働きたいなと思い、今の会社に決めました。

-現在、能登半島地震の派遣に参加できているのは、正直、入社時には考えられなかったことですが、会社でも、周りに理解してくれる方が多いおかげで継続できていると感じています。体力的にも、もちろん疲れることはありますが、現地に行くと、逆に自分が被災者の方からパワーをもらえます。それが日々の仕事のモチベーションにもつながるので、今も継続して通わせていただいています。

抜粋 B-3 の主な内容は B が学生から社会人になり、生活様式が大きく変わるなかで活動の継続に成功した要因が示されている。前の対話のなかでは筆者は一度活動を辞める考えについて B に問い、それを B が否定し、救援隊の活動が自身の「最優先事項」だと話した。筆者は対話の流れのなかで就職と活動との葛藤についての当時の B の考えを問うた。これを聞き、B はまず学生時代を振り返り、活動を継続している内に、B が活動を人生にとっての軸として認識しはじめ、活動を継続したい意識の元で就職活動を行い、救援隊の本部に近い職場に就職したと指摘した。そして、現在の能登半島地震の被災地での活動を継続できている要因として、B は会社と周りからの理解を取り上げ、こうした関係は活動と仕事の両方の積極性に繋がると説明した。

B は一時期就職と活動を継続したい思いの葛藤に悩まされたが、自己整理を行ったところ、自身も知らないうちに救援隊での活動が「最優先事項」で、「人生の軸」となっていたことに気付いた。そのために、B は活動の継続を優先させることを就活の際の判断の基準にするようになり、葛藤を乗り越えたのである。また、B が救援隊の活動を優先させている態度を自身と周りへ明示することによって、B を受け入れた会社では活動に対する理解度も高くなり、それが B の入社後の活動継続に繋がったのである。換言すると、B の活動継続には「周りからの理解」が非常に重要であり、こうした理解されやすい環境を見つけたのに B が長期的な活動を通して活動そのものを「人生の軸」として定義づけたことは非常に大きな影響を及ぼしていた。

葛藤以外でも、活動の長期化に伴い、B の活動経験もより豊富になり、その中には B に影響を与えるほど印象が深いものも含まれていると考えられる。抜粋 B-4 は B が印象の深

い体験について語った際の対話である。

抜粋 B-4

W：初回以降の活動で最も印象に残った出来事について教えてください。

B：西日本豪雨災害の真備町での活動を続けていた頃、とある公民館で、被災者の方と救援隊と、一緒に炊き出しのご飯を食べる会が何度かありました。ある時に、いつものように皆さんと食事をしていると、終わり際に、向かいに座っていた被災者の方から、「また来たときにはここに座ってな」と声をかけていただきました。何気ないその言葉が、当時の私にとっては、やっと、少しだけでも被災者の方に、気持ちが届いたような、そんな気がして、忘れられなかったのと、継続して通ったからこそ、そう言ってもらえる関係性ができたんだと目に見えた瞬間でした。もちろん、その次の会では、その方の近くに座りましたし、それからできる限り全ての活動に参加して、少しでも被災者の方の心が救われる瞬間があればいいなと通い続ける理由の一つになっています。

W：確か熊本でも同じことを言われた？

B：やっぱり1回目に行った時っていうのは、私も初めてお会いするので、多分熊本の方々もどんな人なのかなっていう目で見えていたと思うんですよね。でも、その2回目に行った時に、「あ、また来てくれたね」って、「ありがとうね」って言ってくれたところはすごい嬉しかったですし、なんかこう、熊本をから帰る時にも、また被災者にこう背中ポンって叩かれて、「また来て」って言われた時には、やっぱりもうまた来ないといけなくなって思いましたね。

抜粋 B-4 では、まず筆者が B に印象の深い活動経験について問うた。B が答えとして取り上げたのは真備町のとある公民館での被災者との炊き出しの食事会で、B はその会の回数が重ねていく内に被災者に認知されて、次は隣で食べるよう声かけられた経験だ。この体験から、B は自身の「気持ちが届いた」と感じ、継続的に活動する意義としてこれを受け止めた。そして、こうした瞬間が次第に B が活動を継続する要因になった。筆者はこれを聞き、参与観察の経験から別の被災地でも似たような体験はあると感じ、それを B に確認したが、B はこれを認め、熊本地震の被災地では被災者に「また来て」って言われたことが次の活動参加の動機に繋がったと指摘した。

B の印象の深い体験では、自身の活動、気持ちに対する被災者からのリプライが中心となっていた。B は真備町と熊本で活動を繰り返すことで現地の被災者に認知され、声をかけられる対象として見られるようになったが、B はこれを嬉しく感じる一方、長期的な活動だからこそその結果だと認識し、この認識によってさらに活動を継続したい思いを固めたのである。こうした B が活動のなかで継続の動機を得る一連の出来事のなかでは、一見すると B の被災者を助けたい気持ちが被災者の「リプライ」という「反対贈与」行為によって認められ、それによって B が「自己効用感」を得て、活動の継続意欲を向上させられたが、B の主観では長期的な活動を通して築けた、B 自身の「被災地や被災者への好感度」を含んだ被災者との「信頼関係」が中心となっていた。この場合、B 中のボランティア

活動には被災者に寄り添うために「信頼関係」を求めることが意味づけられたと考えられる。

3.4.4 活動における宗教の関わり

ボランティア活動の継続に対する宗教の影響は第一章で既に述べた。B は実家が寺院であり、長期的なボランティア活動のなかで所属しているのが新宗教である金光教の組織である。こうした環境のなかで、宗教の信仰が B の活動に対する意味づけに及ぼしている影響を考察することには大きな意味が存在する。本小節では、まず抜粋 B-5 で B が仏教による影響について示す。

【抜粋 B-5】

W：ご出身のお寺での教え/家の教養による影響は当時の活動に力を注ぎたい思いと関連があるとお考えなのでしょうか？

B：当時活動をはじめた頃は、関連があるとは思っておりませんでした。今になって振り返ってみると、父の教えと関連していて、ボランティア活動に出会って、今活動をしているのも、どこか導かれているように感じています。小さい頃から、「人の見えないところでいいことをしなさい」と教わり、またお盆やお正月の手伝いの後には、「お供え物のお下がりをお願いしているから、仏様に育てられたんだよ」と言われて育ちました。その言葉が自分の芯となっていき、「目立たなくても、人の役に立つことが自分の喜びに繋がる」といった価値観形成に影響し、今のボランティア活動に繋がっているような気がします。

抜粋 B-5 は筆者が寺院である実家の教えがもたらした B への影響について質問した際の対話だが、B は活動の際には感じなかったと断る一方、筆者の問いを受け、幼少期を振り返った結果、やはり僧侶である父親の教えに「導かれている」感じがあると述べた。さらに B は具体的なエピソードを語り、「目立たなくても、人の役に立つことが自分の喜びに繋がる」という自分の家から受け継いだ価値観と現在の活動との関係を提示した。

B はこれまで活動してきた過程のなかで、己の選択を自然的なものだと考えており、自身が育てた環境と深く関連づけることはなかったが、筆者の問いかけによってそれに気付いたのである。つまり、筆者との対話を通して、B はボランティア活動に対してお坊さんである父親から受け継いだ自身の価値観に基づいた活動と意味づけたと考えられる。

B に対する宗教の信仰の影響は救援隊の活動の中にも見られた。この場合、B は金光教の信者ではないため、直接的にその教えから影響を受けた訳ではないが、B はその教えを守り、宗教者として実践する A の姿から感銘を受けた。抜粋 B-6 の B の語りがこれを証明している。

【抜粋 B-6】

W：(活動を主導するのは) A だからこそみんなが集まったって思った場合はありますか。

B：それはめちゃくちゃあります。なんか、Aやからこそここまで続けてこれたんやなっていうのは思いますね。

W：Aのリーダーとしての魅力ですか

B：…こう本当に今までに出会ったことがないようなくらいに、まあいろんな経験をされていて、実際社会人経験があるというのも大きいですし。

-なんか、本当に様々な経験をしてきて、で、東日本大震災から実際現地に行っているところをこう見てきて、聞いてきて、悲惨な現場に回ってきてっていう方っていうのは、やっぱりこの人間力の高さが本当に高すぎると思うんですよ。

W：言葉で表せないくらい？

B：言葉で表せないくらいにいますし、まあ、あのキャラ的にも、なんかこう、Aと合う方、合わない方には正直いると思うんですよ…

-行動力ももちろんそうですし、また自分の思いにしたがって行動しているところとか、自分その被災者の方々のために。

W：信念と信仰を？

B：はい、信念と信仰を貫くことができること。

-やっぱり精神、宗教者として、こう社会のためになるってなった時に、この被災者の方々のためになるっていうのが自分のその信念というか、それが本分だからみたいなことおっしゃってるのに、それをずっと突き通して、本当に強い思いでやられていたり、本当に被災者の方々のためにどうしたらいいかなっていうのをずーっと考えて考えて、あんなに被災者のことを考えてやられているボランティア団体がいるのかなみたいな

…

W：熊本地震の帰りの時にそう(被災者への思いを)感じたのですね。

B：そうですね、最終日の時に、えっと、まあその週に、向こうから大阪に帰ってきた鶴橋教会で祭りがあって。

-(祭りを)開くことになっているんです、…空港だけでなく、途なかで市場寄って、スーパーマーケットを寄って、そこでお祭りで使われる野菜とかお菓子とか、いろいろと買ってきたんですよ。…被災地で、先生のお話からすれば、お金を落としたいということで。最後はいっぱいになるまで買って帰っていらっしゃいましたけど。しなければならぬというわけではないことにおいても、被災地の方々をちゃんと、まあ別に具体的な誰かではなく、もう被災地そのものを考えて行動をされているところですか。被災地の方々とか被災地とか、本当に直接的じゃなくても間接的でもっていうのもありますし、本当にそれだけじゃなくて、なんかこう、不思議な力がAにあるからこそ、こうやって人も集まって、その考えに共感する人がまた集まってみたいな感じで、そういうものだなんてのも思いますね。

抜粋 B-6 では、筆者がまず救援隊の活動の成立とAの関係についてBに問いかけた。Bは活動ではAの存在が必要だと答え、その魅力的な特徴について多くの経験から培った「人間力の高さ」を指摘した。Bはさらに被災者、社会のために動くというA個人の、宗

教者としての強い信念を取り上げ、ここまでできるボランティア団体の珍しさを強調した。筆者はこうしたBのAに対する印象の根底にある実際の経験について探りを入れると、熊本地震での経験について言及した際に、Bは具体的なエピソードを語った。Bは熊本地震の被災地からの帰り際に、Aがわざわざ現地の商店を多く回って大阪に戻った後の行事のための食材などを購入したことを取り上げた。大阪に戻った後に購入する方が便利なこれらの商品を熊本で買うことで現地の経済に貢献すると言うAを前に、Bはその精神に共感しAへの信頼がより高まった。

Bにとって、Aは救援隊の活動に参加するまで「出会ったことのない」存在だった。Bは活動中の様々な出来事からAの被災者のために尽くす信念の強さと「人間力の高さ」を認識し、尊敬と信頼の念を抱くようになった。Bにとって、Aは活動が成立するのに必要不可欠な存在であり、災害ボランティア活動における自身の「ロールモデル」でもあった。この「ロールモデル」は同時に、社会貢献する宗教者の一つの像でもあるとBが認識している。そして、Aに対する信頼を抱いた時から、Bの中の救援隊での災害ボランティア活動は尊敬するAとともに被災者のために全力を尽くす、つまり救援隊のリーダーであるAの活動をサポートする活動として意味づけられた。

3.5 まとめ

本章では宗教関連の組織による災害ボランティア活動の現場を取り上げ、災害ボランティア活動と研究対象である救援隊の特性をまとめた上、そこに所属しているボランティア2名を対象に、彼らのライフストーリーを振り返るとともに、彼らのボランティア活動に対する意味づけを現象学的還元の手法で分析した。

まず3.3、3.4から得られたAとBそれぞれの長期的なボランティア活動を行う過程の意味づけとその変容は以下のように示すことができる。

Aの災害ボランティア活動に対する意味づけの基調は信仰の実践であり、これはAが活動を正式に始める前から決まっていた。Aは金光教の教師になった後、現実のなかでは教師を目指す際に理想としていた三代目教主などの偉大な「ロールモデル」に近づく手段がなかったのに苦悩したが、東日本大震災の発災により、Aは被災地の惨状から災害ボランティア活動が教義を実践し、「ロールモデル」に近づく活動として意味づけ、現場に赴いた。現場では、Aは自身の失敗、シャンティの成功と被災者の苦しさを体験することで、有馬実成という災害ボランティア活動における「ロールモデル」を得て、ボランティア活動を被災者に尽くす活動として捉えるようになった。それ以降、Aは二度も救援隊を辞める直前まで追い込まれたが、その本心を見抜いた教主と母親によって支えられ、この支えを活動する意味に加えた上で活動の継続を決めた。そして、長い活動期間中に、Aは救援隊メンバーからのサポートと被災者らとの「信頼関係」の大切さを知り、救援隊の活動をこうした「現場での縁」を維持する活動として定義づけるようになった。

Bの活動に対する意味づけの構造は比較的純粋なものである。その元にあるのはBの家庭環境から身につけた「利他的な心」で、これが最初の災害ボランティア活動と救援隊と

の初めての活動の体験によって「被災者のために」何かしたいという強い信念に変わり、救援隊でのボランティア活動はその手段として意味づけられ、それ以降の長期的な活動を支え続けた。この信念から、Bは活動における被災者との「信頼関係」を重視するようになり、その構築と維持を活動が続ける意味として捉えた。また、「ロールモデル」であるAへのサポートもBのなかでは活動の意味の一つとなっている。言い換えれば、長期的に活動するBのボランティア活動に対する意味づけのなかでは「現場での縁」が中心的な位置にあった。

Aの理念による影響をBは救援隊の活動を通して絶えず受けていることにより、二人の活動に対する意味づけには共通する部分が多く、特に顕著に表れている点が「被災者のために尽くす」「利他的な心」と「現場での縁」を重視していることである。

表現の仕方にこそ相違が見られるが、AとBは両方とも共感力が高く、被災者への奉仕精神が高い性質を持っている。そして、こうした性質は二人の語りにおける初回の活動系経験への意味づけから見られた。Aのなかでは、初めて東日本大震災の被災地に赴いた際に見たシャンティの炊き出し活動を自身の活動の原点であり、救援隊を立ち上げた理由だった。Aはこの体験から、特に豚汁一杯で涙を流す被災者の姿を見て、その苦しさに共感し、災害ボランティア活動で自身の目指すべき方向を決めたのである。一方でBが災害ボランティア活動に執着するようになったのも、初めての泥だしボランティア活動の体験だ。現場の惨状から被災者の苦痛と初めての救援隊との炊き出し配りの活動の際に仮設住宅のおばあちゃんの孤独と苦痛に共感し、そのために何か力になりたいと思ったのである。こうした衝撃的な体験は、AとBの中の災害ボランティア活動の重要性を一気に引き上げ、「被災者のために尽くす」思いを実現する活動へと変換させたと考えられる。桜井(2005)は「利他心」は活動参加の動機になるが、長期的な活動の継続の動機にはならない可能性がある」と指摘している。しかし、AとBのライフストーリーから見られるように、「利他的な心」は衝撃的な体験により、継続動機として機能するようになる可能性があると考えられる。

「現場での縁」を大切にしていることもAとBの会話のなかで通じ合っている点である。Aは現場での被災者との関係構築が活動を長期化させる必要条件だと考えており、Bもまた語りの重心を被災者からの「リプライ」に置いている。Aは宗教者である身分が公開された後も被災者からは普通の災害ボランティアの一個人として見られていることを取り上げ、Bは被災地に向かい続けている内に隣で食事するよう被災者に誘われたことを語った。両者の語りから見られるのは二人の被災者の反応への敏感さと相手に受け入れてもらえることに対する強い意志である。そして、こうした意志や被災者のリプライへの追求は二人が活動を長期化させている理由を生み出している。ただし、ここで筆者が指摘したいのは、Bがこうした意志を持てるようになるためには、救援隊の初めての活動でのおばあちゃんと強い縁を結べた体験から培ったものであり、その体験がなされた原因として救援隊の長期的な「寄り添う」活動姿勢が挙げられることから、Bが「ロールモデル」として認識している、救援隊の活動姿勢を決めたAによる影響は無視できない。

AとBは両方とも「被災者のために尽くす」軸に基づいて活動を継続しているが、Aの場合、この軸の裏にはもう一つAの宗教者人生を貫通する「金光教の信仰の実践」の軸が存在していることもBとの違いである。そもそもAが災害ボランティア活動に参加した背景の一部は教師になったあとの周りの環境への不満足感である。この不満足感はAの宗教者としての人生を貫くものである。Aは一時期自身と現代の金光教が置かれている現実と求めようとしていた昔の教師達の人物像との間のギャップに失望し、己の宗教者人生の方向を見失ったが、その状態からAを救い出したのが災害ボランティア活動である。そのために、Aによってボランティア活動はAが宗教者として、現代で昔の教師らを目指し、宗教的な理想を実現するための生き方として意味づけられていると考えられる。

AとBの活動に対する意味づけはその中の信仰の関わり度合いからも相違が見られた。上述したように、Aの活動参加、継続にはずっと現代で信仰を実践し、ロールモデルへ近づく希求が後押ししており、強い「信仰」はAの活動の欠かせない部分とも言える。一方、Bは家族による仏教的な思想を持っているが、この思想の自身の活動に対する影響についてはBはインタビューを受けるまでそれほど感じられなかった。その代わり、Bの活動継続では、「現地での縁」が主要な理由となっており、活動を継続したい意志をますます補強されていく。

最後に、二人のもう一つの特徴として、周りからの活動への理解が挙げられる。Aは二度辞める思いを抱いたが、その度にそれぞれ信奉する対象である教主と尊敬する対象である母親の理解を得て活動を継続した。一方のBも、社会人になっても活動が成立するのは会社の理解と支持があつてのことである。筆者はこうした状況を作れたのは長期滞在する災害ボランティア活動の特性という客観的要因に加え、AとBは両方とも自身の救援隊での活動を優先する意志を早い段階から周りに示してきたことも考えられる。

総じて、長期化するニーズがある災害ボランティア活動と救援隊の活動という背景の元で、ボランティアであるAとBはともにボランティア活動を人生の一部だと見なしており、その意味づけのなかでは「現場での縁」の構築と維持や「被災者のために尽くす」「利他的な心」が含まれている。しかし、Aの意味づけの中にはさらに信仰の実現という軸が隠されており、ボランティア活動はAの人生を貫通している一部である一方、Bの意味づけのなかでは、特に現場にいる被災者達との「信頼関係」の重要性は活動の回数とともに増してきたのだと考えられる。

第四章 電話相談ボランティアで繰り返される「意味」の探究－大阪自殺防止センターの事例から－

4.1 はじめに

自殺は、人類社会における大きな課題である。WHO は世界中には毎年 70 万人以上の人口が自殺で亡くなっていると報告しているが、OECD のデータによると、日本はそのなかでも自殺死亡率の上位国となっている（厚生労働省,2024）。日本では、特に 1998 年から自殺者数が毎年 3 万人まで急増し、自殺問題が大きな社会問題として顕在化した。これに対応するために、2006 年では自殺対策基本法が制定され、2007 年では自殺総合大綱が認められ、その効果もあって 2009 年以降の自殺者数は減少し続けてきたが、2020 年のコロナショックを受けて再び増加し、毎年 2 万人以上の高い値をキープしている。

現代では、電話相談は自殺を直接防止する有効な手段の一つである。その歴史を遡れば 1950 年代のイギリスまでたどり着く。イギリスのキリスト教の祭司エドワード・チャド・ヴァラーが 1953 年にロンドンで創設した「Samaritans サマリタンズ」という人生相談サービスが世界最初の自殺防止の機関である。チャドは牧師として事実ではない疑いから自死したとある少女の葬祭を行った後、自死を食い止めるためにボランティア活動としてこのサービスを立ち上げた(M.Dickens, 1996)。「サマリタンズ」の活動はその後急速に広がり、世界で展開するようになったが、それが日本に伝来したのは 1970 年代だった。

日本の電話相談活動は、その組織の性質から民間福祉団体による活動と地方公共団体による活動の二つに分けられる(酒井,1994)。さらに、民間福祉団体による活動の中には活動の方針の違いで自殺予防活動団体と自死遺族支援団体に分けられ、日本での自殺関連の民間福祉団体の多くは危機介入を主な活動内容とした自殺予防活動団体である(森山,2016)。そして、これらの自殺予防活動団体の一種として最も早い時期から「サマリタンズ」の影響を受け電話相談活動を展開したのが、1971 年に発祥した東京いのちの電話である。「いのちの電話」はそれ以降長い時間をかけて全国範囲内で展開していき、現在でも活動を継続している。

電話相談は対面の相談や手紙などの即時性のない相談方式にない、電話相談ならではの特性がある。電話相談の特性については様々な検討が行われてきた。例えば、長谷川(1990)は電話カウンセリングの特性について①即時性、②超地理性(空間の制約がない)、③匿名性とかけ手主導性、④密室性と守秘義務、⑤一回性、⑥経済性を挙げている。これらの特性は、表現こそ相違する場合はあるが、その後の研究者によって繰り返し提示された電話相談の活動の主な特性である(田中,1994、佐藤,2001、有田,1997)。電話の聞き手であるボランティアが受ける影響の視点から考えた場合、特に注目すべきなのは、③匿名性とかけ手主導性である。電話相談において、かけ手と聞き手は大体の場合お互い初めての会話相手で相手の情報を知らないのだが、聞き手は電話相談団体に所属している以上、相談員という肩書きを常に背負っている。この関係においては、かけ手は特定され、自分の周りの人間関係に左右される不安から解放される。発言の自発性・主体性、対話における優位性が保証される一方、その主体性が暴走し、無責任な発言、当初の目的から外れた電

話や感情の暴走といった極端的な状況が起きやすくなる(長谷川,1990)。こうした状況は聞き手である相談員に大きな精神負担を与え、バーンアウト感情を起こさせ、活動の継続の障害となる可能性がある。また、匿名状態で一回性のある電話相談では、ボランティアは電話が終えた後の相談者の動向を知ることができないため、結果に対する不安を増大してしまう可能性が存在する。そのために、電話相談ボランティア活動において、スーパービジョンの存在は大きな効果を発揮している(石田,2024)。

長期的な電話相談ボランティアに関心を示した検討も行われてきた。古賀ら(2015)は関東地区の電話相談ボランティア組織に所属する相談員を対象に調査を行ったが、その際にボランティアの減員率は活動の5年目(男性)、10年目でより顕著的になると指摘し、活動の阻害要因として①人間関係、②組織の問題、③当番の重責、④匿名性、⑤研修問題、⑥かけ手からの被害、⑦自分の対応力の不足、⑧自分の区切り・年齢の計8つのカテゴリーを提示し、特に人間関係と組織との不和がボランティアに大きな影響をもたらしていると分析した。一方、活動の継続動機に関しては、青山ら(2000)の活動歴が4年以上の場合、長ければ長いほど「自発的動機」が高くなるという指摘に踏まえて、古賀ら(2017:14)はさらに「自己を再発見し成長」させ、「自分の他人との関わり方」に役立て、「活動が自分の生きがい」や「ライフスタイルの一部」となる【自己成長活動志向的動機】を提示し、それが活動年数が5年から10年までのボランティア群で最も重要だと述べた。

電話相談ボランティアの参加、継続動機は従来の研究である程度解明されているものの、現状では電話相談に従事するボランティアは依然足りておらず、長期的な活動者も増加する傾向を見せていない。古賀ら(2017)が提示した【自己成長活動志向的動機】は長期的に活動するボランティアの継続要因の特徴を捉えているが、その裏に隠されている個々のボランティアが持っている本来の性質や特別な経験についての深掘りが充分になされていない。そのため、長期的な電話相談ボランティアの活動継続要因には未だ考察を行う余地があると考えられる。

4.2 大阪自殺防止センターとインタビュー対象

本研究の研究対象は大阪自殺防止センター(以下：センター)である。2025年現時点のセンターは認定NPO法人であり、そのフルネームは「国際ビフレンダーズ 大阪自殺防止センター」である。「国際ビフレンダーズ」は先述したチャドによって立ち上げられた「サマリタンズ」の活動が海外に広がり、「国際サマリタンズ」として組織化された後、1991年に改称された組織である。現在では約40カ国、約400ヶ所で活動を展開しており、日本では7ヶ所の自殺防止センターが加入しているが、現時点で活躍しているのは主に東京、大阪と宮崎の自殺防止センターである。センターは1983年に「国際サマリタンズ」に正式に加入したが、それまでは自発的な電話相談活動団体だった。この団体は1978年に発祥しており、当時は「関西いのちの電話」に所属していたボランティア相談員38名が電話相談事業のみに対応する組織の形態に不足を感じ、自殺企図者に対する介入や自死遺族への支援も活動内容にいれるために有志で設立した組織である(森山,2016)。センターは設

立された以降独自で発展し、2000年にNPO法人格を取得し、2013年には認定NPOとして認定された。活動の拠点について、現在のセンターは長堀橋駅近辺のオフィスビルで一室を借り、その一室を電話相談ブース、ボランティア休憩所と事務処理のためのオフィスの三つの区画に分けて利用しているが、発足した当初から2000年代前までは近くのキリスト教会で電話対応の空間だけを借りて活動を行っていた。筆者が調査を行った時点ではセンターの活動者は42名であり、1995年阪神淡路大震災直後の全盛期での120名以上という数字には遠く及ばない。しかし、当時は高齢者や働く必要のない主婦が主要なボランティアメンバーだったのに対し、現在のメンバーは高齢者が残りつつも2、30代の青年、中年層の比重の増加が見られる。

本節では現在のセンターを中心に、本研究に関連のある活動の方針や特徴、筆者とセンターの関わりとインタビューデータの現象学的還元を行う基準について説明する。

4.2.1 大阪自殺防止センターの活動内容

センターの活動目的は「電話(面接、手紙)によって、人生の危機に直面して生きる希望と力を失いそうになっている人に対し、傾聴とビフレンディングにより苦痛、孤独、絶望、抑うつを和らげつつともに生きることを目指します。また広く社会へ自殺の防止を啓発し推進していくことにあります」⁶となっている。この目的を実現するために、センターのメンバー達は電話相談活動を主要な活動としつつ、月2回の自死で大切な方を亡くした人のための自死遺族のつどい、SNSやチャットアプリによる相談活動、面接相談、慈善イベントの開催または寄付や大阪府の駅と学校を対象とした相談ポスター配布活動も行っている。これに加え、センター全体ではないが、代表役や一部の管理層のメンバーは様々な場所でゲートキーパー育成研修の講師として活躍している。

前節で触れたように、自殺防止の電話相談のボランティアは「死」というテーマ身近で扱うため、たとえ善意があり、心構えがあっても、専門家ではない市民には難しい活動である。そのため、多くの組織では、組織が用意した研修の課程を修了することを活動の現場に入る条件とされている。こうした課程は組織ごとで内容と期間において様々な相違が存在するが、筆者が参与観察を行った時点で、センターでは年に4回(一般向けの講座2回と学生向けのユース講座2回)の講座コースが実施されている。センターでは、講座を受講が決まる前に全ての応募者に対して適正テストが行われる。1回の講座を受ける人数は数人程度で、コースでは計12回の講座が3ヶ月内で行われ、応募者は全ての講座を受けた後に改めて実際の相談現場でボランティア活動に参加するかどうかを問われる。これは、講座を経て自身のことや電話相談の厳しいところを理解した上で、活動に対して気乗りできない応募者に引くタイミングを作るための問いでもある。講座の具体的な内容は講座の効果を最もよく発揮するために公開できないが、主な目的は受講者の自己認識と自殺相談を中心とした対人支援に対する認識の向上である。そこには応募者、センターに加え、管理層を含む現役のボランティアも受講者として参入しており、応募者がより良くセンターに環境になじむための工夫がなされている。講座を受けてなお電話相談ボランティアとして

活動を志望する応募者は、次のステップとして実習メンバーの立場で現場に入り、電話相談を実際に受けながら一定期間の研修を継続する。研修期間内では、応募者には電話相談のシフトを入った度にスーパーバイザーと面談する義務が課されており、その面談では応募者は電話相談の内容に基づいて自分の気持ちや対応を整理し、己の不足点、改善点をスーパーバイザーの助言とともに見つける。研修の具体的な期間は応募者の成長具合に応じてスーパーバイザーが決めるものであるが、その研修を終えて応募者はようやくセンターの正式なボランティアとして認定される。この過程全体には基本 1 年以上の時間が必要で、講座を受けるためには 3 万円の受講料が必要である。そのために、センターのボランティアになるには他の一般のボランティア活動に参加するよりもハードルが高く、ボランティアの数も簡単には増やせない。

正式の電話相談ボランティアに向けても、センターでは月に 1 回継続研修を実施している。その内容は外部の講師による講座、メンバーの発表やグループワークなど多岐にわたるが、基本対面で行われるために普段ではシフト制で入れ替わるボランティア達にとっては活動の関連知識を勉強すると同時により多くのメンバーに出会い、意見交流する機会にもなっている。また、継続研修以外でも、ボランティアは個々の需要に応じてスーパーバイザーとの面談を申し入れることができる。このように、センターでは電話相談活動の業務の一環として、ボランティア志望者と正式のボランティアに対する育成、ケア活動も常に展開している。

電話相談活動の詳細を見ていくと、筆者が調査を行った時点ではセンターの相談電話対応は金曜日の午後から日曜日の夜までに限定されている。この時間の限定は 2010 年から始まっており、それまでは 24 時間無休で電話相談に応じていた。時間帯を限定するようになったのは主に少子化や夫婦共働きといった社会全体的な変動やライフスタイル変化がもたらした人手不足からである。そして、この限定された時間のなかでは 1 日の時間は五つの時間帯に分かれ、ボランティアはシフト制で 1 回に 1 つの時間帯を担当するように決められている。言い換えれば、ボランティアは 1 回のシフトで約 5 時間の間相談電話に対応し続ける必要がある。

まとめると、センターの自殺防止の電話相談ボランティアは「死」というテーマを扱う以上心理的な負担が思いに加え、相談員になるまで過程と実際の相談業務を行う過程での物理的なハードルも高い。これに対し、センターはボランティアという枠を超えないでできる限りのサポートを提供しているが、それでも相談ボランティアには常に活動によるストレスが襲いかかるリスクがあり、長期的な活動で葛藤が生じやすいだと考えられる。

4.2.2 筆者とセンターとの関係と現象学的還元の基準

筆者は 2023 年の夏に偶然参加した自殺者遺族の講演会でセンターとの出会いを果たした。当時の講演会では、センターは主催者として会場の運営をしており、会場では講演を行う方以外にセンターに関する宣伝資料も貼られていた。当時の筆者はちょうど本研究のために日常のなかで終末期現場での支援活動を行っているボランティアを探している最中だっ

たので、その場でセンターの活動に関わることを決めた。その後、筆者はセンターが秋に開催した講座に参加したが、その講座のなかではセンターの「自殺したい」という思いをそのまま受け止める態度やメンバーそれぞれのエピソードに魅了され、他のメンバーの同意を得た上でボランティアとして活動に参加しつつ参与観察を行うことを決めた。実習ボランティアになってからは月 1 回のペースでシフトに入り、およそ一年をかけてスーパーバイザーの認定を受けて正式な電話相談ボランティアの一員となり、現在も同じペースで活動を継続している。

筆者がボランティアとして電話相談に関わってきたのは僅か二年未満の間だが、そのなかでも他のメンバーがセンターを脱退し、代わりに新たな実習ボランティアが活動に加わるという事態を多く経験した。それぐらい、今のセンターでは一部のメンバーの入れ替わりが激しいのである。メンバーの構成から見ると、近年の新入のボランティアは大学生、院生が多いが、そのために卒業、就職に伴う脱退が多く見られた。また、社会人の場合でも、転勤や転職が発生する際に活動の頻度が下がったり、来られなくなったりする場合はよく見られた。その結果、近年のセンターではボランティアの数は講座が開催されるごとに増えているものの、全体的には減少の傾向を見せており、相談電話の対応率も昔ほど高くなかった。こうした状況の中にこそ、今後のセンター側の対策のために本研究で長期的に活動しているメンバーの特徴を把握しておく必要がある。

本研究で半構造化インタビューの対象となっている C と D はどちらもセンターで 10 年以上ボランティア活動を継続してきおり、現在はスーパーバイザーも兼任している中心的なメンバーである。筆者が C と D に正式に出会ったのが研修講座を受けた際に、当時は C が講師であり、D が受講者という立場で筆者と関わっていた。筆者が実習ボランティアになった以降では、C はスーパーバイザーとして筆者が認定されるまで電話相談活動のサポートを行ってくれた。そして、筆者が研究の経緯を説明し、協力を仰いだところ、C と D は両方ともインタビューへの協力を快諾してくれた。

本研究では、筆者は研究対象者が語ったライフストーリーに基づいてそれぞれの時点での語り手のセンターの活動に対する意味づけを分析するために現象学的な還元を行う必要がある。そのためには、筆者が持つ研究対象者、電話相談活動に対する事前認識やイメージの一部を保留する工程が必要である。

したがって、留意すべき点は本節で紹介した筆者がセンターの活動を調査、実践する際に得た様々なイメージであり、それらをまとめた上で決めた本研究において筆者の社会通念や先入観は以下の通りである。

(1)伝統的なボランティア理論

具体例：ボランティアの基本的な性質：「自発性」、「無償性」、「公共性」

(2)電話相談員に対する社会的通念

具体例：「電話相談員は一人のみで電話に対応している」、「電話相談は心理的負担が高い」、「電話相談員は研修に費用をかけたため、短期間では辞めづらい」、「電話相談

員は相談者の意志に従うのが」、「電話相談員はどんな手段を使っても相談者の自殺願望を止めるべきである」など

(3)語り手に対する個人的な認識

具体例：現在の組織における立場(Cは理事長、Dは副理事)、語り手に対する筆者の個人的なイメージ(スーパーバイザーを務められるほどのベテラン、電話の対応に前向き)など

以下の分析では、筆者は会話を精読し、理解する際に、上記の内容を可能な限り一旦保留することで会話の内容が発生した際の語り手の「生ける現在」に近づく。なお、電話相談員 C、D の語りのなかでは「コーラー」が頻繁に現れるが、これは相談電話のかけ手(相談者)を指す言葉である。

4.3 C のライフストーリー

本節では、センターでの活動歴がより長い C のライフストーリーのデータを整理し、現象学的アプローチを通して活動に対する C の意味づけを分析する。

4.3.1 C の語りの流れ

C がボランティアとしてセンターで活動し始めたのが 19 年前の 2006 年だが、当時は 20 歳だった。現在はセンターの管理運営層の一員で、相談員として活動しながら他の相談員の育成やサポートに関わるスーパーバイザーを務めている。普段はセンターの広報、財政、シフト管理などの事務に携わっている。また、前節で紹介した現相談員のための毎月の研修イベントや年に 2 回(ユースも含めば 3 回)の研修講座にも企画、講師として参加しており、他の相談員達を引っ張っていく役割を発揮している。センター以外でも、学校、他の NPO、地方自治体の社協や行政の委託を受けた財団など様々な団体から依頼を受ける度に自殺予防をテーマとした講演を頻繁に行ってきた。

客観的な立場から見れば、自殺予防のための社会活動は、現在の C の人生の一部であり、キャリアの一部だとも言えよう。筆者の構えとしては、少なくともセンターの運営層の一員となり、活動へ関わる立場が変化した現在の C には、自身のボランティア活動に対して、純粹の社会貢献活動であるか、責務であるかといった意味の同定に葛藤を抱えていた経験が表出しやすいと考えていた。しかし、C の語りでは、センターでのボランティア活動はキャリアとして何かを実現しようというより他者との繋がりに重心が置かれていた。そこで本節では、こうした C の語りをセンターで活動に関わる以前、センターの活動に参加する時期とセンターでの活動が長期化する時期の 3 つに分け、それぞれの時期における C のボランティア活動に対する意味づけを考察していく。

4.3.2 C がセンターと接触する以前のボランティア活動経験

C は 20 代前半からセンターのボランティア活動に加わったのだが、これが C にとっての最初のボランティア活動ではなかった。C がはじめてボランティアになったのは中学生の時で、活動内容はカンボジアの教育機関を支援するために日本の NPO 法人がフリーマ

ーケットで出品する商品の値札貼りであった。これは学校側が募集をかけた活動だが、その前に学校ではこの NPO 法人の代表者が講演を行い、それが C の活動参加のきっかけとなった。

抜粋 C-1 は、講演で感動を受け、その後活動に応募するまでの過程を C が振り返った際の対話である。

【抜粋 C-1】

W：感銘を受けたというのはどういった印象でしたか。

C：まず、そもそも僕は、社会貢献という概念が、当時頭の中になくて、人のために、仕事以外のところで、誰かが働くということが、ちょっとまずびっくりしたというか、そんな生きる選択肢が人にはあるんだということを驚きましたね。

-もう一点は、内容もびっくりしました。内戦が続いていて、その傷跡があんまりにも深く、日本とはまるで違う海外の状況にびっくりしたという事と、そこに赴いたその方がその国のために何かできるかと考えて動き始めたのにもびっくりしました。

-その点が僕にとっては衝撃的で、何かお手伝いしたい気持ちにすごく引き寄せられていた。

W：発表者が言葉(しか使わなかった)だけでも、C さんの中には景色が(見えたのですね)

C：そうですね。女性でしてその発表者が、その時の光景を私は今も覚えていて。私はその講演会をただただ最初から最後まで集中して聞いていました。難しい言葉は何も使わずに、ただただその人が見た景色を率直に伝えてくれましたね。

-振りかえてみたら何より、当時の私はものすごく孤独な思いがあったんですよ。というのは、家庭環境があんま良くななくて。で、すごくさみしいなという気持ちを当時抱えていたのは覚えていますね。

-で、自分の寂しさと、人のために何かするその人の姿は何か、なぜか分からないけど結び付くような感じがあって、多分どこか私も癒やされたいという気持ちはあったんでしょうね。

W：他人を助ける事と他人と繋がるのが(繋がっているように思えましたか)

C：多分そうだと思いますね、今思ってみれば。当時僕は誰とも繋がろうとはしなかったんですけど、心の底では誰と繋がったかったんですよ実は。

W：クラスのなかでもそうだったのですか

C：クラスのなかでは僕は友達がかなり多い方でした。(笑い)多いですけど、すごいコアの自分のね、自分自身の人間としての悩みというのはなかなかクラスメイトには打ち上げられなかったですし、学校の先生にも同じだったんですよね

C：内側の自分は孤独を感じていたのですか

W：自分ではかなり意識していました、すごくはっきりと、自分は寂しいとか。小学生の時期からずっと、自分自身はなにか孤独感でいっぱいでしたね。

抜粋 C-1 では、C はまず NPO 代表者の講演で受けた感銘を内戦中のカンボジアの現地

状況のひどさとそのために職業以外で働く代表者の生き方の 2 つに分けた。C にとって、この 2 つの事象はいずれもはじめての情報で、だからこそ己の中から「お手伝いしたい」気持ちが生じるほど衝撃的だった。筆者はここで当時の C が講演に魅了されたと感じたが、C はこれを肯定し、その理由として講演者の言葉の「率直」さを挙げた。そして、C は当時の自分の考えに立ち返り、その講演に引き寄せられた理由と自身の奥側に潜んでいた「孤独感」との関連性を示した。それは、C によれば、「癒やされたい」寂しさであり、ボランティア活動をする講演者の姿はそれに結び付いてくれた。さらに、筆者がこの気持ちが発生する次元について問うたところ、C は現実での表面上の交友関係は良好だと述べ、「孤独感」が発生するのは己の内側であり、その発生は小学校の時期からだと提示した。

この対話では C は自身のボランティア活動の参加動機を複数挙げたが、それらは最終的に昔から感じてきた「孤独感」に帰結した。そんな「孤独感」が C の実際のボランティア活動にどのような意味を与えたのかを描いたのは抜粋 C-2 の対話である。

【抜粋 C-2】

W：活動の際にどういった印象を持ったのか？

C：その時の印象は講演会で聞いた感動とは全然違う、ちょっとがっかりした部分もあった、というのは、一緒に値札を貼っていた NPO のスタッフさんが自分の親世代ぐらいの年齢方なんです、その人達と一緒に値札を貼っていたんですけども、なんか、中学生のみんなは「若いのにこういうのを手伝ってくれてありがとう」とか、「若いのによくこんなことするね」とか、全ての会話に必ず「若いのに」がつくなんです。

- (僕はこれに対して) すごく隔たりを感じて。僕はそのボランティアに参加したことによって、寂しさが癒えるどころか、より人はわかり合えないなという孤独感を覚えて帰ったのが覚えていますね。

- その組織の、そのメンバーの一員の感覚ではなかったです。

...

W：自分の活動そのものに関してはどう思ったのですか？

C：やっぱり自分が実際に値札をつけた商品が多分後々それが売られて、そのお金が僕の知らないカンボジアの誰かのためになっているのかもしれないというその実感はものすごく感じていましたね、値札をつけていて、すごくそれは手応えがありましたね

W：目の前に実物があるから、想像しやすいのですね

C：しやすいですね、それは嬉しかったんですね。自分が値札をつけたものが実際店頭に並べているとか考えると。

W：この感覚がそれ以降の意識か行動にもたらされた影響はあるのですか？

C：ずっと僕はカンボジアのことが忘れられなかったのですね、行ったこともない土地なのに、その講演会のことはもうずっと忘れられなくて、で、常に頭のなかでは、僕が気がついていないどこで、誰かが苦しんでいるかもしれないという気持ちが常にありましたね。
- なんで寂しいのは自分だけとは全く思わず、きっと世界には今僕が感じている寂しさをわ

かり合えるような同じく寂しい人がどこかにいるんだろうなという気持ち、がずっとありました。

抜粋 C-2 では、C は値札貼りのボランティア活動に対する最初の感想を「がっかり」と答えた。その理由は活動の他のメンバーとの交流のなかで「若いのに」という言葉を浴び続け、メンバーの一員として受け入れてもらえなかったからである。ボランティアの体験は、C のなかでは、「孤独感」をかえて増すものとなった。しかし、これはあくまでも現場の活動者の関係から得た感覚で、実際活動を通して支援しようとするカンボジアの人々との間では、C は自身が値札を貼った商品という実物を通して繋がりを実感した。そして、それ以降 C の行動に対するこの実感の影響を筆者が問うたが、C はカンボジアの人の繋がりが自身のなかで生きていることを示しつつ、それが「カンボジア」という枠を超え、世界のどこかに存在する「同じく寂しい人」という概念として筆者に寄り添い続けたと答えた。

本小節では C のセンターに関わる以前の、人生の最初のボランティア活動の参加動機と感想について抜粋 C-1 と抜粋 C-2 を中心に説明した。この過程を C の視点から読み解く場合、値札貼りのボランティア活動は C が自分の持つ「孤独感」に対処するための試みの一環だと意味づけられる。C は小学校の時期から「孤独感」を持つようになった。この「孤独感」は C の内側に潜んでおり、当時では現実の友達との付き合いで解消できるものではなかった。そこで C ははじめてボランティア活動の講演を聴き、苦しんでいるカンボジアの人々を「孤独感」で悩んでいる自身と重なり、ボランティア活動から自身が求めている繋がりの可能性を見え、活動参加に踏み切ったのである。この時点では、C の中における活動の意味は「人助けであり、『孤独感』に浸る自身を変える行為」だと考えられる。そのため、C が活動参加した要因を VFI モデルで解釈する場合では主に「価値機能」と「保護機能」が見られる。

しかし、実際の活動では C は予想していたのと全く異なる経験をした。なかでも印象的だったのはボランティア側から繋がりを感じられず、「孤独感」を返って募らせたことである。この時点では、C の活動に対する意味づけが変容し、「『孤独感』を増す」体験となり、ネガティブな側面がより強調された。一方では、C は活動で自分が作った商品を通して被支援者との繋がりを感じ、そこから「孤独感」を想像上の存在である「苦しんでいる人」と共有できるようになった。この経験では、C は「共在者」である他のボランティアよりも「同時代者」であるカンボジアの人達との繋がりを感じているが、このことは、「共在者」であっても、交流の有効性によって身体の前が返って相互理解の妨げとなるのを示している。そして、これが活動動機に直結した時、活動の継続にも影響をもたらすと考えられる。実際、C によれば、「ボランティア」というものの自体にはポジティブな感覚を持つようになったものの、値札貼りのボランティア活動に参加したのはこの 1 回きりで、活動が継続することはなかった。

4.3.3 Cがセンター活動へ参加する理由

Cが再びボランティアとして活動し始めたのは20歳の時で、その際に参加した組織がまさに現在のセンターだった。この活動に参加する一年前に、Cは大学での大切な友人を自殺で亡くしたという人生における1つの大きな経験をした。Cによれば、その友人とはお互いの家庭環境の大変さで共感し、それからよく話をしていたという。このことはCがセンターに繋がるきっかけとなったが、Cが語りのなかでそこからセンターの活動参加に至るまでの経緯を整理したのが次の「抜粋C-3」、「抜粋C-4」の会話である。

【抜粋C-3】

C：…振りかえてみれば、亡くなるちょうど1ヶ月前ぐらいに、その人は交際相手と別れるんです、で、そのことがすごくさみしいと言いつつも、分かれて良かったって言っていたのです。今振りかえたら、やっぱり寂しかったなっていう気はしますね。

-で、その子がなくなる三日前かな、僕が最後にあった日なんですけど。…いつもは二人は岐路は違うのでバイバイする筈なんですけど、その子が僕の帰り道の方に結構付いてきたんですよ、あれなんでかなとは思ったんです、用事があるかなと思ったんです、特にそれについては触れずに、で最終的に僕が電車に乗るって所で、「じゃ僕電車乗るから、バイバイ」ってバイバイしたのが最後でしたね。

-もしかしたらちょっと寂しかった、僕と話したかったのかもしれないですね。

W：当時はショックを受けたのですか？

C：ものすごくショックでしたし、ただ不思議なもので、その子に会えないという悲しみと同時に、何かその子がなくなったことが自然なことのような気がして、人ってやっぱ生きるのがすごく大変なことだから、自殺してもおかしくないよなという考え方があったんですよ。当時の僕には。で、なんか、その子が死んだということに関しても、会えないショックとは別に何か納得感がありました。

-そこから僕はものすごく塞ぎ込むようになって、何で塞ぎ込んだかという、人って何で生きるんだろうっていう僕の中の謎がより深まってしまったというか。昔ずっとあったんですよ。なぜ人って生きないといけないだろうという、生きる意味ってなんなんだろうっていう気持ちがずっとあって、その子が自殺したことによって、ますます生きる意味が分からなくなったんです。

【抜粋C-4】

C：あるときに、元々尼さんから作家さんに転身した方の講演会があって…その著名な方に僕思い切って「生きる意味が分かりませんと、何であなたは生きているんですか」と聞いたのですよ

-その人が答えてくれたのが、結構、言い方悪いですけど月並みというか、「生まれたからにはやっぱり人は生かされているから、自分の意志で生きるとかではなく、生かされるまま生きる」みたいな感じだったんです。その答えを聞いた時に僕は全然ピンと来なくて、

その帰り道に、そうかと、こんな偉いこの人ですら、生きる意味ってなんですかって聞かれて、僕がはっとするような答えが言えないんだと、ってことは、誰にとっても、生きることは謎めいたことなんだっていう確信を、その時得たんです。で、それから、ずっと一人で生きる意味を考える状態からシフトして思いっきりなぜかを問うじゃなくて、色々な人に関わっていて、まず生きようと、まず生きなければという状態になっていて、前向きになったのですよ、その矢先、たまたまこのセンターの活動を紹介するコラムを読んで、それで、世の中にはこんな活動があるんだと、今自殺したいと思っているほど苦しんでいる人だったら、僕はわかり合えるなんじゃないかなという気持ちになって、もっと言うと、シンプルにそういう人達とお話がしたいという気持ちになったんですよ。それで応募しましたね。

W：落ち込み続けてそこに辿り着いた訳ではなくて、落ち込んで、でも自分のなかである程度答えを得て、行動をしようとした矢先にセンターの活動に出会ったのですね。

C：本当にすごく偶然で、センターのコラムを読む何日前に、偶然に手に取ったサルトルの哲学書から「実存は本質に先立つ」の言葉が飛び込んできて。（それを読んで僕は）あ、そうだ。まず自分が生きた存在というのをしっかりとやってみないことには何も分かることなんてないだな、と思った先にそのコラムを見たので、なんか気持ちが前のめりでしたね。

講演会、サルトルの本に出会わなかったら、その気にはなれなかったと思うので、縁に突き動かされていた気がしますね。

抜粋 C-3 では、C は友人を失う前後の体験を振り返った。C は振り返りのなかで、友人が自殺する前に交際相手と別れたことや C に頼ろうとする出来事を話し、そこから友人が「寂しかった」という結論を出した。筆者は社会的通念で当時の C が受けたショックを問うたが、これに対し C は肯定しつつも、ショックとは別に友人の自殺に「納得感」を覚えたと言った。その後、C は当時の自身の状態を「塞ぎ込んだ」と表現し、その理由として「生きる意味」への自身の疑問が友人の死によって顕在化されたことを挙げた。

抜粋 C-4 の内容は、上記の抜粋 C-3 から C が「塞ぎ込んだ」状態から脱却し、センターの活動に参加するまでの体験の振り返りである。C は「生きる意味」を見つける試みの 1 つとしてある元宗教者の講演を聴き、その方に己の疑問をぶつけたが、その人の答えには納得できなかった。しかし、C はこの体験自体を通して悩むのは誰にとっても同じだと確信し、悩みから行動に移るきっかけを得た。その直後に C が出会ったのがセンターの活動であり、その活動内容から相談者であれば自身と分かり合えるではと期待し活動に応募した。

本小節では C がセンターの活動参加に至るまでの体験が語られた。ここで筆者が目にするのは、やはりこれらの体験に対する C の意味づけである。まず、C は自殺に至るまでの友人の動きを振り返る過程で、「寂しい」という言葉を繰り返して用いた。これは友人から直接伝えられた言葉ではなかったが、C は自身と多方面で共感する友人の体験に己を投

影してこの言葉に到達したと考えられる。ここには、恐らく C 自身が幼少期から感じた「孤独感」も映されていた。C はこの言葉から友人と苦しみを共有し、その死に「納得感」を感じたが、それは同時に、C が自身の内側に抱えてきた「生きる意味」への疑問を顕在化させる気持ちに繋がった。その後、C は作家の言葉から「悩んでいるのは自身ではない」という確信を得て、似たような人と分かり合うために偶然見かけたセンターの活動に参加した。この C の状態の転向は一見突然とも思えるが、筆者にはこの「誰にとっても」や「苦しんでいる人だったら」という表現から値札貼りのボランティア活動を通してカンボジアの人々との繋がりを感じた中学生の C の影が見えた。したがって、C のセンターでの活動の参加動機では、「社会機能」と「保護機能」が主に働いたと考えられる。そして、こうした一連体験からは幼少期からの「孤独感」によって誰かを通じ合いたいという C 個人の「人生のストーリー」が窺えた。

4.3.4 はじめての活動の感想

ボランティア活動における好ましい経験はその後の活動の継続に大きな影響を与えている（高木・玉木,1996）。この好ましい経験の中には、活動組織に対する第一印象も含まれていることは想像に難しくない。センターでは、前節で述べたように講座を受ける段階と電話相談に応じる段階でそれぞれ初めての活動体験が存在し、それぞれが他のメンバーと被支援者との関わる最初の体験になる。C はこの 2 つの初めての活動経験を通して継続的な活動に踏み切ったのだが、その理由を語った対話が抜粋 C-5、抜粋 C-6 である。

【抜粋 C-5】

W：活動に参加するに際して、当時もやっぱり講座から始まったのですか。

C：最初に、講師の先生がここは死にたい気持ちを否定する所ではありませんって言うたんですよ、死にたい気持ちを死にたいというまま受け止める活動なんですって言って。僕はびっくりしましたね、率直に。衝撃を受けたのと同時に、ものすごく、変な表現ですけど、受け入れられた気がしましたね。自分のこれまで抱えていた寂しさとか、あるいは人って生きるの大変だから自殺してもおかしくないよなという考え方とかそういったものを全部受け止められた気が、なぜかしたんです。

W：死にたい気持ちでさえ受け入れようとしている方達を見て、自分の悩みももしかしたらっという気持ちですか

C：まさにそうだった。その時の感動がやっぱり忘れられないですね。

-当時はもう必死というか、何かしておかないと耐えられないぐらいの焦燥感というか気持ちがあったので、何かに突き動かされたような気持ちで飛び込んでいたんですけど、今振り返ってみたら、自分探しという側面も大いにあったと思います。

W：当時の感情を単純的に言うと、「何かしたい」と？

C：言うってしまえば、なぜ生きるかを早く掴みたい。その気持ち一心でしたね。生きる意味を見つけたかったんですよ、とにかく。

W：自分が存在していいという気持ちを確認するために
まさにそう。

C：それはやはりご友人のことがきっかけだったんですか？

（友人の死）を深く悩んだのはきっかけですけど、この気持ちはもともとあったもので。小学生の頃から、誰にも理解されない、誰にも分かってもらえていないという寂しさと同時に、なんかその寂しい世界でなぜ僕は生きないといけないんだろう、という気持ちがずっとありましたね。

抜粋 C-5 では、C はセンターの研修講座に初めて参加した際の体験を語った。C はまず講座の講師の先生の話引用し、それを受けて自身が「受け入れられた」気持ちになったという。そして、C はこの気持ちになった過程を振り返り、そこには「自分探し」の側面もあったと解釈する。筆者は当時の C の感情が気になり、さらに追求して見たが、C はこれに対し「生きる意味を見つけない」と改めて当時の自身の状態をまとめた。C の答えを受け、筆者はそれと活動参加に至ったきっかけである友人の自死との関係性を問うた。しかし、C はこの二者の間を肯定しつつも、主因はあくまでも幼少期から自身の内に秘めた「寂しさ」であると主張した。

抜粋 C-5 は C がセンターとの接触で帰属感を見つけた流れに関する話である。抜粋 C-3 で言及されたように、C は自死という行為に対して、一般の社会通念であるネガティブなイメージよりもどこか納得する気持ちがあるが、C はこうした自分の考えの正当性について悩み続けていた。しかし、いざセンターの講座に参加すると、この気持ちと悩みは講師の一言ですんなり認められ、C は「受け入れられた」と感じた。そして、「受け入れられ」感 C に己の存在の正当性を与えつつ、センターへの帰属感も芽生えさせ、C の「自分探し」の一部の成果となる。この流れのなかで、C はセンターでの活動を自身が抱えてきた「孤独感」と結びづけ、新たな意味づけを行ったと考えられるが、この結び付けはそれ以降の C の活動でさらに明確となる。

【抜粋 C-6】

W：その体験を通して、活動自体に対する感想はあったのですか？

C：まず、このセンターに来て僕が一番びっくりしたことが私のような若い年齢の人がいないんですよ。みんな年配の、僕からしたらお爺ちゃんお婆ちゃんみたいの人ばかりだったんです、なのに、私を 1 人の若者として接せずに、本当対等に関わってくださったんですね。中学生の時に(参加したボランティア活動と)比べればね、あの時に感じた構成メンバーに入れていない気持ちが全然なく、自分はこの人達に受け入れられているっていう気持ちがすごくあったんですよ。なので、電話でも誰かと繋がれるという気持ちがありましたし、振り返りとかで、センターに行った時に、先輩方にも自分は受け入れられているという気持ちがあったので、なんかすごくそのそうですね、自分はそこのメンバーなんだという気持ちが強かったです。なので活動に積極的に参加していきたいという気持ちを

持てましたね。

W：丸ごと受け入れてくれる環境が心地よさにも繋がりますね。やっぱ自分の居場所として段々ご自身のなかで位置付けするようになったのですか。

C：当時は圧倒的にセンター以外の活動の時間の方が長いので、センターでの時間は僕のなかでは特別というか特殊な時間でしたね。日常のコミュニケーションとはまた違った時間というか、違った人間関係があって、週に一回、僕はその特別な時間を味わいに行くという感覚でしたね。

W：ボランティアと言いつつ、ご自身の中にも何かを求めたくて現場に通っていたのですね

C：まさにそうでした。

抜粋 C-6 は筆者が初めての電話相談活動後の感想について問うた流れでの語りである。この問いを受けて、C はまず電話相談そのものについてではなく、センターの活動に加わった時の感想について触れ、「一番びっくりした」のは年齢が相当離れているにも拘わらず、他のボランティアが「私を 1 人の若者として接せずに、本当対等に関わってくださった」ことを語る。これには、抜粋 C-2 で語った他のボランティアから学生として接されたことで C の中に刻まれた「構成メンバーに入れていない気持ち」と対照的な体験として、大きな影響を及ぼした。続いて、C はセンターでの活動経験の感想を改めて「この人達に受け入れられているっていう気持ち」だと語る。ここでようやく、筆者が問うた電話相談の話になり、C は「誰かと繋がれるという気持ちがありました」と述べたが、この語りでは電話相談は特別な一環ではなく、振り返りなどセンターでの他の活動と並列しているように位置づけられる。そして、C は再度自分が「メンバー」としてセンターに「受け入れ」られた気持ちを強調し、それが活動での積極性に繋がったと述べる。これに対し、筆者は C の意識のなかでのセンターが「自分の居場所」としてどこ位置づけられるかを想像し、確認の問いを投げる。これを受けて、C は肯定も否定もせずに、ただセンターで過ごす時間は「特殊な時間」だと答える。最後に、C は「自身も何かを求めている」という筆者の問いに肯定した。

この会話では一見すると C は筆者の問いに対してあらぬ方向から答えを出しているように見えるが、電話相談であれ、他のボランティアとの関係性であれ、これらの行動から C が感じ続けてきたのは他者を「受け入れ」る、他者と繋がる気持ちだった。抜粋 C-2、抜粋 C-3 でも触れたように、C はそれまでの人生において終始ある種の「孤独」を抱えていると薄々自覚していた。そのため、この会話では、C はむしろセンターでの活動経験から語り始めることによって自身の気持ちの整理しながら、電話相談活動を他の活動と並列させ、これらの活動の奥に隠れている「受け入れ」てもらいたいという人生におけるテーマを強調しようとした。そして、それを叶えた環境としてセンターが C のなかで位置づけられ、C が活動を継続する大きな要因の 1 つとなった。言い換えると、C にとってセンターでの活動は己の帰属感を求める生活世界における重要な一部として意味づけられ、電話相

談も、相手が電話越しの相談者とはいえ、そのセンターでの活動の一部として C が繋がりを求める行動として意味づけられたと考えられる。

4.3.5 活動の長期化に繋がる出来事

電話相談活動の長期化につれて、ボランティアは様々な状況に遭遇する。特に衝撃的な体験はボランティアの活動に対するイメージを変える。C はセンターの活動に継続的に加わる過程でそれを自身の「孤独感」と結び付き、活動の継続に意味を付与したが、こうした意味づけが印象的な活動経験でいかなる変化を起こしたのか。下記の抜粋 C-7、抜粋 C-8 の会話の内容はそれぞれ相談者、メンバー間との繋がりのなかで C が最も印象的で、自身に最も影響を与えたと感じた出来事である。

【抜粋 C-7】

W：ここまでの活動で一番印象を与え、影響をもたらしてきた経験はありますか。

C：忘れられない電話がありました。ざっくり言うとその方はものすごい長い時間喋ったんですよ。五時間…「今から死ぬので、最後に電話した訳ですと、最後なんだから、この電話機の充電が切れるまでお話をさせてくださいよ」最後なんだしと…最後はもう本当に充電のアラームが鳴って、で、さようならって言って電話切れたんですけど。言葉通り充電が切れるまで喋ったんです。で、その人五時間喋ってて、その方の色んな人生の、本当生い立ち、どんなものがあり、どんな苦しさがあるのを全部話してくれて、こんな人生があるやなって聞きながら最後にその方が「ここまで私の人生を知ってくれた人に、電話を置いた後の私のことを、これはもう一方的な願望なのだと、覚えていて欲しいと思うんだ」と言われたんです。…「なので、今から言う言葉を忘れないで欲しい」と言われて、その人のお名前の漢字一文字を僕に伝えてくれたんですね。僕も「それを僕はずっと忘れずにいるよ」と、それを胸に秘めながら生き続けると思うと伝えたのです。その方が、「世界で 1 人でも自分が確かにいたと言う存在をだれか胸に残してくれていると思ったら、私はもうすごくなんだか、幸せな気持ちなんだ」って言うてくれて。それで電話が終わったんです。

-その時僕が思ったのは、ただ電話を聞いて、その時間内だけ繋がって、電話を置くこれまでも、明らかに違う何かを感じたんです。本当にその人の人生の、大事な大事なワンピースを僕は授けてもらった気持ちがして、なんかこれまでにない気持ちを感じたんですよ。それが僕にとっての忘れられない電話でしたね。その人に授けてもらった一欠片は電話を置いてもお、ずっと私の中にあるんですよ、なんか、ただボランティアの限定的な時間を過ごしている感覚から、あっこれは紛れもなく僕の人生そのものにも影響している時間だっていうそんな実感があったんです。何か人生の中の限定の時間にボランティアがあるのではなく、その瞬間、本当にこの人生のなかで、僕はこの活動を通してものすごく影響を受けているというなんか人生そのものにもものすごく、センターの活動がぐっと入ってきたという感じがしたんですよね。

W：その方の存在を受け入れるとともに活動がご自身の人生の一部になったという感じに聞こえますね

C：その漢字一文字を渡すって言われた時に、それを受け取ったことによって。ただただボランティアと思っていた出来事が、いやこれは違う、これは自分の人生の中の時間なんだ。ボランティアに関する見方がガラッと変容した瞬間でした。

W：この電話によって、C さん本人の軸というものにセンターの活動が入ってきた感じですね

C：ある意味そうだったんですね。相談電話を取ることが分断されることはなくて、自分の本流だと思ったんです

W：相手と時間と経験を共有することで得られた感覚なんですね。

C：このボランティアをやめたら「お終い」ではなく、もう、そうですね、それがずっと僕の中に生き続けるものだったら、このボランティアは非日常ではなく、むしろ日常ではないかというそれぐらいの気持ちになったと思います。

抜粋 C-7 は筆者が C に最も印象的な活動経験を尋ねた際に発生した会話である。質問を受けた C の回答は迅速且つ詳しいものだった。C が取り上げたのは長時間話した辞しする存前の方との電話である。本来長時間の電話相談は避けるべきだが、C はその相談者の「最後」という話に反応し、願いを聞き入れた。その結果、相談者は 5 時間をかけて己の人生のありとあらゆる部分を C に語り、その最後に己が存在した証として名前の一文字を C に託した。この電話を経て、C の電話相談活動で過ごす時間に対する感覚は「限定的な時間」から「人生そのもの」に影響を与える時間に変化した。C はこの変化を人生そのものに「活動がぐっと入ってきた」と形容する。筆者は、その変化は相談者の存在を名前とともに受け入れた行為によって触発されたと考え、それを確認すると、C はこれを肯定し、さらにこれが己の「ボランティアに関する見方」が変容する瞬間だと強調した。

この抜粋で語られた電話対応は間違いなく C に大きな影響を与えたといえる。これまでの諸小節の C にとって、電話相談は主に己の「孤独感」への対応として意味づけられ、C の人生に結び付かれた。しかし、抜粋 C-8 の相談者から相手の名前を受け入れ、相手が存在した証明者になった瞬間、C の人生の流れにはその相談者の生が刻まれ、電話相談活動をする時間もこれと同時に C の中の「非日常」から「日常」へと転換し、「人生の中の時間」という新たな意味づけを獲得した。言い換えれば、この電話を経て、センターでの活動はこの相談者の一欠片とともに C の記憶のなかで深く刻まれ、絶えずに流れていく「体験」から常に「意味」が付与される時間となり、C の「内的時間」の一部となったと考えられる。

【抜粋 C-8】

C：やはり人間関係に難しいと感じた時期もありましたね。

-僕が運営の立場になって、この団体の色んな役割を与えられるポジションになった時に、

やっぱり人間って不思議なもので、どの組織においても権力争いがあるんですね。その権力争いにすごく失望したし、がっかりしたし、傷つけもしましたね。

W：そこじゃないっていう気持ちでしたね。

C：そうです。ボランティアなのに何で？みたいな。

-みんな口ではセンターのためっていうんですけど、その行動の背景には自分のエゴとか思い通りに動いて欲しいという気持ちが見えたので、なおさらしつぼうしましたね。

…僕はやっぱりそれが許せないので、徹底的に戦ったんですよ。その争う勢力と、傷つきながらもこの団体の切り盛りをしていたのですね。

-そのなかで僕はそこで新たに出会ってくる人達、一緒に僕の思いに共感してくれて、やっていこうという仲間に出会ったときに、僕はものすごくこの人達とありたいと思ったのですよ。…それがあったから、今もなお、僕は前向きにこの活動が続けたいという気持ちなんですね。

W：運営になってからは一層メンバー同士の繋がりを意識するようになったのですね。

C：繋がりは意識していますね。特にこのセンターの活動は、僕は人と人との出会いだと思っているのですね。…なので、ここで過ごす時間というのが皆さんにとって私が今ここにいて、幸せだと、そう感じれるような時間にして欲しいと僕は今この環境を作っていると思いますね。…

-今出会っている人には、僕は自分のセンシティブな部分を打ち上げたいと思っているのですね、そう思っていることが僕のなかでの大きな変容ですね。実際に理解してもらえかよりも打ち上げたい気持ちになれるかどうかが大事ですね。(言い換えれば)、時間とともに、自分自身が人を信頼すると言う力を身に付けてきたという事。

抜粋 C-8 は C がセンターのメンバーとの繋がりと活動の継続との関係について語った会話である。C はまずセンターの中にも権力争いが起きたことを提示し、それによって己が「失望」し、「傷つけた」ことを述べた。その際に、C が選んだのは権力争いを行うメンバーに「徹底的戦う」ことだった。その過程では、C は自身の「思いに共感してくれる」メンバーと出会い、その人達から「活動が続けたい」気持ちを獲得した。そこから、C は団体の運営層として繋がりを意識し、メンバー同士でそれができる環境づくりを目指した。そして、C はこの過程で他者との交流のなかで相手が「受け入れてくれる」のではなく、自ら「打ち上げたい」相手であることに視線を向けるようになったという己の変容を自覚した。

センターの他のメンバーとの良好な関係性も C が長時間の活動を継続してきた理由の一つである。C はセンターの運営になった途端にトラブルに巻き込まれたのだが、それを乗り越えようとする際に共感してくれる「仲間」によって支えられる。これにより、C にとってのセンターの活動には「仲間」との時間という意味づけが深くなったと考えられる。また、トラブルの際に C は対処法として「徹底的戦う」ことを選んだが、これは言い換えれば、センターの活動は C にとって戦ってまで守るべきだという意味づけがなされている

のである。活動を守る側に立ったことで、C のなかでは人間関係に対して、受動的に処理するから主体的に求めるという見方の変容が生じた。この現象は、己の能力の向上により長期活動の継続が可能となったとして解釈できる。

4.4 D のライフストーリー

本節では、センターでの活動歴が長く、それが己の職業にも関連づけられる D のライフストーリーのデータを整理し、現象学的アプローチを通して活動に対する D の意味づけを分析する。

4.4.1 D の語りの流れ

D がセンターのボランティア活動に参加したのは 12 年前だった。その活動参加のきっかけは家族の自死である。活動に参加した当時の D は 20 代後半で、一般の会社員として働いていたが、近年は公認心理師の資格を習得し、心理カウンセラーとして学校、病院など様々な場所で活躍しながらセンターの副理事長として他のボランティアの相談役を担っている。また、主要の講師ではにものの、D も C と同様にセンターで毎年複数回行われるビフレンダーズ育成講座と継続研修講座の企画、実施に力を注いでいる。

客観的な視点で見れば、D は自らの仕事のスケジュールが忙しいにも拘わらず、センターの活動にずっと熱心に関わってきた。上述した講座では、D は予定の都合上時間通りに参加できなくても、途中参加の形で自分の配役のない回にまで積極的に関わっている。衝撃的な出来事によってセンターでの活動を始めた D だが、筆者がインタビューを通して感じた語りの中心はセンターへの「帰属感」である。本節では、D の語りを時間軸に基づいてセンターに接触するきっかけ、初回の活動に対する印象と長期的な活動における葛藤と支えという三つの部分に分かれ、それぞれの部分における D の語りの中のセンターの活動の意味を探究する。

4.4.2 D がセンターの活動に参加するきっかけ

D は学生時代に「ボランティア」という概念に多少触れたが、正式的にどこかの組織とボランティア活動する体験はなかった。そのため、センターでの活動は D にとっての人生の初めてのボランティア活動である。自身を元々の生活から距離のあるボランティア活動に結び付いたのは姉の自死と D は語るが、その過程には様々な葛藤が満ちており、その中には D が本来持っている個人的な関心も関わっていた。次の抜粋 D-1、D-2 がその具体的な内容を示した会話である。

【抜粋 D-1】

W：当時はなぜセンターの活動への参加を決めたのでしょうか。

D：きっかけというのは兄弟が…私は三人兄弟の真ん中の方で、2 歳上の姉と 2 歳下の弟がいるので、私は長男ね。その二歳上の長女が、今年で、次の 10 月で 14 年前ですね、を自

死で亡くして。亡くしてから心の病というか、心の痛みだけが残されて。私自身は心のカウンセリングに興味があったんですよ、本を読んだり。姉の死に逢ったあとに、どうにかして姉の死、姉が生きたという事を自分の中に記憶したり、忘れたくないと思った。

亡くなった一週間か二週間ぐらいからかな、民間の心理カウンセラー養成学校に通い出したのは。社会人生活を送りながら心の学びを目指していた。

その学校には大体一年半ぐらいいたのかな…自殺というテーマがなかなか扱われなくて、私は教えてほしいと直談判したけど、「そういう自殺願望とか希死念慮については、危険だから、授業にすることができない」って言われた。その方はプロの心理カウンセラーもメディアにも出ているような先生でした。

-(そこで私は)「自殺」という死を選んだ姉の選択が否定されたような気持ちがあった。やっぱり自殺とか希死念慮というのをもっと知りたいというなかで、インターネットでとかいろいろを駆使して調べた時に出会ったのがこのセンターだった。

W：いろいろ探しているなかでセンターに引っかかったのですか。

D：とにかくその名前。生々しい「自殺」という、社会問題だと認識されながらも中々振り向いてもらえないという言葉そのまま団体名に入れ、そのまま受けているというのがすごく私のなかで響いていて、ここなら私が求めるものが学べるという思いに至ったかな。

-姉の死に様であったり、生き様であったりが自分のなかで躓いたが、(センターと接触することで)変わるではないかなという気がした。

W：必死に何かを探し求めている状態のなかでの出会いだったのですね。

D：やっぱり兄弟を亡くした時の… 傷ついている部分があったんだなって思う。そういうなかで、とにかく自分のできることをもがきながら探しているような。感じでしょうね

抜粋 D-1 は D がセンターと出会いまでの経歴を振り返った語りである。ここではまず、D は姉の自死を全ての前提として取り上げた。突然姉を亡くした D は「心の痛み」を味わいつつも、その死を強く受け止めようと自身にできることを探した。その際の試みとして、D は民間の心理カウンセラー養成学校に通い、元々興味のある心理的支援の勉強を始めた。しかし、勉強する動機があくまでも姉の自死である D にとって、自殺のテーマを敬遠しているその学校は「姉の選択が否定された」気持ちにさせる場所で、自身に向かない場所だった。D は再び自殺関連の知識に触れられる場所を求めたが、その際に「自殺」という二文字を団体名にそのまま使っているセンターに出会い、「ここなら」という気持ちとともにセンターに連絡することを決めた。

【抜粋 D-2】

W：(心理学に)元々関心はあったのですね。

D：特に幼少期だったり、学生時代。誰もがそういう元々の興味がとか、そこに根源的な源流があったというようなことはなかったですか？ 私ちょうどやっぱりそういう心のつながりとか、そういうのに興味があったんやと思いますね。情緒のつながりだったり。私は

スポーツ、武道競技を続けてきたので、やっぱりそういう競技を追い求めるっていうのも非常に感情とか心のつながりの部分があると思う。自分の心と向き合うっていう作業は、やっぱり自分のなかで振り返ると小さな頃からやってきたんじゃないかなと。誰もがそうかもしれないけどね。

W：では元々やっぱりそういう(動機があったのですね)

D：その時やってた仕事が天職とは思えなかったっていうのもあるし、自分の生き方を探してた時期でもあったので。なんかこう、そういったいろんなタイミングが重なって。自分の人生の分け目っていう、そういう学びを深めたいなと思った。

抜粋 D-2 は抜粋 D-1 に対する補足で、D が姉の自死を受けてなぜ自身が心の繋がりに関わろうとしたのかを説明した対話である。D は自分の学生時代まで遡り、スポーツの経験から自分には元々「心のつながり」、「情緒のつながり」に対する関心があったことを確認した。また、そのために姉が亡くなった際に自分はちょうど仕事に合わなくなり、「生き方を探していた」時期だと、自身が大きく変化する前提を示した。

姉の自死は間違いなく D がセンターの活動に参加する最大のきっかけであり、D の人生の方向を大きく転向させた衝撃的な出来事である。D は姉の死後、その自死を受け止めようとしたのだが、当時の D にとって、これには心理的カウンセラーに関する知識が必要なほど難しいことだった。言い換えれば、当時の D にとって、姉の自死は受け止めるのに重すぎる事実で、それを受け止める D 自身を受け止めてくれる何かを D は求めている。これに対し、D が最初に通った学校では「自殺」を忌避する態度を見せるが、一方でセンターはそもそも名前の中に「自殺」をそのまま入れていた。この比較から、センターという存在は D のなかで自分が「求めるものが学べる」場所だと定義づけられた。

4.4.3 センターでの最初の経験

ネットの資料を通してセンターに積極的な印象を持ったとはいえ、「求めるものが学べる」場所はあくまでも実践の経験がない D が勝手に付与した意味であり、センターに対する D の態度も関心を持っている程度のものだった。実際、D によれば、自身がセンターの活動に関わり続けようという気持ちを確立したのは養成講座を受けている最中のことだった。これは、D にとって、センターでの最初の活動経験には大きな意味があるとも言えよう。その経験についての会話は下記の抜粋 D-3、D-4 に示されている。

【抜粋 D-3】

W：それで、えっと、(センターに)電話をかけて、問い合わせして、それでこう、講座に参加するっていうのですよね。それこそさっき、講座を受けている最中に、あ、ここだっていうか、これから、ここで活動していきましようというような、たぶん意識を形成したとおっしゃっていたんですけど。その原因をご紹介しますか？

D：やっぱり、姉が亡くなった辛さというのは、私自身が感じていたの。そういう自殺

を選択する人を、選択する人が少なくなればいいなという思いはあったんです、確か。

-でも、果たして自殺はそこまで止めるべき行動というのか、なんで自分は止めたんだろうっていう変な気持ちというのがあったんですよね。

-思ったんですよ。これは残された人とかからしたら自殺って使わない方がいいんだけど、本当に悩み苦しむ人たち、生きていることが地獄というぐらいに苦しい人を無理やり他の人が止めるということに、どれだけの意味があるんだと。そういうふうを感じる自分もあったんです。まあ、そういう葛藤のなかで学びを深めていくなかで、いろんなこう団体とかメディアとかは、やっぱり自殺を止めるということばかり、前面に打ち出して。止める方が偉い。自殺少ない方がいいんだとか、なんかこう、うーん、一方的な... 考えが多かったように思うんだけどね。

-「この講座に参加して思ったのは、自殺の数を減らしたり、自殺したいと願っている人を無理やり止めるだけが、ここの団体のやり方ではなくて。感情の支援というのは、生きたいって思うのも死にたいって思うのも、あらゆる感情でさえも認めながら受け止めながら、一緒に悩んだり考えたり、支え合いながら歩みをともにしていく。」これがこの団体の考えなんですという教えをもらってね。その言葉にものすごく救われたんだ、僕は自分の感覚が。あ、自殺ってやっぱり無理やり止めなくていいんだ。自殺って社会としたら悪と捉えられてるのかもしれないけど、自分のなかでは悪と捉えきれないものがあったので。自分の気持ちってあっても良かったのかなっていう...感情の支援というね。感情にいい悪いのはジャッジしない...今日一日でも、この瞬間だけでもともにあるっていうことが、やっぱり何より尊いものなんだな、というふうに感じましたね。

抜粋 D-3 は、養成講座で自分の気持ちが活動したい方向に固めた瞬間についての D の語りである。筆者は D が直前の会話で気持ちが変わった話を聞き、その詳細を問うたが、これに対し D はまず自身が講座に参加した当時の気持ちを整理し、姉のような選択をする人を減らしたい一方、その行動の正当性に苦悩する自己像を描いた。そんな状態の D は、講座でセンターの講師が発した自殺したい人の感情を認め、受け止めながらともに歩む言葉に感動し、それに「救われた」。さらに D は当時の感想として、自殺をどうしても「悪と捉えきれない」自分の気持ちが認められ、相手とともにあることの尊さを自分は学んだと語る。

【抜粋 D-4】

W：実際に講座を受けて実習に入られて、電話を取るわけじゃないですか。初めて電話を取った時の印象というか、取った際の感想だったりはあるでしょうか。

D：ちょっと、そうですね。ひどく怒られたことはよく覚えてますね。

W：あ、初日で？

D：初日はね、割と、多分、あれね、二回目やからかな。初日は、そこまで、意外と苦労することなかった。

-まずね、当番に入るっていうこと自体が、僕なかでは勇気のいることで。今、死にたい人って、電話をこっちで受ける、受け止めに行くっていうこと自体が、僕のなかでやっぱり大きなチャレンジ。そういったなかで、よくできたなとか、よく挑戦できたなと自分が思えたような、その気持ちで帰ったなど。とにかくまあ、ここに来て電話を取ろうとした自分がここまで来れたな、と思ったのが…やっぱりこう、悩める人とリアルに心の関わりをできる。悩みを受け止めるっていう体験とか、僕のなかで非常に大きな存在となった。

抜粋 D-4 は筆者が電話相談での最初の経験について問うた後の会話だが、ここで D は最初に相談者に怒られた経験を想起するが、しかしそれは初回の出来事ではなかった。続いて D は初回の電話相談を再び振り返り、そこ行為には「勇気」がいるという考えを述べたあと、初日の相談活動後にそれを「よくできた」自身の成長に対する満足感について語りつつ、自身にとってのその体験の重要性を強調した。

D にとって、センターの養成講座を受けることは、自身のセンターに求める「求めるものが学べる」というインターネットの情報から練り上げた理想像が現実化する体験となった。抜粋 D-1 で示したように、D はセンターに入るまで姉の自死を受け止めたものの、その受け止め方に常に悩まされていたことが分かる。D は姉の自死を事実として受け止めたものの、その行為にはやはり理解できない部分が残され、それが D の他の自殺願望者を減らしたい思いとして現れた。ここで、D のなかでは、身の上の経験から自殺を認める気持ちと社会通念によって生じる自殺を阻止したい気持ちが衝突し、葛藤となった。D は姉の自死をそのまま受け止めたが、多くの媒体からインプットされた、自殺を否定する認識がその妨げとなり、D は一人では抜け出せない状態に陥った。しかし、センターの講座では D は講師の言葉から自身の自死したい感情をそのまま受け止めた気持ち認められた。つまり、D にとって、センターはその時から葛藤から自分を救ってくれる、自分の気持ちを受け止めてくれる、自分が所属し、関わっていきたい現場として意味づけられたのである。

一方、初回の電話相談活動について、D は深い印象を持った具体的な経験こそないが、それを通して自身の成長を感じたことは重要だと意味づけている。この二つの抜粋を総合すると、D の活動参加には「価値機能」、「知識機能」と「保護機能」が働いていたと考えられる。

4.4.4 長期的活動における葛藤と支え

D は 12 年間センターの活動を継続してきたが、この間に D の生活の中には沢山な変化で起こった。特に D は自殺の電話相談活動に関わるなかで、元々のサラリーマンから心理カウンセラーへと職業が変わり、生活様式も大きく変わった。このように大きな変化が起こりやすい長期化の活動では、活動に伴う葛藤も様々な様態を呈すると考えられる。本小節では、D は抜粋 D-5 と抜粋 D-6 の会話で自身が経験した葛藤について触れ、抜粋 D-7 では自身が葛藤を乗り越え、センターの活動を継続する理由について振り返る。

【抜粋 D-5】

W：それで、こう、挫折や葛藤というか。これをやりにくいつていうような気持ちを（抱いた体験はあるでしょうか）。

D：それが二回目の当番に入った時にひどくこう怒りをぶつけられた経験がありますね。「相談に向いてない、やめた方がいいよ」と。

W：もしよければもうちょっと詳しくお話をうかがいたと思います。

D：結構長時間にわたる相談だったのは覚えていますけども、きっと2時間以上は聞いていると思うんですね。最初は穏やかな状況だったんだと思う。丁寧に聞いていたとは思いますが、やっぱり丁寧すぎて、こちらが、下手に出るというか。（サービス業の）お客さんと接する態度になりすぎたかなーと。今考えると。

W：姿勢が低すぎた？

D：うん。で、逆に目線を合わせないようにしていたというか。そうですね。実習に入って2回目とかですけどね。だからこそ、一方的に聞く。どんなこと言われてもこちらは受け止めなきゃいけないんだよという、そういう思いが自分の中に強かった。やっぱり自分のなかではイラッと覚えたことがあっても、それもなんとか耐えなきゃいけないという、そういう考え方が多分、しつこい程度にあったと思いますね。

…ここの、で、なんかこうしんどさが軽減できたのは、SV といって、スーパービジョンが自分のなかでは効果があったんだと思います。ひどく傷つき、耐えられないのであれば、こちらからタイミングを切り上げて切るっていう選択肢もいいというふうに、あの、その時(SV の人が)教えてくれた。向こう(のコーラー)のっていう権利があるし、こちらのっていう権利もあっていいんだよっていう…なんか、ほんとそうやなど。なんかこうビフrend という言葉に立ち返ったような感じが。なんかこれまではどちらかといったら、私はちゃんとこの団体に属している限りは、しっかりとどんなことも受け止めないといけないという、そういう使命感だったんだと思います…この団体の姿勢として、自分の心というものを大切にしながら、この団体の活動をするよという。団体の指針というのか、思い、それを自分のなかでちょっと解釈がずれていたかもしれないですね。解釈し直せたというのがあって…それを(当時の)私はやっぱり思いが強すぎて、自分を大切にするというもののみ持たずに、コーラーというものに、うん、熱く関わりに行ってしまった。だから、そのときに帰り道は、なんか、そんなことやっていいの？とか感じてました。

W：えっと、怒られた後の帰り道で？

D：そうです。すごくやはりすごく印象に残っていたわけですね。深夜帯によく入っていたんですね。10時から3時の間。ちょうど陽が昇ってきて薄く明るくなるぐらいに家にいるんですけど。なんか、ひどく疲れながらシャワーを浴びて寝る、という日々。この活動にね、やっぱり意義を感じないといかないっていう。それはその意義を持てるまで時間がかかったと思うんだよね。意義を、もともと、確かに探しながら、今も。探しながら活動に入って。そうすると、この葛藤自体に対して意義を感じたというか。自殺を無理やり

にでも止めたいと思って続けてきたというようなのは、いくらかといったらそれはおまけみたいなものだよね。結果的に(同じ人の電話が)来なくなればそれは嬉しい。というよりは数だけ減らしてそれで嬉しいのかなとか。これは(センターの)支援者の要望っていうのもあるんだろうけどね。数だけ減らすという。

抜粋 D-5 は、電話相談の対応での葛藤について筆者が伺った際に発生した対話である。D はこの質問を受けて、再び二回目の当番の際に怒りをぶつけられた体験を述べた。その電話では、D は長い時間をかけて相談者の話をずっと聞いていたが、その丁寧過ぎる態度がかえって相談者に親近感を感じにくくさせ、最終的に相手の不快感を買ったと D は反省する。筆者はその状態を「姿勢が低い」と表現したところ、D はこれを肯定し、当時の自分は相談者と「視線を合わせない」と評価した。このことを認識するようになった D は最終的に「しんどい」気持ちになったが、そこで D を助けたのがセンターのスーパーバイザー(バイザー)だった。さらに mD はバイザーに意見を求めたことについて触れ、そのバイザーの言葉を受けて自身の中のビフレンダーズに対する解釈が刷新され、その後の活動に繋がったと示した。しかし、その後、D は再び当時の相談を受けた自分の体験を振り返り、自分の認識のずれについて反省しつつ、センターで活動するには意義が必要であり、「この葛藤自体に」D は確かに意義を感じたことを語った。

人は失敗から学ぶという言葉があるが、その過程には一人ではどうしても対処できない場面もあり、その際には他人からの助力が必要となる。抜粋 D-3 で言及したように、D はセンターを「自分を受け止めてくれた」場所として定義づけた上で活動に参加する意志を固めた。だからこそ、いざ相談員側に回った場合、D は自分も相談者の全てをありのままに受け止めるべきだという使命感が強く持っていると考えられる。こうした考え方は実際の相談活動における D の対応での低過ぎる姿勢に繋がり、相談活動に支障をもたらした。D がこの状態から抜け出したのは、相談員をサポートするバイザーの言葉で「ビフренд」という言葉の本来の意味に気づき、自分の相談員としての立場を是正したからである。そして、このインタビューでの振り返りによって、D はこの葛藤に対して改めて意義を付与し、それを疲れる体験でありながら自身が相談員としての立場について活動を解釈し直すきっかけと語った。

【抜粋 D-6】

D：来るのが億劫になったところはありませんでしたね。現実的に、子育てと被っていたっていうのはあるし。収入が得られるわけでもないんでね。自分の仕事も忙しくなったり。そして、自分の生活態度のなかで金曜の深夜が入るっていうのが、まだ今は入れるときあったけど、土曜日の朝からやっぱり子供の習い事があるとか、色んなファミリー間のことを大事にしたいので、やっぱり土日、特に金曜の深夜に一、二時間セルフで自分が入るっていうことで、まあここが一番自分の計画のなかではリフレッシュなんですよ。
-やっぱりタフでしたよね。行って、やっぱり死というテーマをやりながら、土曜の午後に

迎えるというのは、非常にこう、ものすごく疲れが残っていたんですかね。

W：疲れが残るといえるのか、あの一、切り替えしにくいタイミングかな？

D：そうですね。そんなんありましたけど、それはコーラーとの出会いのなかで、やっぱり自分の心の動きを知るとか、自分の知らない自分とかに出会えた。すると、ここの活動をやめようと思ったのだから。こんな十二年間やっていたと思ったのだから。本当に継続にちょっと時間が厳しかったり、スケジュールが合わなかったりとかはありますけど。心理的に来たくないとかそういうのはほとんどなかったですね。

-ここで出会う方々と一緒に人生を歩みたいなという気持ちの方が単純な感じ。単純に不思議なんですよ。ここで出会うメンバー、ここの空間。まあ、たまにやっぱりね、自殺って考えたらシンプルなことでもありますけど。

W：金曜日の夕方に(シフトに入ること)がもう何て言うか、当たり前のようになっていて、それが人生の一部という認識を持つようになったんですね。

D：まあでもやっぱり四、五年経ってからじゃないですかね。活動して。自分にとって、やっぱりこの活動を通じて、人と心を通じ合うっていうのは、自分の人生にとって必要なことかなと思います。

抜粋 D-6 では D はセンターでのボランティア活動と自分の日常生活を両立させる際の葛藤について語った。D はまず自分がシフトに入るのが基本金曜日の深夜帯だと述べ、そのためにどうしても心理的、身体的な面で土曜日の家族に付き合う時間に影響をもたらすと語った。筆者はそれが終末期現場と子どものいる場所の間での切り替えのしにくさにもよると指摘するが、D はこれを肯定しつつも、活動の継続が難しく感じたのはあくまで物理的な面であり、心理的な面では前向きだと主張した。その言葉から、筆者は活動が D にとっての人生の一部だと感じるが、D はセンターの活動は「人生にとって必要」だといい、この認識に至るまでには四、五年必要だと指摘した。

D には私生活が忙しくなることで活動の継続参加に難航する状況に陥った時期があった。この葛藤を乗り越える際に、D は活動が自分にもたらした自己認識を促進する効果や一緒に活動するメンバーを想起し、心理的な面で自身が活動を放棄することはなかったと再度自己認識を固めた。この自分を把持する過程は結果的に D をセンターでの活動は「自分の人生での一部」だという意味付けに導いた。

【抜粋 D-7】

D：やっぱりコーラーとの出会いもそうですけど、このビフレンダーズでの仲間との出会いとか、先輩、後輩とかそういう出会いっていうのがすごい自分の心のなんかこう、支えになっているような、気がしましたね。やっぱり私自身も、弱音を吐きにくいタイプだったから。ここにいて時間というのは、あらゆる感情が認められるし、本当の自分でいられるなという気持ちがあった。

-正直、大変な活動で疲れるなって思っていたけど、なんかここに来ると不思議とホッと

ているような、自分の気持ちになったりして。

-なんかこういうコミュニティがこの社会にいろんなところにたくさんあれば、触れる人って心理援助の現場だけではなくて、なんかそういう関わりとかコミュニティとか。なんか孤独にしないというのが。大切なコミュニティやなあっていう感じですね。だから、この、ここで出会う相談者だけではなくて、ビフレンダーズの人たち、色んな課題を持った人たちが私にはいるんで、この人たちなしではここまで来られない。

W：具体的にどんなものが印象に残っているのでしょうか。いるだけっていいのか、交代するときに、ちょっとここで会話とか。話しかけたりかけられたりとか、今日の状況についてちょっとだけ説明したりとか。

D：一番よく覚えているのが、認定された時ですね。全然会ったこともない人たちが私のために集まってくれて、お祝いしてくれたっていうのは、それはやっぱり私とはかけ離れた年代の方々いろんな年代とか背景がある方々、私がメンバーに認定されたっていうことを誰でも喜んでくれているから、っていうのは非常に暖かいなっていうのが。

-なんかこういうつながりとか、あとはまあ自分のなかで悩んだ時に、この対応のみのアドバイスだけではなくて、自分の生き方を問うてくれたりとか、自分の辛さとか苦しみとか引っかけりとかといったものに一緒になって考えてくれたり、寄り添ってくれる姿勢っていうのがこの団体内が非常にあるので、こういう姿勢こそがまた新たな出会いを求めに来ようと思える。そういう原動力になっている。

抜粋 D-7 では D はこの活動を継続する支えのとして他のメンバーとの繋がりを挙げた。D はまっすぐに他のメンバーが自分の心の支えになっていることを指摘し、センター内では自分が「本当の自分でいられる」という考えを示した。D にとって、センターの活動での他人との繋がりは自分には必要なものであり、それこそより普遍的な社会集団での孤独の問題の解決に寄与するほど重要だった。D の言葉を聞き、筆者はコミュニティによって D が具体的に支えられたエピソードを問うた。この質問に対し、D は自分が正式的に電話相談員として認められた際に他のメンバーに祝われた体験を話し、その際の気持ちとして「暖かい」と表現した。さらに D はセンターのなかでは他のメンバーは自分の悩みについて単にアドバイスを出すだけではなく、真摯になって自分自身に「寄り添ってくれる」ことを指摘し、それがセンターに関わり続ける理由として位置づけた。

D が長期的な活動のなかで最も大切に思っている存在はセンターとそこに所属するメンバー達である。D がセンターの活動に参加する直接要因は要請講座でここは自分をありのままに「受け止めてくれる」場所、「求めるものが学べる」場所だと定義付けたからである。この定義には必ず受け止める、伝授する主体として活動に参加する他のメンバーが必要であり、D は活動のなかで常に自分がメンバーの一員としてセンターに帰属している意識を持ち、それをもって活動の継続に挑み続けたと考えられる。D の活動に対する上記の解釈は抜粋 D-5、抜粋 D-7 を含めた他のメンバーによって助けられ、認められる経験の積み重なり、最終的にセンターそのものに対する強い信念となった。その過程のなかでは、

D は活動の現場であるセンターを自身の「居場所」としての定義づけがなされたと考えられる。そして、この定義づけがなされたからこそ、D は抜粋 C-6 のような家庭生活との葛藤のなかでセンターの活動との両立を選択したのである。

4.5 まとめ

本章では自殺防止の電話相談の現場を取り上げ、この現場の特性をまとめた上、現場で長期的な活動を行っているボランティア 2 名を対象に、彼らのライフストーリーを振り返るとともに、彼らのボランティア活動に対する意味づけを現象学的還元の手法で分析した。

まず共通点から整理すると、C と D が現在のセンターでのボランティア活動に関わったきっかけは同じく親しい人の自死だった。この体験を受け、C は「塞ぎ込む」状態になり、D は「心の苦しみ」を味わうことになったが、どちらもそこに立ち止まることなく、その状態から脱却する方法を模索した。模索する過程のなかでは失敗も経験したが、最終的に二人が辿り着いたのは同じ場所であるセンターだった。この一連の過程は親しい人の自死から始まるものであり、その出来事がなければ、C と D がセンターのボランティア活動に加わることはあっても、その過程は紆余曲折になると考えられる。両者のライフストーリーのなかでは、センターとの関わりは「ショックな体験」による人生の転向の結果だと言えよう。

そして、C と D はセンターで活動する意志を確立させる経緯においても類似性が見られた。両者はショックの出来事後、ネガティブな感情を処理するために試行錯誤した。しかし、当時の C が持っている自死に対する「納得」と D の自死を受け止めたい感情はいずれも一般の社会通念から外れているため、周りからは否定的な対応を示され、受け入れられることがなかった。そこでセンターの講座では講師が自死についてそのまま受け止めるという考え方を提示したが、その言葉で C と D は自分の逸脱している感情がようやく他者によって「受け止められた」と感じ、センターへの好感を持つようになり、自身も活動に加わりたい意欲が掻き立てられたのだ。

長期的な活動を支えた要素においては、C と D のストーリーから共通して取り上げたのはセンターの「他のメンバーとの繋がり」や、センターそのものへの「帰属感」である。具体的な経験に注目すると、C はセンターをまとめる際に現在の仲間によって支えられたことに大きな意味を感じたことに対して、D の語りの中心は己の電話相談ボランティアの成長過程における他のメンバーによる激励とサポートに意味を感じていた。それぞれが直面していた困難や葛藤は別々だが、C と D はこれらをセンターの他のメンバーと一緒に乗り越えた経験は二人のなかでのセンターでの人間関係の重要性を高めた。宋(2009)は活動を辞めたい理由として、人間関係の問題があると指摘しており、古賀ら(2015)の調査においても「組織内の人間関係」が離脱理由の上位となっていることから、逆に組織内の積極的な人間関係は活動の長期化における大きな要因となりうるとも考えられる。これは、C と D の経験から見られるように、特にその人間関係が活動者個人の葛藤の克服に関わり、助力となった場合には有効的となり、個人の組織への「帰属感」の向上に繋がる。実際、

C は権力闘争に巻き込まれ、センターの活動を苦しく思った時期もあったのだが、その際に C は辞めることを考えずに、センターを優先し、それを闘争から守り抜くことを選んだのである。

全体的な流れには類似する部分が多い一方、C と D のセンターの活動に関わるライフストーリーはその意味づけや行動のメカニズムにおいては、違いも見られた。ここで筆者が特に指摘したいのは両者が活動に参加するまでの人生のストーリーの連続性のちがいである。上述したように、C と D が最終的にセンターに繋がったきっかけはともに親しい相手の自死なのだが、その自死に対する C と D の悩みのメカニズムには相違がある。C の場合、友の自死そのものはショックな体験でありながらも「納得」できることだった。C はその後「生きる意味」について悩むことになったが、それは C がずっと抱えてきた悩みであり、友の自死は、C の認識のなかではあくまでもその悩みに対する自身の思考を促した要素だとしか捉えられておらず、C の内にある自己のストーリーは連続的なものだった。しかし、D は心理的な知識に興味を持っていたものの、それに自体を人生の課題として位置づけることはなく、それとは縁の薄いサラリーマンの生活を送っていた。そんな D にとって、姉の自死はショックで、受け止めたいけどうまく受け止められない体験だった。D の悩みは、姉の自死に起源するものであり、その死を受け止めたい D 自身の気持ちに深く結びつくものとして捉えられていた。言い換えれば、D の場合、姉の死は真の意味で人生の軌道を大きく変えた出来事と考えられる。

そのために、活動に加わった際の C と D のどちらにとっても、センターとその活動は自分「受け止め」るものと定義付けられていたが、その受け止められた内容に対する認識では、C は人生の意味を彷徨う「孤独感」に重心を置き、D は姉の死を受け止めきれない無力感に重心が置いていた。言い換えれば、センターの活動に対して、C は自身の人生ストーリーを貫通する「孤独感」という課題に直面するための土台として定義づけている一方、D はより単純的にこれを行き場のない己の感情を受け止める場所、居たい場所だと考えていた。

この深層の意味付けの違いはその後の二人の語りにも影響を及ぼしている。活動の葛藤や印象的な体験について、C は率先に相談者との繋がりについて語ったのだが、D の語りはセンターの他のメンバーに関するものが大多数を占めていた。筆者はここで、両者の活動に対する定義付けの傾向として、「孤独感」からの解放を求め、人間関係の有様を追い求め続ける C と受け止められ、受け止めたいという思いを持つ自身が共鳴できる「居場所」に拘る D との違いを明確的に感じ取れた。そして、その違いの主な原因として、筆者は先述したライフストーリーの連続性を指摘したい。C は「孤独感」という人生の課題とともにセンターの活動に関わり始まったため、その意味づけの根底に大きな変化は見られなかった。D は姉の死という当時の課題とともに、悩んでいる自身がセンターに「受け止め」られたことで活動を始めたが、その課題が消失した後は、D が元々持っている心理的なケアへの関心と活動で知り合った仲間が新たな原動力、またはセンターを「居場所」として定義付ける根拠となり、活動を継続させる最も大きな理由となった。

総じて言うと、電話相談のボランティアが長期的な活動を行う理由は従来の研究で示された【自己成長活動志向】(古賀,2017)や【組織のサポート】(桜井,2005)などである程度説明されているが、こうした要素の影響の効果を多方面から受け入れられるのは D のように「ショックな体験」をきっかけとして活動に参加するタイプのボランティアだった。一方、C のような活動を人生のストーリーの一部、人生の課題に対応する試みの 1 つとして意味づけているタイプのボランティアにとっては、己の課題と向き合うことが最も重要であり、活動の継続は人生そのものの継続に緊密的に結び付けていると考えられる。

第五章 職業としてのボランティア

5.1 はじめに

序章で提示したように、日本におけるボランティア活動の歴史を振り返ると、1980年代から介護サービスの分野で給料をいただいてサービスを提供するボランティア活動が現れ、それが後に「有償ボランティア」活動として認識されるようになった。有償ボランティアに対する意見は賛否両論だったが、その議論が一因となり、日本社会における「ボランティア的なもの」に関する言説は1990年代を迎えるとともに〈交換〉に対する言及が増え、ボランティア活動の特徴づける概念に「互酬性」が加わり、従来の「自発性」、「無償性」、「社会生」を中心に据えたボランティア概念の同定が難しくなり、崩壊を迎えつつあった。そこでさらに NPO が国家の政策の元で台頭し、「ボランティア」は「終焉」を迎えた。しかし、それ以降でも、ボランティアと有償ボランティアの関係は難題として度々論じられてきた。安立(2022)は有償ボランティアの関係者のなかでは現場での労働を活動、対価を謝礼に表現を変えることでこの争点を乗り越えようとしたと紹介し、この現象を「微妙な問題」だと指摘した。

「有償ボランティア」の定義そのものも定かではない。この言葉の意味をそのまま理解すれば、償金、報酬金が発生するボランティア活動なのだが、これはボランティアが持つ「無償性」の側面との衝突を招く表現となる。Cnaan et al.(1996)はボランティアが受ける報酬を①無償、②予期にないもの、③実費、④謝礼・低い賃金の四つに分けている。そのうちで実費は活動を行う際に発生した交通費用などいわゆる経費に対する弁償の意味を含んでおり、日本では「無償ボランティア」として認識されていることが多い(小野,2005)。上述の安立(2022)が提示した一例で活動参加者が賃金に相当するお金を謝礼として受け取り、その概念を操作することでボランティアという体を保たせていることから見ると、「有償ボランティア」に対する定義は、支援する側が受け取ったお金の性質、多寡、雇用関係の有無などの複雑な現場の状況から影響を受け、それぞれの論者によって基準が様々である。この概念を単純に「有償でボランティア活動を行う者」と解釈する者もいれば(井出,2022)、「ボランティア活動の担い手に対して、実費や報酬といった金銭の収受を認めること」だより柔軟な定義を行う者もいた(庄司ほか,1999)。本研究では、長期的な活動でのボランティアの活動への認識と活動継続要因を考察の目的としているため、研究対象者を選出する際には、活動の体系が固まり、より活動の長期化につながりやすい雇用形態の活動に注目した。この点においては、従来の「実費、謝礼金を受け取る」という基準よりも労働者に近い考え方と言える。ただし、完全に一職員としての立ち位置となった場合、その活動に含まれる社会奉仕の精神の側面が見えにくくなる可能性も考えられるため、筆者は研究対象者に活動を通じた顕著な社会貢献的な志向を求める必要がある。したがって、本研究では、「有償ボランティア」を「社会貢献活動を生活の一環と見なし、ボランティア活動を雇用形態のなかで行うこと」として定義づける。

多くの争論、不確かな概念を抱えながらもボランティアはその発祥後から現在までの四十年以上の間に発展し続け、ボランティア活動の一形態として我々の生活の中に浸透して

きた。その背景には、ボランティアを特に社会福祉分野での人手不足の補うための都合のいい廉価・無償の労働力として捉え、その「利他的活動」としての社会的価値を損なわせ、場合によっては活動参加者の活動継続意欲を削り、葛藤を生じさせるような扱い方(例えば：過度な動員)が一部の活動現場、または行政の対応から見られたことを挙げられる(仁平,2011;李,2023)。「有償ボランティア」が「有償」であることの意味について、小野(2005)はボランティアにとっての活動参加した際のインセンティブ(金銭、名誉、自己効用感、宗教的義務、人間関係など)をコスト(活動経費、感情の消耗など)に見合うものするための「有償」と活動におけるボランティアと被援助対象との間の関係の対等性を表現するための「有償」の二つを提示した。このうち、インセンティブはボランティア側、対等性はボランティアと被援助対象の両方へボランティアに対するポジティブな影響を与える一要素としてボランティア活動の継続に貢献しているが指摘される一方、活動の参加動機にはなにくいことや、ボランティアと被援助対象に労働者意識と消費者意識を与え、活動の性質を歪ませるリスクが存在していることから疑問視された(小野,2005;東根,2015)。

有償ボランティアが活動の継続に与える影響を解明する動きの一部として、少ないながらも、意識の変容に注目した従来の実証研究は見られた。例えば、介護サービスの分野では、小澤(1998)は有償性が対等性を保つ機能を認めつつも給料が発生したことによりボランティアが「家政婦扱い」され、活動の継続意欲が削がれる事例から有償性は活動の参加、継続動機になり得ると同時に、活動を中断させる動機にもなり得ると指摘した。子育て支援の分野では、井出(2019;2022)は、有償性はボランティアの活動に対する責任感を高め、それが個人意識における社会性の高まりに繋がることを提示した上、こうした意識の変容は最終的に活動参加者の「ボランティアの場の広がり」を促進したと論じた。

このように、有償ボランティアにおける有償性は、活動参加者の意識に変容をもたらし、活動の継続と中断の両方に働きかけてきた。また、特定の NPO 法人、福祉団体でスタッフ職員として雇用されることは、ボランティア活動への責任感を高める効果があるとも考えられる。しかし、長期的な活動現場ではこうした意識変容は如何に起こるのか。これに対する実例の研究が未だ不十分である。本章では、雇用形態で長期的なボランティア活動を行う対象者 2 名を取り上げ、そのライフストーリーから変容が起こるメカニズムと活動の継続に与える影響を明らかにする。

5.2 本章の研究対象

本研究では、筆者はボランティアを職業として長年間務めてきた二名を調査対象者とした。この二名のうち、E は事務職員兼常任理事として日本災害救援ボランティアネットワークに所属しており、F は宗教者で、ビハーラ僧としてあそかビハーラ病院に雇われている。本節では、この二つの組織の背景を整理しながら、本章の現象学的還元の手順における具体的な設定を説明する。

5.2.1 日本災害救援ボランティアネットワーク(以下：NVNAD)と E

NVNAD は阪神淡路大震災を契機に設立された災害関連のボランティア活動に特化した組織である。組織の前身は震災の直後から結成された西宮ボランティアネットワーク(以下：NVN)であり、主な活動内容は西宮市と連携を取り、被災者への資源の配布を行うことだった。1996 年には、西宮での活動の緊張期が終了するとともに、ここでの活動経験をより多くの場所で活かすために NVNAD へと改称し、西宮市以外の国内外の被災地で救援活動を展開した。その後は災害救援、防災に関連する活動を次々と展開し、1999 年に兵庫県から特定非営利活動法人の認証を受け、2014 年に認定 NPO 法人の法人格を取得することに成功した。筆者が調査を実施した時点では、NVNAD は西宮市に事務所を構えつつ、緊急時の災害救援ボランティアに加え、平常時では全国、地域の団体らを繋がる「ネットワーク活動」、地域防災活動の中心の一環としての「防災まちづくり活動」と「講座・研修活動」の 3 つ（「活動の 3 本柱」と表現する）を中心に全国各地に向けて活動を行ってきた。

NVNAD の組織の発展にはいくつかの転換期が存在した。渥美(2000)によれば NVNAD は 1997 年の日本海重油流出事故の際の後方支援活動のなかで「ボランティアをコーディネート」する組織としての立場を再確認し、災害ボランティアの既存のシステムの〈外部〉に経ち、い「地域防災と言わない地域防災」という活動方針を決めた。1999 年には、組織の活動の中核となる災害ボランティアの自発性や無償性への疑いを提示し、「ただ傍にすること」を活動の姿勢として取り入れた(渥美,1999)。これは、現在の NVNAD の活動にも貫徹されているモットーの一つである。その初期の実践として、NVNAD は災害救援活動のみならず、上述した「活動の 3 本柱」にも着手するようになった。その活動の内容を限定しない流れは今もなお続いており、近年では新型コロナウイルスを災害として見なし、救援、予防活動への協力姿勢を見せている。また、近年の活動内容のもう一つの軸となっているのが近い将来に発生すると言われ続けていう南海トラフ大震災への対応の模索であり、特に阪神淡路大震災 30 周年である 2025 年 1 月を契機に、組織内では南海トラフへの本格的な対応を始めた。こうした多様な対応ができたのは、組織内には大学の教員、市の職員は様々な分野の会社/組織で活躍しているメンバーらなどで構成される研究班が存在するからである。その影響もあって、NVNAD では活動の際に大学生を巻き込む姿勢がある。

筆者が NVNAD を取り上げた理由のもう一つは、この組織の活動の持続性と頻度である。例えば、2024 年では、組織は災害救援活動を一年内で計 24 回行ってきた。そのなかでは 1 月に能登半島地震が発生した被災地での活動は後の 9 月に発生した豪雨災害に向けたものも含めば計 17 回であり、1 ヶ月に一回以上のペースで被災現場に赴いてきた。また、2011 年に起きた東日本大震災の現場でも 2 回の訪問を行っており、活動の持続性を体現している。第三章で扱った救援隊との主な違いとして、NVNAD はその組織の安定さのため、より多くの被災現場に関わることができ、活動の内容もコーディネートするボランティアによって多岐にわたり、より広い分野に関わっている。しかし、これは同時に、組織を運営する職員に特定の被災地に密着する救援隊隊員とは別のハードルの高い業務処理能力、共感力、コミュニケーション能力などを求めている。

NVNAD には様々な所属メンバーが組織そのものに関わっているが、実際事務所に常駐し、ほとんどの事務処理を行っているのは唯一の常務理事の E である。E は 1996 年から組織の常務職員となり、2007 年から常務理事に就任したが、数少ない実働メンバーのためにほぼ全ての活動現場に駆け抜けてきた。そのお陰もあって、E は現場での経験、体験が非常に豊富であり、活動によって影響され、認識の変容が起こる可能性も高いと考えられ、本調査に適合した対象者である。

筆者が NVNAD と最初に接触したのは、2018 年 6 月の大阪北部地震の直後である。地震後、筆者が在籍する大学ではこれに対応するための臨時的な組織が立ち上げられ、筆者もそのメンバーとして参加し、活動の一環として吹田市のボランティアとして市民の部屋の片付け作業を行っていたが、その活動には NVNAD と E も関わっていた。その直後に西日本豪雨災害が起き、筆者は 7 月の際に NVNAD の募集に応募し、初めて組織のボランティア活動に正式に関わり、被災地の倉敷市で泥だし作業を一日かけて行った。それ以降、筆者は、NVNAD の被災地での活動への参加はなかったが、防災まち歩き活動、防災知識を宣伝する展示会などで一日間のボランティアとして関わり、これらのほぼ全ての現場で E の活動に協力する経験を積み重ね、お互いに良好な関係を築いてきた。この関係性も E を本研究の対象として選定した理由の一つである。

5.2.2 あそかビハーラ病院と F

あそかビハーラ病院は京都府に位置する日本国内の数少ない独立型緩和ケア病棟で、国内初の仏教精神を理念とした独立型緩和ケア病棟である。現在のあそかビハーラ病院として運営し始めたのが 2014 年だが、その前身の「あそか第 2 診療所」は仏教浄土真宗本願寺派の関連法人によって 2008 年に開設された診療所である。2022 年からは一般財団法人日伸会ビハーラ医療福祉機構が運営を任されるようになったが、当初の理念である「願われないのちをともに生きるひと時に 仏のお慈悲に照らされた めくもりとおかげさまのことで やすらぎの医療を実践します」を引き継いでいる。病院はその名の通り主に終末期患者とその家族に向けた施設で、それらの生活を多方面からサポートし、「憂なく安らげる場所」となることを目指している。また、この施設は世間一般の患者に向けた施設であるため、施設内ではビハーラ僧が仏教の教えに準じて動くことがあっても、自ら患者に宗教の教えを伝え、入信を促すような行為は行われていないと言われている。

病院の名前の中に入っている「ビハーラ(vihara)」は仏教の用語で、インドでは一般は「くつろぐこと」を意味し、漢訳仏典では「住」「安らかな落ち着き」を意味し、近年の実践の場では「精舎・僧院」「休息の場所」を指す言葉となった(鍋島、2016)。鍋島(2016:22)さらにビハーラという実践の概念を「医療・社会福祉・仏教の専門職がチームを組んで、患者がどのような状態にあるのかを理解し、患者の全人的な痛みを和らげ、家族とも相談しながら、患者の人生がその人らしく完遂できるように援助するケア、または施設である」と述べた。つまり、ビハーラは終末期現場において患者とその家族がその人格を保つためのケア活動であり、従来の宗教の社会貢献活動実践の一環であり、ビハーラ僧

は専門職としての側面も持っている。ただし、前節でも述べたように、活動の出発点は社会福祉における傾聴活動であり、給料が発生するも必ず活動のコストに見合うものとは言えないため、本章ではあくまで対象であるビハーラ僧の F を「有償ボランティア」と位置付けている。

ビハーラ活動に関連する資格として臨床宗教師が存在し、F もこの資格を持って活動している一人だが、この資格が誕生したのは2012年である。従来では、仏教のビハーラ活動に加え、キリスト教信者によるチャプレン活動も数多くの実績が残されており、宗教者は「心のケア」の担い手の一つとして思われた(鍋島,2016)。実際、阪神淡路大震災や東日本大震災の後では、宗教者が被災地にて活躍する姿は度々取り上げられ、宗教の社会貢献活動として人々に受け入れられた。この流れのなかで、宗教者災害支援連絡協議会は2011年に設立され、その試みの一つとして「臨床宗教師」が誕生し、「宗教的ケア」と「スピリチュアルケア」の一つの試みとして推進されてきた。

あそかビハーラ病院で活動しているビハーラ僧は調査を実施した時点では4名であり、出勤時間はシフト制で少なくとも一人は病院にいるように活動している。ビハーラ僧の最も基本的な役割は入院中の患者とその家族の話を傾聴することだが、そのきっかけを作る日々の習慣として仏堂(ビハーラホール)での朝夕の短い法話が行われている(参加自由)。話を聞く際には患者の居室訪問が行われるが、患者が死亡場合はその家族の要望に応じた「お別れ会」も担当している。

筆者は直接にあそかビハーラ病院でのビハーラ活動に関わったことはなかったが、西日本豪雨災害の際では仮設住宅で行われた臨床宗教師による傾聴ボランティア活動に協力した。今回の調査に当たって、F とあそかビハーラ病院は筆者が寺子屋活動のボランティアとして通っていた大阪のとある寺院の住職による紹介でたどり着いた調査対象であり、筆者は F からの承諾を得た上であそかビハーラ病院へ赴き、インタビュー調査を実施した。また、あそかビハーラ病院の複数いるビハーラ僧の中から F を調査の対象者として選択したのは、活動歴が一番長く、長期的な活動における意識の変容を考察するのに適しているからである。

5.2.3 本章における現象学的還元の基準

本研究では、筆者は研究対象者が語ったライフストーリーに基づいてそれぞれの時点での語り手のセンターの活動に対する意味づけを分析するために現象学的な還元を行う必要がある。そのためには、筆者が持つ研究対象者本人、有償ボランティアや臨床宗教師などの概念に対する事前認識やイメージとそれによる見方の一部を保留し、現象学的態度へと還元する工程が必要である。

したがって、保留すべき内容は本章で紹介した筆者が文献調査、活動、メールを通じた接触のなかで無意識に形成している「有償ボランティア」と E、F 本人に対する価値判断である。これらをまとめた上で決めた本研究において保留すべき筆者の社会通念や先入観は以下の通りである。

(4) 伝統的なボランティア理論

具体例：ボランティアの基本的な性質：「自発性」、「無償性」、「公共性」、「有償ボランティア」に対する従来の認識(金銭の介在による責任感の向上、活動継続動機への繋がりとなど)。

(5) E、F が所属する組織、活動形態に対する社会的通念

具体例：

E の場合：「災害救援ボランティア活動は必ずしも現地のためになるとは限らない」、「災害ボランティアに取り組み続けるのは善行である」、「NVNAD の活動参加者は募集するごとに代わり、E が関わる対象もその都度大きく変わる」、「NVNAD の活動はボランティアのコーディネートを行う組織である」「NVNAD に同調し、E の主要な活動目的も防災である」などの災害ボランティアに関する一般言説と NVNAD への筆者のイメージ。

F の場合：「臨床宗教師は患者の言葉を何でも聞く」、「臨床宗教師は専門職であり、仕事としての側面が強く表れる」、「終末期医療現場では傾聴活動のハードルが高い」、「布教に繋がらなくとも、活動では宗教色が濃く表れる」、「ビハラー活動は仏教が新たな社会的役割の果し方を模索する活動の一環である」などの臨床宗教師であるビハラー僧に関する筆者の一般的なイメージ。

(6) 語り手に対する個人的な認識

具体例：現在の組織における立場(E が組織内唯一の常務理事である；F はビハラー僧を率いる立場にある)、語り手に対する筆者の個人的なイメージ(宗教者、ベテラン)など

以下の分析では、筆者は会話を精読し、理解する際に、上記の内容を可能な限り一旦保留することで会話の内容が発生した際の語り手の「生ける現在」に近づく。

5.3 E のライフストーリー

E は今回の調査対象者のなかで一番の年長者であり、現在の組織に関わり始めた時期は一番遅かった。これに加え、他の調査対象者と違い、E は活動に関わり始めた時点で賃金が発生する雇われの身となった。しかし、そんな E からこそ、無償、有償に関する論議というパラドックスを超えたボランティア活動に対する独自な見解を覗えんと考えている。本節では様々な被災現場で活躍する E のデータとその分析について記述する。

5.3.1 E の物語

E は現在日本災害救援ボランティアネットワーク(以下：NVNAD)のスタッフ職員兼常任理事として西宮市で活動しているが、E 自身が住んでいるのは大阪市だった。この活動に関わり始めたのは 29 年前である。E が生まれ育ったのは大阪市だったが、社会人になってからは神戸の船舶運営会社で勤め、周遊する船の管理などの業務をこなしていたが、阪神淡路大震災により船舶の運航が難しくなり、会社が休業した。その後、E はボランティア活動をしながら休業中にできる仕事を探し始めたが、それから一年が経ち、元町のレクリエーション協会で活動している頃に NVNAD に出会い、後に元々の仕事を辞めて NVNAD

のスタッフになることを決意した。

5.3.2 人生最初のボランティア活動経験

阪神淡路大震災は確かに E が NVNAD に繋がった最大のきっかけだが、以前にも、E は大学時代からずっとボランティア活動に関わっていた。E の話の最大の特徴は、話のなかでボランティア活動の経験を多数述べているものの、E はこれらの活動に対し、ボランティアであるかどうかに対してそこまでのこだわりを見せなかった。抜粋 E-1 で言及された E の人生最初のボランティア活動経験もその一例である。当時の E は大学生で、能勢町のとある野外活動センターでボランティアのキャンプリーダーとして活動していた。

【抜粋 E-1】

W：その際は、ボランティアに対してどういったイメージを持っておられたんですか？

E：その時はたまたま、だから高校の先輩、一個上の先輩がそういうなんかキャンプのそういうリーダーをやってて、それで面白いよっていうのをたまたま話を聞いてて。で、まあ昔からなんか屋外でこう何か活動するのめっちゃめっちゃ好きやったんですよ。まあ親にもね、キャンプに連れて行ってもらったり、スキーに連れても行ったり、ね、海水浴とかいろいろ、いろんなところに連れて行ってもらった経験があったんで、その野外で何か活動すること自体が自分がすごく好きやったんですよ。そういうのがあって、高校の時、そういう先輩がそういうキャンプのボランティアやって、子供と接してるっていう話を聞いて。で、野外で活動するのも好きやし、子供と接するのもすごい興味あったので、いいなって思って。ほんで大学に行ったら是非やりたいと思って、やったのが最初の動機ですね。野外で活動するプラス、子どもと何かやりたいっていうのが元々あって、その時は別にそれがボランティアやからどうやっていうのはあんまり考えてなかったかもしれないですね、最初は。

この抜粋では、筆者は E のボランティアに対する最初のイメージを問うたが、E は直接これを答えずに、まず活動に参加する動機を語った。E は己の幼少期の経験を振り返りながら、自分が野外活動好きだという性質を示した。そして、高校生の頃にキャンプのボランティアの話を聞き、野外活動好きと子ども好きな自分にぴったりの活動だと判断し、活動の参加を決めたと述べた。この振り返りを通して、E は活動参加の際では自分はボランティアを特に意識しなかったことを示した。

【抜粋 E-2】

W：（キャンプリーダーの）活動を通じて、今後も…ボランティア、誰かのためにできることをしてみたいなというのは、あの、何て言うか、意識は持たれているのでしょうか？

E：最初はまあ、さっき言うたように別にボランティアからやったっていうことじゃなくて、野外活動で子供と接することができるから、多分やり出したと思うんですけど。でも、

やってるうちに、やっぱその、言うたらお金はもらえないじゃないですか。でも、やっぱ
りお金をもらえないからこそ、なんかこう、人ともう純粋に接することができたんちゃう
かなっていうのは、やりながらどんどん自分なりに感じていきましたね。その1年目、2
年目、3年目になっていく方が、これを例えばアルバイトみたいにお金をもらう関係やっ
たら、多分どっかで割り切って、もうここまでやったらいいんちゃうかぐらいに思ってし
まうかもわからへんけど、お金がもらえないということは、やっぱそんだけお金以上に大
切にしないとイケないというか。感じれることが多分あるなっていうのはすごく気づきま
したね。だから、普通アルバイトやったら、お金で対価もらったら、もうそれで一応ね(区
切りが付く)。

W：ボランティアの性質だからこそ活動を継続できた？

E：まあ、子どもたちのこうね、なんかキャンプ終わっても、例えば手紙をもらったり、
あるいはまたその次の年もキャンプに来てくれたり、やっぱそういうのってやっぱすごく
嬉しいなと思ったし、これはちょっとだいぶん経ってからなんですけど、そのキャンプに
来た子どもたちが、例えば中学校とか高校生やった子が卒業して大学に行って、僕らもう
そのリーダーは卒業してた時ですけど、その人らが今度キャンプのリーダーになって、活
動しているっていうのを聞いた時はめちゃくちゃ嬉しかったね。

-こうやったっていう感じになるかもしれないんですけど、僕らそのお金でね、報酬はもら
えないので、お金の別にね、もらえるからやってるわけじゃなくて、それ以外のなんかこ
う、喜びとか、人とね、なんか成長が見れたとか、そういう価値基準が、やっぱそこでな
んか育まれたっていうか、感じれたこと自体がやっぱり自分にとってはすごく意味あった
なと思うんですよね。

抜粋 E-2 は実際の活動を経験した後のボランティアに対する E の考え方を表した対話で
ある。筆者の質問は E が活動を通した意識の変化を問うたが、E は再度最初ではボランテ
ィアに対する関心はなかったと表明した上、活動を続けるのにつれて、お金がもらえない
活動だからこそ自分は活動のなかで人と「純粋に接する」ことができ、お金以上に大切な
ものを手に入れられたと指摘した。筆者はその話からボランティアの無償性への言及を感じ
、確認したが、E はさらに大切なものとしてキャンプ参加者からのリプライやそこから
感じる繋がりを挙げ、無償であることが己の価値基準を育てたと、ボランティアに触れず
に回答した。

E は学生時代からボランティア活動に携わっていたが、その際の E にとってボランティ
アであるかどうかはさほど重要なことではなかった。E が求めていたのはあくまでも興味
のある領域での自己実現であり、これは言い換えれば、当時の E が活動を参加した主要
因は「知識機能」と「興味」だった (Clary et al.1998、谷田,2001)。しかし、活動を通し
て E は無償的な活動の大切さを認識するようになり、E のなかでのボランティアという概
念の親和性が強まったと考えられる。

5.3.3 NVNAD に入るまでの社会貢献活動

大学卒業とともに E はキャンプリーダーの活動からも卒業したが、社会貢献活動自体は辞めておらず、船舶の会社に就職するまで 2 年間で大阪キリスト教青年会(以下：大阪 YMCA)の元で学生への支援活動を行っていた。抜粋 E-3 は E がその活動がもたらした影響について聞かれた際の回答である。

【抜粋 E-3】

E：その YMCA に行った時はさすがにクリスチヤンのあれなんで、毎回聖書を朗読するのを聞いたり、そういう場面は週に一回は最低あったんですよ。そういう時間がね、プログラムの中に入っていたので。そういうのを聞きながら、聖書を読みながら、こういう考えあるなっていうのは、すごく自分でも勉強はね、なったんちゃうかなとは思いますね。まあそのね、どこまで分かっているのかよくわからないけど、中途半端なね、理解しかできてないとはいえ、そこでもだいぶ自分なりの考えはそれを参考にしているかもしれないね。-(YMCA に)2 年間だけおって、その先の神戸の会社に移ったんですけど…だからね、キャンプリーダープラス、その 2 年間で、ボランティアみたいなベースがだいぶ人間、自分の中にはこう出来上がったみたいな、それがあって。で、さっき言った神戸の仕事に行ってから、もうお休みの日はレクリエーション活動をずっとボランティアでやっていたんですよ

E は YMCA で二年間活動したが、その間に印象に残っているものとして、E が取り上げたのは宗教的な考え方だった。YMCA では、E はキリスト教の教えに触れたが、その内容は E のボランティア活動に対する考えを深めた。E は大学からのボランティア活動の経験が自分の人生に「ボランティアみたいなベース」を作ったと述べ、就職した以降もボランティア活動を継続していたことを話した。

E は元々ボランティアに対する意識はほとんどなかったが、キャンプリーダーの経験は E の人生にボランティアという概念を持ち込み、宗教関連の組織での社会貢献活動の経験はその概念をより明瞭にした。これらの体験を通して、E のなかではボランティア活動は自分の生活の一部として定義付けられつつあった。

5.3.4 NVNAD の活動初期での心理的変容

E は阪神淡路大震災の後、元々週末に通っている元町の団体でボランティア活動を行っていた。その活動の内容は多岐に渡るが、子どもの支援活動もその中に含まれており、E が NVNAD に出会ったのも子ども向けの活動の現場だった。NVNAD では、主な活動内容は防災活動であり、E のそれまでの社会貢献活動の中心である子どもと何かをするから少し離れている。それでも、E はこれを受け入れており、その中には E の活動に対する考え方の変容が覗える。この変容の過程について触れたのが抜粋 E-4 である

【抜粋 E-4】

E：そうね、もともとね、だから、その最初にこの団体に入るきっかけは、まあ、あの、特に子どもたちのそういう防災の支援をやってくれっていうのが最初のあれなんですよ。で、その災害支援よりも子どもたちに関わりたっていうのが最初にあったので、まあキャンプと、あとね、YMCA の流れから言ったら、多分子どもたちと関われることが一番僕はその当時は興味あったので、この NVNAD に入った最初の頃は、この子どもらと関われる防災教育みたいなことを中心にやってほしいという誘いがあったので、関わりたと思ったのが最初の経緯なんです。で、まあこの団体としては、さっき言ったように災害支援もね、一番メインなので、子どものことばかりやってられないので、で、途中からまあそういうね、災害が起こったので、そういう災害支援にも、まあ関わりながら並行して最初の頃はずっと活動するような感じでしたね。

-子どもたちと一緒に関われるっていうのがベースにあったんで、多分この団体に最初に関わったと思います。その災害だけやったら、多分ね、ひよっとしたら入ってないかもしれないね。

W：そうですね。でも実際、今おっしゃったように、子どもの支援をベースにというかあの、まあ、子どもの支援を目指して入られたんですけど、活動中に変化はあったのですか。

E：でもやっぱ現地に例えばね、行った時に、やっぱ困ってる人がそこら中にいてはるわけですよ。その人らのこう、なんかね、助けっていうか、お手伝いをする活動にももちろんなるんですけど、でもこれってやっぱり結構大事やなっていうのは、多分自分なりに感じたとは思うんですよね。まあもちろん、子どもたちとの関わりはベースにやっぱりね、あの、興味はあったけど、でもこうやって被災地に行って、困ってる人がいる場面に関われるっていうことも、まあ活動としてはやっぱり大事やなっていうのは徐々に多分自分なりに理解していったかもしれないね。

-対象がちょっと大人になるだけで、中身っていうか、変わってない部分もあるんじゃないかっていうのを理解していたかもしれないね。

抜粋 E-4 は筆者が NVNAD での活動に対する E の初期の印象について問うた後に発生した会話の一部である。E は質問を受け、それまでのボランティア活動について振り返り、その中心が「子どもと関われる」だと確認した上、NVNAD に参加した理由もそうだと述べた。しかし、NVNAD では組織の性質上、災害の現場に赴き、防災、災害救援活動を行うことをメンバーに求めているため、E は己の役割の一部としてこれらの活動にも力を注いだ。筆者は災害の現場に行ったことによる E の認識の変化を尋ねてみた。これに対し、E は不確かな表現が混ざりながらも、やはり現場にいる、困っている人に関わることも大事だと新たな認識を活動を通して得ていることを認めた。そして、その理解の仕方を、E は活動の「対象がちょっと大人になるだけ」だと表現した。

E が大学の時期から阪神淡路大震災震災直後の活動まで、ずっと自分の関心がある「子

どもと関われる」ことを中心に活動しており、NVNAD の活動も最初はその延長線上の一環として捉えられていた。しかし、実際の NVNAD での業務の範囲は E が思ったよりずっと広いものだった。E はこの差に適応していくのだが、その過程のなかで困っている被災者を目にし、助ける必要性を感じた。E は関わる相手、助ける相手が変化しただけだと解釈することで己のこの助けたい思いを固めたと考えられる。言い換えれば、この時期の E のなかでは、ボランティア活動は関心のある対象を助ける活動から、困っている誰かを助ける活動へと意味づけの重心が変容しつつあった。

5.3.5 長期的な活動の継続要因

E は NVNAD の活動に参加して以来、29 年の間活動を続けてきた。この間では、E は一職員から常任理事までの昇進を果たしているが、災害が頻発する日本では防災活動は決して楽な業務ではなかった。それにも拘わらず、この激しい業務のなかで長期的に活動してきた E は特に活動を辞めたい思いはなかったという。抜粋 E-5 がその理由についての具体的な会話である。

【抜粋 E-5】

W：実際に、途なかで辞めようと思ったりされたことはあるんですか？

E：それは一回もないですね

W：一回もなかった。

E：今まで 1 回もないね。まあそれはだから、子供達の、こう、関わりをだから、やれているからかもしれないですね。普段から…色んな子供向けのプログラムを山ほどやっているんですよ。だからそういうのがベースにやっぱり今でもあるので、それがもし全くゼロになったら、災害の支援だけだったら、ひょっとしたらどっかで辞めたいなと思ってる時期がひょっとしてあったのかどうかちょっとわからへんけど、今まではそう思ったことはないですね。

W：ご自身ではその思いはなかったのですね。活動自体の継続を難しく感じた時は？

E：そういうのは何回かありますんで、だからだ、団体の維持という意味では厳しい時期は何回もありますね。ただ、個人的に自分がだからその何か活動で行き詰まったっていうのは、まあそんなめっちゃくやしんどいということはないですね。もちろん被災地でね、困っている状況を見たらね、しんどくはなるけどでも性格にもよるんですかね、これってね。自分があんまりね、しんどくなって思ったら支援になれないので。

抜粋 E-5 では、E はこれまで活動を辞めたい思いが一度もなかったと筆者に伝えた。その後、E はその理由として己の関心である「子どもと関われる」ことが NVNAD の活動の一部としてずっと組み込まれてきたことを挙げた。ここでは、E は再び「子どもと関われる」ことが自分の活動のベースだと認識し、活動持続におけるその重要性を語った。続いて、筆者はさらに E 自身以外の活動での葛藤を問うた。この質問に対し、E は団体として

難航した時期があったと答えたあと、やはり自分自身にはそれがなくて、その理由に被災地で感じるしんどさを自己処理できていることを補足した。

活動に対する解釈に変化があったとはいえ、E が社会貢献活動に参加する根底にはやはり子どもと関わりたい意志が存在し、NVNAD での業務のなかでそれを実現できる内容がある限り、E も活動の意義を失わずにいけるであろう。E は被災地で経験するしんどさを取り上げながらも「自分があんまり」だと述べたことから、E のなかでは、自分が現在の活動に向いているという認識も多少なりとも潜んでいると考えられる。

このように、E の認識のなかでは、自身の活動継続の障害になるような課題はほとんどなかった、あるいは解決されている。一方で、E は長期的な活動を通して、活動自体、ボランティア自体に関する課題を抱えるようになっていた。E がその課題とそれを解決する方法の詳細について語ったのが抜粋 E-6、抜粋 E-7 である。

【抜粋 E-6】

W：では、NVNAD だからこそ活動を続けたいと思ったことはありますか。例えば、被災者との繋がりだとか現場で得られないような思いだとか。

E：そうね。あの、まあ、今まで被災地にいろんなところ行っているんで、そこで出会った人って未だに繋がっているところ結構あるので、まあ、もちろんそういうのもね、大事にしていきたいなというのは一方であるんですけど。僕は今やっぱり一番思っているのは、これだけやっぱり日本ってやっぱり災害が多いじゃないですか。地震にしたって水害にしたって、毎年のようにどこかで起こっていますよね。で、ただその時にやっぱりそのボランティアのね、人数ってどんどんやっぱり少なくなっているような気がしてて。で、それは何でかなっていうのはちょっと一方で、やっぱりね、考えなあかんと思うんですけど。やっぱりまだまだね、ちゃんとした仕組みがこの国にはなさすぎるんじゃないかなと思って。で、あの阪神淡路大震災の当時は、ボランティア元年って言われて、で、ボランティアがね、これからやっぱりどんどんね、広がっていくっていうのは、あの時はイメージすごく持ってたんですけど。でもあれから年数もね、三十年近く経ってるけど、でもあれからほんで何か進んでるかって言われたら、反対に今回の能登半島の地震なんかで見ても、ボランティアさん来ないでくださいって言われるように、ボランティアに関わりにくい状況もあるんですよ。でもそうなってくると、ボランティアは実際に関わりたと思っていても、やっぱりこう関わる土台っていうのがあんまりにもこう貧弱やなと思っていて。

抜粋 E-6 は筆者が NVNAD という組織、災害救援の活動だからこそ活動を継続した理由について問うた際の E の回答である。E はまずこの活動の現場で出会った人との繋がりが継続する理由の一端だと認めつつも、それ以上に活動で感じた課題について説明した。E は災害が頻発しているにも関わらず、現場で活動しているボランティア活動の数が減っているという自身の認識を示し、日本でのボランティア活動の仕組みの不足を指摘した。E はさらにボランティア元年での活発な活動と能登半島地震直後のボランティアを拒否する

風潮を取り上げ、自身が懸念している「ボランティアに関わる土台」の貧弱さを課題として提示した。

筆者は抜粋 E-6 を含んだ対話の流れから E のボランティアの現状に対する不安の真剣さを感じ、その思いを確認したが、この質問から始まったのが抜粋 E-7 の会話である。

【抜粋 E-7】

W：ボランティアが広まりにくいのをすごく気にしているのですね。

E：ちょっと言い方悪くなるかもしれないけど、なんか NVNAD もそうですし、なんか。活動している本人たちにはその意識はないかもしれないけど、でも一般からすると、こういう団体が活動、あの、動いているから、自分たちもまた、何て言うか、こういう団体に所属していないので、ちょっとこう、ボランティアはこういう団体がすることで、自分たちは何て言うか、そこまでする人ではないとか、なんかボランティアは自分からその意識があっても、何て言うか、やっぱりどこかに所属してからじゃないと始まらないようなことという、まあ、いわゆるそれこそ、「プロ」という意識が、あの、良くない方面で働いているような部分があるんじゃないかなとも思いますね。

...

W：この状況に対応するのもご自身の課題だと。

E：今までの経験というか体験が増えていくので、それをこうね、積み重ねていけるっていうこと自体が、やっぱり自分しかできへんことやし、それを伝えれるのも自分しかできへんなーっていうようなことを思うから、余計こうやりがいを感じたり、意味を感じたりっていうのがあるんかもしれないね。

-長期ボランティアはね、そうやってやっぱり続けることに意味があるっていう部分は絶対あるんでしょね。短期と比べた場合に、短期では多分そこまでは味わえないので、やっぱりやればやるほど積み重なっていくものが絶対あるんでね、人間。

抜粋 E-7 では、E はまず日本のボランティア活動が直面している難しい現状に対する自身の見解を示した。E は自身が働いている NVNAD を取り上げ、こうしたボランティア活動における「プロ」団体の存在が悪い方向に働き、社会一般のボランティア活動に参加するハードルへの認識のずれを助長したと熱弁した。筆者は会話のなかで E が課題を自分ごととして認識している傾向を感じ、それを指摘してみたところ、E はボランティアに対する認識を変えるためにはやはり自分のように活動の経験を積み重ねてきた人が必要だという思いを語り、それが活動に対して「やりがいを感じ」ることとの繋がりを説明した。その後、E は自身の話を振り返り、この積み重ねそのものが長期的な活動を行う意義だと指摘した。

E の活動継続は、従来持っている「子どもと関われる」軸以外にも、活動で気付いた課題が影響を及ぼしてきた。E は日本の災害現場でのボランティア活動の人数が減少し、ボランティアに関する仕組みの不足していることを課題について語り、その解決に自身のよ

うな人による情報拡散が必要だと熱弁したが、この会話の内容と態度で分かるように、E は長期的に活動に関わり続けるなかで、ボランティア活動という言葉に責任感を持ち、その発展を自分ごと化していた。これを E 自身の雇われの身立場と結び付けてみると、E は「プロ」のボランティアという立場に立ちながらも、その精神はずっと大学時代に「市民ボランティア」として活動した際のそれとほとんど変わらなかった。むしろ、E は「プロ」という活動様式を通して、自分を管理する「特権者」ではなく、伝承させる「経験者」の意識を芽生えさせ、自身のボランティアの職業化による弊害を回避したのである。つまり、調査を実施した時点の E はボランティア活動を自らの人生と結び付け、己が推進すべき活動だと定義付けており、E が活動のなかで解決すべき課題を見つけたことが活動を継続させる新たな要因となったと考えられる。

5.4 F のライフストーリー

一概に雇われる形式のボランティアと言っても、その働き方、現場での立ち位置や給料の多寡によって様々な形態が見られる。そのなかでも、宗教との関連性があるか否か、そもそも活動者自身が宗教者であるか否かは、信仰の有無と契約先での宗教の扱いによって活動の継続に独特な影響がもたらされる。本節においては、宗教者でありながら信者でない患者を対象とした終末期現場で長期的な傾聴活動を行ってきた F のデータとその分析について記述する。

5.4.1 F の物語

F の実家は大阪府のお寺だった。幼少期の F はお寺で過ごしたが、その暮らしに対して、F は周りの友達が違うということで嫌な感情を持っていた。その後は一度家を継ぐ思いで僧侶になることを志望したが、住職である父親に断られ、最終的に僧侶になるのではなく、公務員になることを目指した。公務員になったあと、F は神戸のとある病院に配属され、事務職員として働くこととなったが、その直後に阪神淡路大震災が発災し、F の人生を大きく変えた。震災後の病院での勤務中に、F は業務内容と当時の医療環境そのものに対して疑問をもつようになり、熟考の上再び僧侶になることを決意した。そして、F は京都にある仏教の専門学校と行信学校で修業を重ね、20 代後半で浄土真宗本願寺派(西本願寺)の僧侶になったが、それとほぼ同じ時期にビハーラ活動者の養成研修会に参加する機会に恵まれた。F のビハーラ僧としてのボランティア活動と現在のあそかでのビハーラ僧の活動はそこから始まった。筆者が調査を実施した時点では、F はあそかビハーラ病院でビハーラ僧として 10 年以上活動してきた。

5.4.2 ビハーラ僧になる以前の F とボランティア活動

F の人生を大きく変えた出来事は阪神淡路大震災だが、その際に F はいきなり僧侶の道に戻った訳ではなかった。震災後、F はまず病院での激務をこなしながらボランティア活動に参加していた。それが F の人生での初めてのボランティアの経験である。抜粋 F-1 は

F が当時ボランティア活動に身を投じた状況を振り返る際の対話である。

【抜粋 F-1】

W：最初にボランティア活動に従事したのはいつからでしょうか？

F：実はもっと前に、阪神淡路大震災、あれ 1995 年か？…というのも、震災直後は炊き出しとか、現場の復興がね、緊急支援物資とか、そっちのボランティアがメインだったんですけど、一年、二年経ってきて…そこ（傾聴ボランティア）に参加したんですよね。それが初めての時だったんで、私が、二十歳ぐらいの時かな。

-じゃきっかけとしてはその、もう震災が落ち着いて、仮設住宅の方で孤独死とかいう、まあその時に何か、自分にできることって何なんだろうって思って、で、言うてみたら聞くボランティアって、特別に何か資格が必要ってわけじゃなくて、話を聞くっていう、誰でもって言ったらおかしいかもしれないけど、できることなんかなって思ったのがきっかけなんですね。

-それが初めてのボランティアですわ。それまでにボランティアなんて全然興味なかったし、そんなしようなんて何にも考えていなかったですけど。やっぱ震災の時が一つのきっかけなんですね。

W：ボランティアではなく、利他的な行動または社会貢献するような考え方は？

F：その時はですね、利他的とか社会貢献だとか…まあ実は自分がその大学の附属病院にあった仕事というのはですね、収入、お金を管理する仕事なんです。僕は被災された方からお金の徴収に、お金の集金に上がるというね、そういう仕事をしてたんですよ。言ってみたら逆に、被災された方を苦しめることしか（できなかった）。

W：互いが互いを苦しめるような。

F：そうそう。でそういう仕事だったので、すごく自分自身のなんというか、その人を助けてあげるといってわけじゃなくて、自分のためってね。そんなのが（ボランティアに関わり）初めての思いですわ。

W：本当は職務だったんですけど、どうしてもそこから罪悪感というものを。

F：そうそう。罪悪感があって、自責までは行かないけれども、自分自身のためっていうか、自分自身を見つめるっていうか、自分の心をケアするっていうか、そういう気持ちの方がはじめはメインやったかもしれないのですね。人を助けてあげようとかではなくて、自分のこのモヤモヤを何とかしたかったというかね、そんな思い。

W：聞くボランティアの方はいつまで続けていたのでしょうか。

F：それはね、本当単発で、月に一回、やったかな。で半年ぐらい行かせてもらえましたわ、六回ぐらいか。まあ、その後も、お坊さんの勉強とか始めたのでその頃に。でお坊さんの勉強はじめて、京都に引っ越したんで、なかなか行く余裕がなくなってしまったのですね。

抜粋 F-1 では、まず筆者が F の初めてのボランティア活動について尋ねた。質問を受け

た F は阪神淡路大震災の直後の自身の経験を振り返る。F は地震後、職務以外で被災者のために自分ができることを探し続け、その過程で炊き出しなど様々な種類のボランティア活動を試みたが、二年が経った頃から仮設住宅向けの傾聴ボランティアとして定着するようになった。その後、F はそれまで、自身にはボランティアに対する関心はなかったと話した。筆者がこの話に興味を示したところ、F は続けてボランティア活動に参加した思いとして自身が病院での職務と現場の雰囲気の乖離について言及し、自身が「被災者を苦しめる」感覚がボランティア活動の参加を促すきっかけだと話した。筆者は F の話から当時の仕事の業務に対する罪悪感を感じ取ったが、F はこれを肯定した上、その感覚から自分を守るため、「自分の心をケアする」目的が、ボランティア活動に参加した最初の思いだった可能性を示した。このボランティア活動は、F の引っ越しによって離脱した。

阪神淡路大震災発生前の F にとって、ボランティアはほとんど縁のない言葉だった。にもかかわらず、F が発災後にボランティア活動に参加した主な原因は主に 2 つ存在する。一つ目は単純に病院での仕事では助けられる相手が限られていたことだった。そして、最も重要な二つ目として、F は自身が担当している業務は被災者を苦しめると捉え、それが F の他人の助けになりたい意志と背き、心を傷つけていることであり、F がボランティア活動に参加したのはその状態から脱却するためでもあった。つまり、初めて活動に参加した際の F のなかでは、ボランティア活動は他人を助ける活動でありながらも、「自分の心をケアする」行為として定義付けられており、F の活動参加要因として「保護機能」が大きな効果を発揮していた。ここで注目すべきなのは、この過程のなかで、F は〈贈与〉の概念において、職業として取り組んでいる病院の仕事では自分は被災者に寄与するどころか、奪う立場にあった。この認識は F に現状における自身の無力を意識させたのと同時に、その場合における〈贈与〉のあるべき形を探すことに目を向けさせたことである。

筆者は F の陳述を聞き、F が自身の仕事内容を責める根本的な要因は自身が持つ他人を助きたい意志であり、その源が気になり、問いかけた。この質問から派生した会話が抜粋 F-2 である。

【抜粋 F-2】

W：その際に宗教的信仰から何か影響を受けたことは自覚しましたか。

F：その時はね、私もお寺の出身何ですけど、お寺を継ぐつもりはなくて。神戸大学ってあれ、国家公務員なんですよ。文部科学省系の。そのときに、宗教的なものは全然してなかったんですね。してなかったんやけど、

W：成長の環境が

F：そうですね。うちの父が献身的に自分の檀家さんのお世話をすごくしてて。お坊さんを超えた。お経を読むとか、

W：お坊さんと檀家さんの一般的な概念における関係を超えたような？

F：超えたような、うちの父は、なんか相談ことに乗ったりとか、家のなんか悩みに乗ったりとか、そんなことを、父から聞いたのじゃなくて、その父がお世話をしていた檀家さん

から「お父さんには足向けて寝られへんのや」みたいなを聞いてたんすよね。その父の姿というのが一つ宗教者としての理想像というか宗教者像みたいな印象ってのはあったんですよね。

ただ、お寺というものにどうしても反発していた時期があって、お寺を継がずにまあその病院で、公務員、働いてたんすけど。その病院で働いていて、公務員って国民の利益になる仕事と思っていたけど、現実働いてみると、まあ先言っていたように、押しつけられた感というか、なんか自分が本来やりたかった役割とは違う仕事だなていうのをずっと抱えてたすよね。人の役に立ちたい、そう思っているけどそれができない、それ、仕事する事によって苦しめてしまうというのがやっぱりあって。そういうのは聞くボランティアに参加する動機の一つにはなったすわ。その父親の姿と、宗教者としての姿と、現実の自分とのギャップと、宗教者ってどんなん何だろうというのはこのボランティアをしながらやっぱり考えていました、実際に。

抜粋 F-2 では、F は自身の他人を助けたい意志の源として宗教者である父親の行動を取り上げて説明した。F はボランティア活動に参加した際の動機と宗教的な思想との関係を否定しつつも、宗教者であり、檀家に献身的になっていた父親について話した。F はそんな父親を理想像とし、公務員でありながらも「人の役に立つ」ことでそれに近づこうとしたが、現実では被災者を苦しめる存在になっていた。F 自身もこの理想と現実のギャップに苦しめられたが、これが最終的にボランティア活動に参加する動機となった。

この会話から分かるのは、F が「心のケア」をきっかけとしてボランティア活動に参加した体験の奥には、F が子どもの頃から持っていた利他的行動を行う父親という理想像への憧れが根本的な要因として存在した。公務員として他人を苦しめている現実と理想像との差は F 自身を苦しめたが、F の利他的行動への希求から、その苦しみの解決方法としてボランティア活動を選んだ。子供のボランティア活動参加に対する親のロールモデルの影響は近年でも取り上げられたが (Antonia ら,2025)、F の場合、そのロールモデルが示した人物像の中には宗教が持っている利他主義の一面も含まれていた。したがって、この時点での F のボランティア活動に対する定義には利他主義を実践する理想像の実現手段という意味付けも潜んでいたと考えられる。

5.4.3 ビハーラ僧として活動する理由

阪神淡路大震災での活動経験は、F に大きな影響を与え、僧侶の道へと導いた。F が僧侶になる時期は、偶然にも浄土真宗本願寺派の僧侶の間でビハーラ活動を推進される時期と重なった。F は、「人の役に立つ」という本心から僧侶として己にできることを探っており、その試みの 1 つとして、ビハーラ僧になるための講座を受けたが、当時の気持ちについての振り返りが【抜粋 F-3】、【抜粋 F-4】だった。

【抜粋 F-3】

W：ご参加となったきっかけは？

F：そのビハーラ活動というのは、医療と、学校、福祉と、で仏教とを融合させたような考え方で。実はね、実は私、子どもの頃からいろいろの病気を持っていて。幼い頃の時はいちいち入院を繰り返していたんですよ。

-で、医療というもののものすごく感謝しているし、でも医療に対する不信も両方あって。先天性の障害を持っていて、本当に、病院とか医療機関とは付かず離れずの関係にあるような小学校時代だったんですよ。夏休みもほとんど病院に、小学一年生から二年生の時はいちいち、二ヶ月くらい入院してたんで、で、病院のなかで、授業を教えてもらったりもしたし、学校のね、院内学級がね、そういう環境の中に浸ってた自分もいたし、だから医療ってのは子どもの頃からすごく意識してたんですよ。で、ちょうど神戸大学の病院で、まあ非常に最先端の医療現場ではあるけれども、いわゆる病気を診るけど人は見ないのよな、なんかそういう一面もちょっと垣間見るところもあって。

W：忙しすぎるから病理だけに目を向けてて人の心のケアまでする余裕がない感じですか。

F：はい。それはもう仕方ないんだけど、なんか医療というものがちょっとあらぬ方向というか…その頃からどんどん科学技術、医療技術が進んできて、あの脳死臓器移植の問題とか、あと生殖医療の問題とか、まさにこう、生まれてくる命が医療という現場で逆に殺されてしまうみたいな。出産、生まれてくる前に何か病気が分かれば、ね、中絶するみたいな、で、私自身が先天性の病気を持っていたのか、そういうことにやっぱりすごく敏感なんだよね。で、ちょっと二十歳の時にテレビの番組でバイオエシックスの話題が出て、いわゆる優性質素というやつですか。優性な遺伝子を残して、劣性の遺伝子を…そういうなんか医療の方向性すごく反発を感じたんですよ。やっぱり、神戸大学をやめてお坊さんの道を進んだ時に、どっかで将来的に医療と宗教というものを一つのテーマに自分はしていきたいなと、まあ自分のその病気を持っていたというのが一つあって、でビハーラ活動に出会ったときに、あっこれや！でなったんですよ。あ、自分が求めてたのはこれやなと思って、でそのビハーラの講座を受講したんですね。

【抜粋 F-4】

W：すごく縁のあるできことでも。

F：まあお坊さんの学校でね、お坊さんになるための研修のなかでビハーラの講義があったんですよ。でそれにすごく感動したんですよ。

W：その講義の際にすごく素敵な先生がおられたのですか。

F：えっと、野村先生って言って、今となりがビハーラ本願寺という特別老人養護施設なんですよ、そこの理事長をしていた人が講義してたんですよ、覚えてますそれ。

-どんな話だったかという、自分の子どもの病気ですごく苦しかったという話を聞いて、で、そういう僧侶でありながら福祉の道に足を踏み入れた先生なんですよ。そんな講義を聞いてすごく感動したんですよ。自分の過去と結構重なり合うというかね、共感しましたのですね。

W：野村先生のお子どものこととご自身のことを？

F：そうそう、自分の生い立ちと重なり合って、で自分もそういった、お坊さんになって、そういったことをしていきたいなと思ってね。

抜粋 F-3 では F がビハラの講座を受けた理由として医療に対する複雑な思いを語った。F はまず己の幼少期を振り返り、先天性の障害を持った自身が入退院を繰り返し、医療現場で助けられることとこの現場に対する憧れや感謝の気持ちを語った。しかし、一方では、F は大人になり、実際の医療現場で働く際の経験も取り上げ、「病気は診るけど人は見ない」その現場の雰囲気話し、自身の中の幼少期の良き印象と現実のギャップで生じた矛盾に触れた。つまり、F にとってさらに進歩した当時の医療現場は必ずしも F が求めていたものではなかった。医療に対する憧れを抱いたまま F は現場から離れることを選んだが、そこで出会ったのがビハラ活動という。

抜粋 F-4 は講座での印象的な出来事で、F がビハラ僧として活動することを決意した瞬間についての会話である。F は講義のなかで、病気の子供と過ごしながらかビハラ活動を実践する先生の話聞き、その体験が自身の幼少期と重なり、共感した。F はこの共感からその先生のようになりたい気持ちになり、ビハラ僧を目指す意志を固めた。

F がビハラ僧になる過程では、偶然僧侶になる時期とビハラ活動が始動するタイミングが一致したのもあるが、より重要なのは F が持っている医療に対する憧れだった。F は多病な幼少期を過ごしており、その経験から医療に対する憧れを持っていた。しかし、病院の職員として働いていた際に、F は逆に医療に対する不信感を持つようになった。その不信感は医療現場の「人を見ない」雰囲気からくるものだが、それは F がずっと持っている医療への憧れ、言い換えれば、F の医療に対する解釈に崩壊の危機をもたらした。F が事務職員を辞め、僧侶になることを目指したことはその危機から逃れるためでもあると考えられる。したがって、この段階での F にとって、ビハラ僧を目指し、ビハラ僧として活動することには己の医療に対する積極的な解釈を守るための活動という意味が含まれていたと考えられる。F にとって、医療への憧れは人生における大切な一部であろう。

5.4.4 あそかビハラ病院での活動の初印象

ビハラ僧になった後、F が最初に活動したのはあそかビハラ病院ではなく、大阪府にあるとある高齢者施設だった。そこでは F は前任のビハラ僧の後継に選ばれ、ボランティアとして現場に入ったのだが、元々お寺発祥の施設のため、宗教者に対する理解度と受容度が高く、宗教者として溶け込みやすい環境だった。そこで二年半ぐらい活動した頃に、再び同じビハラ僧の先輩から、あそかビハラ病院への転属を提案され F はそれを快諾したことから今の活動が形式的に始まったという。ボランティアから形式的に雇われることで活動の性質が変わるとともに、F が最もショックを受けたのは高齢者施設と病院と間の環境の変化だった。当時の印象についての会話が抜粋 F-5 である。

【抜粋 F-5】

W：あそかに来られて最初の印象は？

F：そうですね。ここあそかって特殊な現場で、病院なんですよ。病院独特な、閉じられた世界のなかで、この病院のルールがやっぱあって、それが一番驚きました。

W：「閉じられた世界」という表現ですが、それまでの現場（高齢者施設）とは違うんですか。

F：高齢者施設も閉じられた世界と言えば閉じられた世界だけど、病院ってそこからさらに専門性がすごくあって、特にこのあそかビハーラ病院って死に行く人達が入ってくる病院なんで、高齢者の施設でもね、いずれ亡くなっていくんだけど、なんか生活する場所と、その高齢者介護の現場と、医療の現場と、このなんか違いってのがすごく驚きましたね。

高齢者の施設は、利用者さんのお話を聞いたり、利用者さんの傍にいてだけで喜ばれるというかね、ここは病院って、医者が居て、看護師が居て、薬剤師もいて、どうしてもその人達が患者さんをみる、主役はもちろん患者さんですけど、その医療の人達の中に交わることの難しさってのはすごく感じました。お話を聞くだけではちょっと済まない、終わらない、もうちょっとなんか医療者が何を考えているだとか。そういうのも理解しておかないとそのボランティアってすごく難しいなって思いましたね。この現場は。

W：扱っている対象者が傾聴ボランティアだけではなくて、メインがあくまでも医療従事者の方達だから一般の傾聴ボランティアの場としての違いがあるわけですね。

F：すごくデリケートな現場だからね。一步間違えると命に関わる、まあこれは高齢者施設もそうだけど、やっぱり専門性がすごく必要なのかな…

-こっちゃんともう、亡くなる方達がいるなかで、もう傍に居るだけでもストレスを与えてしまうのですね、お話を聞くだけでは、喋ること自体がしんどいという、そんな人達の中に入って行ってお話を聞くという事が医療者からして見ると独りよがりのように感じるんですね。そういうところがあるので、自分のやりたい思いが強い人はこういう現場に向かないのですね。

W：最初に無心って仰いましたね。

F：はい。自己主張が強い人とか、人の役に立ちたい、少しでも何かしてあげたいとか。そういう人はこの現場に向かないかもね。

この抜粋では、Fは「閉じられた世界」を用いてビハーラ病院での環境の特徴を形容した。筆者はこの表現の具体的な意味を追求したところ、Fは病院で活動する専門性を指摘し、高齢者施設での活動との大きな違いとして、単純に寄り添うだけではならず、現場の医療従事者と協力し、その輪の中に入ることが必要であり、それが困難であることを話した。筆者はこの違いに対して同意を示したが、Fはさらに病院という現場では普段通りの傾聴活動はかえって医療者に「独りよがり」の印象を与えてしまい、ボランティアの立ち位置が難しいことを語り、専門性と無心であることの必要性を強調した。

あそかビハラー病院という新しい活動現場の初印象に関する F の話の中心は医療現場という「専門性」にあった。高齢者施設での活動経験があったからこそ、F にとって病院での活動はより異質なものとなり、適応が必要だと認識された。筆者の調査に応じた時点では F は既にこの葛藤を克服し、ビハラー僧として無心であることの重要性を主張できるようになったが、ビハラー僧として「人の役に立つ」ことを目指した現場に入った当時の F は適応するのに大きな努力をした。抜粋 F-6 がそれについての F の話である。

【抜粋 F-6】

W：では、ご自身もショックを受けて、適応するまでかなり時間がかかりましたか。

F：ものすごく時間かかりましたね。自分もやっぱ失敗したことがありますし。自分がいいと思ったことが相手にとって悪いという事もあるので。

—例えばお散歩行きましようって、そこの空気吸いに行きませんかって言って散歩に連れて行っただけど、実際本人は行きたくなかったとかね。実際は誘われたから断りにくくて。

W：気付きにくい力関係があるのですね。

F：どうしても言われると断りにくいみたいな関係があるので、そういう自分の思い込みというか、自分の思いだけで関わって、返って実は相手の思いには沿ってなかったんだよね。…医療者からも言われたりしたし。何回もありますよ、本当。

…

W：こちら側から行動するようになっていう仕組みはあるのにこちら側の感情を出さないようにしなければならないところに難しく感じたのでしょうか。

F：もちろん難しく感じるんだけど、でもいずれにしろ今私が大切にしているのは自分が何をしたいのかじゃなくて、相手が何がほしいのか。それさえブレなければ…何もできなくたっていいじゃないかな。何をしなきゃならない、役に立たねばならないじゃなくて、元々何もできない人間だという自分の受け入れってすごく大切やなと思って。

抜粋 F-6 では F は現場の違いによって遭遇した失敗とそれを乗り越えることについて語った。筆者が適応するまでの時間を聞くと、F は時間だけではなく、当時の失敗の具体的な経験まで語った。筆者がさらに追及すると、F は医者からも指摘されたことを語りながら、「思い込み」からの行動の危険性を指摘した。その後の会話で、筆者はビハラー病院という現場での活動の難しさを理解し、F の意見を求めたが、F は難しいことに同意しつつ、この経験を通して「人の役に立つ」ことができない自分を受け入れることができた話し、自分の心理状態を調節することでこの葛藤を克服したことを示した。

ビハラー病院に來た当初の F は「閉ざされた世界」にショックを受け、現場の「専門性」に追いつけずに失敗を何度も経験した。しかし、F は諦めることなく、最終的には「何もできない」自分を受け入れることでこの差を乗り越え、活動を継続させた。ここでは、F は神戸の病院で事務職として働いていた時期と同じすぐ葛藤を経験するのだが、神戸の病院では医療現場全体の雰囲気理想と違ったのに対し、F の認識のなかではビハラー病院での葛藤は己の現場に対する理解不足に起因するものであり、「人の役に立つ」ことや F

の医療に対する憧れとの矛盾がなかった。そのために、ビハラー病院での活動はFのなかでは挑戦するのに値する人生の自己実現における大切な活動として定義付けられていたと考えられる。

5.4.5 それ以降の葛藤と活動を継続する要因

終末期医療現場での活動は、精神的なストレスをもたらしやすい。その活動を長期間的に行う場合となると、ストレスが蓄積し、最終的に爆発する可能性も想像しやすい。実際、Fは活動に参入した時から、活動の難しさを感じていた。それでもFは十年以上ビハラー病院での活動を従事してきたが、その過程のなかで辞めたい思いと如何に向き合ったかを明らかにしたのが次の抜粋F-7である。

【抜粋F-7】

W：こっちの環境が変わりすぎて、現場間の落差によってもたらされた葛藤とか、やめたいとお考えになったことはありますか？

F：やめたいなと思ったことは何度かありましたけど、でも必要としてくれる人が患者さんの中にいるってのも確かでしたし、やっぱり私は部屋行くと、手を握って、話さない方が居てくれたりとか、やっぱり必要とされないと、必要としてくれる人が居るから続けてたんすよね。それは患者さんに出会ったり、スタッフ、医療者からも「居てくれたら助かる」って言われたからこそ続けられたんだと思うんですよね。

W：具体的なやめたいとなるような状況をお教えいただけないのでしょうか。

F：ここ患者さんが亡くなるので、結構入れ替わりも激しいので、深く関係性を結んだその人が亡くなるという、そんな繰り返しなんですよ。

F：せっかく仲良くなれたと思ったら、いつなのかは分からないし

ええ、それがすごくしんどくて、部屋いくのもしんどいなと思って、新しい繋がりを作ること自体もしんどくなってしまふ。

W：その際にどう対処してこられたのですか。

F：やっぱり助けてくれるのがスタッフなんです。スタッフが励ましてくれるんですよ。これ一人でやってたら多分できなかったと思うんですよね。仲間がいるからできるのであって、こういう活動をするのによく言われるのが、「人を支えようとするほど、誰かから支えられなきゃならない」というね。ボランティアする人がボランティアされないといけないんですよね。

この抜粋では、まず筆者がFの活動を辞めたい思いについて問うた。これに対し、Fはその思いが存在したことを肯定したが、その度に自分は自分を「必要としてくれる」患者と現場の他の医療従事者に支えられたと述べた。筆者が具体的エピソードを求めたところ、Fは終末期現場ならではの、患者の入れ替わりの激しさと患者の死に直面する頻繁さについて言及し、その際の苦しい思いを表現した。これを聞き、筆者はさらにこういった状況での対応について質問したが、Fは対応におけるスタッフの励ましの大きさを指摘し、己

のボランティア活動が現場の他のメンバーによって支えられているからこそ続けられたと主張した。

F はビハーク病院で色んな困難にあったが、その度に真摯な態度で挑み続けてきた。その結果、F は現場の患者と医療従事者に受け入れて貰うことに成功したが、それが返ってF が活動を辞めたい際に引き留めてくれる理由となった。その時点で、F のなかでは、ビハーク病院での活動は「人の役に立つ」ことを望む自身だけではなく、活動の現場で繋がっている他者との関係性を維持するものにもなっていると考えられる。F が他のメンバーを重視する思いは、彼の活動での心得にも反映されている。

【抜粋F-8】

F：あの、ここで働いて一番重要だと思ったのは、例えばこういう活動、ボランティアにしろ、ビハークにしろ、対象にするのは患者さんとか、医療者さんですよね、でそんな方達とどう信頼関係を結ぶかってそういうことを考えてるんだけど…で何よりも大切なのはこの施設で働いているスタッフとの信頼関係、コミュニケーションをどうするか。そこが一番重要だと私は思ってます。

W：お互いカバーし合えるような関係ですか。

F：カバーし合うのもそうだし、向こうがこっちを信頼してくれたら、部屋にも行きやすくなるし、医療者から相談を受ければ、患者さんのことで薬等を持てれば部屋に入れるので、医療者からいかに信頼関係を結べるかをすごく私は大切だと思っているんですよね。患者さんやご家族との関係を大切にするのはもちろんだけど、何よりも大切にしなければいけないのが現場で働いているスタッフ。

W：長く一緒に居られる環境自体を整えることなんですね。

F：そう。ボランティア活動が長く続かない理由の一つってそういうスタッフとの関係性が構築できないってあるでしょう。だから、利用者さんと話をして帰っていく、その場で関係になってしまうのが多いので、なかで、施設で働いているとどんなコミュニケーションが必要なのかが一番大切なんですよ。

…こうして僧侶として働いていると、その先生先生といわれるんですよね、そうしたら介護職員とちゃんと違った目で見えてくれるという、それはすごく関わってて感じてたんですよ。

抜粋F-8 は筆者が現場で活動を続けるコツについて問うた後の流れで発生する対話だが、F の回答の中心には常に現場での他者と「信頼関係」があった。F はまず一番重要なこととして現場にいる他者との「信頼関係」だと指摘し、そのなかでも、現場での活動を円滑に進ませるために何よりも現場のスタッフを大切にする必要があると強調した。筆者はその語りの中には自ら活動の環境を整えたいF の思いを感じたが、F はこれを肯定し、ボランティア活動を継続するために信頼関係が必要だと主張した。最後に患者からも「信頼関係」によってより親しく、他のスタッフとは別の関わりを持てるようになることを語った。

Fがこれまで活動を辞めずにいられたのは現場の患者さんと医療従事者による支えである。このことをFは深く認識しており、だからこそこうした現場での他者との「信頼関係」の構築に力を注いでいる。現在のFにとって、ビハラー病院での活動はそれを維持するために自分が何か働きたい対象であり、人生の一部として位置付けられているだと考えられる。また、この中には、現在の活動環境での現実とFの医療への憧れの同調関係も見られた。

5.5 まとめ

本章では雇用関係が発生する有償ボランティアの現場を二つ取り上げ、有償ボランティアの概念とそれぞれの現場の特性をまとめた上、現場で長期的な活動を行っているボランティア2名を対象に、彼らのライフストーリーを振り返るとともに、彼らのボランティア活動に対する意味づけを現象学的還元の手法で分析した。

まず5.3、5.4から得られたEとFそれぞれの長期的なボランティア活動を行う過程中的意味づけとその変容を以下のように示す。

Eのなかでは、ボランティア活動は最初では野外活動と子どもに対する興味、関心に近づく活動として見られ、「ボランティア」に対する意識はそこまでなかった。その後も、Eはボランティア活動を生活の一環として継続していたが、それはどちらかと言えば自己実現をする目的であった。Eのボランティアに対する意味づけが大きく変容したのはNVNADで活動し始めた時期で、Eのボランティアにおける利他性と公共性の側面は被災地での衝撃的な経験を通して強く反映されるようになった。そして、長期化の活動に伴い、Eはボランティア活動に対して責任感を持つようになり、ボランティアはEが自ら発展させていく必要があるものとして意味づけられた。しかし、意味付けに変容が起きたとはいえ、Eのボランティア活動の根底には、最初から現在までずっと子どもと関わりたいという興味が軸として潜んでいた。

Fのなかでは、ボランティア活動は最初の段階では人助けを通して職場で傷ついた己の心を守るための活動として意味づけられたが、その奥には、Fが幼少期から持っている利他的行動への憧れが働いており、Fの活動に対する意味づけの中には理想像に近づくための行動の側面もあった。そして、Fは幼少期の経験から医療の現場に対する憧れも持っており、病院、高齢者施設で活動するビハラー僧を目指す際には、ボランティアはこの憧れを実現するための手段としても意味づけられた。あそかビハラー病院での長期的活動と葛藤として、Fはボランティア活動を己の人生の一部として見なすようになり、この際の活動の意味づけからは自己防衛する意味合いが薄くなり、自分が中心として関わり、活動自体の継続に貢献する必要があるものとして捉えられていた。

EとFのボランティア活動に対する意味づけの変容過程には活動を貫通する軸と有償への態度の二点で類似性が見られた。

EとFのどちらでも、ボランティア活動に関わり始めた時期から現在までの全ての時期において同じ軸の元で己の行動を決めてきた。Eの活動における軸は「子どもと関われる」

ことである。E は大学時代からキャンプリーダー、YMCA の教師、レクリエーションなど様々なボランティア活動を行ってきたが、これらの活動は全部子どもに何かを教え、一緒に時間を過ごすような活動だった。最終的に E は NVNAD の職員として活動の内容を定着したが、E が NVNAD に参加し、そして現在まで辞めたい気持ちを一度も経験しなかったのは活動の内容のなかで子どもと関わるができる部分にあると本人は考えている。F はお寺に生まれ、他人を助けることに尽力した父親の姿を見ながら成長し、そのなかで理想の人物像を見つけた。また、幼少期の F は多病のため、医療によく助けられることから医療現場にも憧れを持つようになった。この二つの思いが合わさり、医療現場で「人の役に立つ」という思いが形成するが、F が公務員として病院に就職する際も、それを辞めてお坊さんとなり、ビハーラ僧として活動することを決めた際にも、この思いを叶いたいという望みが F の選択に働きかけていたと考えられる。内容こそ異なるが、E も F も長期的なボランティア活動を通して己のストーリーを延伸させようとしている。

ただし、軸の由来まで考察すると、E は自身の興味を中心に選択を起こしてきたのに対し、F は自身の憧れを現実から守り、追求する思いから選択を取ってきた、この部分では相違が見られた。そして、こうした相違は二人の現在の活動への定義付けにも影響している。E は NVNAD での活動を己の人生の一部と見なし、自身はボランティア活動の課題の解決に関わるべきだとより未来志向的に捉えているのに対し、F は同じくビハーラ僧を人生の一部だと認識しつつも、未来を向けて何かを成し遂げるのではなく、仲間を含め、今ある活動自体を守ることに主眼を置いていた。こうした違いは二人の活動の環境の相違にも起因している。E は様々な現場に赴き、その需要に応じた一定期間内(被災地であれば数年、防災活動であれば数日)の活動を主体に行ってきたが、場所が変わる度に関わる相手も大きく変化するため、E にとっての「現場での縁」は、ボランティアと様々な被援助者という広い範囲の対象を含めた概念だった。一方、F はあそかビハーラ病院という一つの場所のなかでずっと活動が続けてきており、同じ活動に関わっているビハーラ僧と病院のスタッフとの接触頻度も高ければ、それらが入れ替わる頻度も低い。そのため、F にとっての「現場での縁」はより明確な個人に向けるもので、F はそういった人達との「信頼関係」を活動における葛藤を乗り越え、継続させる動機としており、これを守る方向に思いを固めた。

E と F のもう一つの類似点は意味づけの中に有償ボランティアの有償性について深く拘らなかったことである。従来の考え方では、「有償」になることはボランティアと被支援者のボランティア活動に対する見方を変化させ、活動の継続に有利、不利の面のどちらかに働きかけた(安立, 2022、小澤, 1998)。しかし、少なくとも E、F の語りやそこから還元した活動の意味づけのなかで「有償」、または「雇用」という活動の性質について言及はほとんど見られなかった。E は現在こそ有償で活動しているが、過去に無償で活動する際にはむしろ無償で活動することに対して積極的な考えを持っており、それがその後の活動のなかでも変容は見られなかった。二人が活動の葛藤、またはそれになり得るものとして考えていたものが、それぞれ子どもとの関わりの有無と現場での喪失体験、失敗であり、

どちらも本人の関心に繋がるものだった。筆者はこうした結果が見られたのには三つの要因があると指摘したい。一つ目は、E と F はどちらも己の関心の軸に基づいて活動しており、活動を人生そのものとそれにおける自己実現に組み込んでいることである。二つ目は、二人が活動している災害支援現場と終末期医療現場のどちらも人の生死に関わるいわゆる緊迫性のある現場であり、そこでは共感性の高い個人の自己利益に対するこだわりは現場の衝撃的な体験や苦しみに圧倒されることである。そして、最も重要な要因は、むしろ指摘されなかった活動の「有償」性である。E と F は、活動の有償性によって日常生活の精神的、経済的な基盤(F は住職でもあるため一部のみだが)を提供されている。そのお陰で、二人は無償ボランティアよりも活動の長期化とともに蓄積されていく時間的、経済的、心理的なコストの影響を受けにくくなり、活動自体、または活動の将来を展望する事に注目し続けることができたと考えられる。ただし、この活動継続と活動の「有償」性の関係性は必ず必要なものではない。日常生活の基盤を支える経済力、人間関係などをボランティア本人が持っていればその必要性はなくなるのだろう。したがって、本研究ではEとFを有償ボランティアの枠で捉えてきたが、彼らの現在の有償ボランティア活動の継続において、重要なのは活動の「有償」性よりも雇用関係による安定した活動環境だ。

総じて言うと、有償ボランティアとして活動を長期的に行う個々人の活動継続動機には「現場での縁」、「集団性」、「自己効用感」と「業務内容」に関わる要因が見られた。これらの要因の現れ方は、研究対象者ごとで相違する場合があります、本研究ではEは活動で「子どもと関われる」「楽しさ」から自己効用感に傾いているのに対し、Fの活動継続には仲間との「信頼関係」である「集団性」と自身の憧れに合う「業務内容」が強く影響を及ぼしていた。また、捉え方に分岐が存在するものの、EとFは両方ともボランティア活動を人生のストーリーの一部として意味づけており、そのために活動の参加理由である「知識機能」(E)と「防衛機能」(F)は活動継続の理由としても効果を発揮していた。そして、二人の主観からは「有償」であることの活動継続との有意な関係性が見られなかった。筆者は活動における雇用関係がもたらした比較的安定な活動環境が彼らの活動そのものへの情熱と活動の継続を根底から支えていることを指摘したい。

第六章 ボランティア活動が「日常」に変化する道程

本稿では、これまで災害ボランティア活動と終末期ケア活動に関わる四つの現場（救援隊、センター、NVNAD、あそかビハーラ病院）で長期的なボランティア活動を行ってきた計 6 名の調査対象者のライフストーリーを整理し、分析を行った。本章では、6 名の対象者のボランティア活動に対する意味づけとその変容プロセスを包括的な視点から考察し、個々人の意識から長期的に活動するボランティアの特徴を把握する。

その予備的作業として、まず筆者は各研究対象者のライフストーリーとその分析のなかでの活動の継続要因に繋がる意味単位をまとめた（表 5）。

	個人的要因	参加動機要因	状況での認識要因
A	「信仰の実践」 「利他心」 「親からの理解」	「衝撃的な体験」 「ロールモデル」 「価値機能」 「キャリア機能」	「好意的な態度」 「実践での不満」 「教主の承認」 「利他行ネットワーク」 「信頼関係」
B	「周りからの理解」 「利他心」 「家庭環境」	「好ましい援助体験」 「衝撃的な体験」 「価値機能」 「自己効用感」	「実践での不満」 「ロールモデル」 「人生の軸」 「信頼関係」
C	「孤独感」	「衝撃的な体験」 「自分探し」 「価値機能」 「保護機能」 「社会機能」	「受け入れ」 「他のボランティアとの関係」 「相談者との共有」
D	「利他心」	「衝撃的な体験」 「保護機能」 「価値機能」 「強化機能」	「受け入れ」 「自分の人生での一部」 「他のボランティアとの関係」 「スーパーバイザーの存在」
E	「興味」（「子どもと関われる」） 「宗教的な体験」	「自己実現」 「知識機能」 「価値機能」	「活動で見つけた課題」 「活動に対する責任感」
F	「親の利他的行動」 「医療への憧れ」	「衝撃的な体験」 「価値機能」 「保護機能」	「信頼関係」 「活動に対する責任感」 「役割意識」 「実践での不満」

表 5 各研究対象者の活動継続要因一覧

上記の要因は、個々の対象者を取り巻く環境とその経験から表現の仕方が多岐に渡っており、この表現の多様化は全体像を把握する際の障害となりかねない。ここでは、これらの要因の一部をより捉えやすくするために、先行文献で提示された概念に基づいてさらに整理したい。第一に、A が持っている「信仰の実践」に対する強い意志、C の語り全体の中から読み取れる「孤独感」、E の「子どもと関われる」ことへの執着と F の「医療に対する憧れ」は、いずれも彼らがボランティア活動に関わる以前から強く意識しており、人生の一部として意味づけているものである。本稿ではこうしたボランティア活動の有無に関わらず対象者の人生に大きく影響している要因を「個人ストーリーの延伸」と定義し、「状況での認識要因」の一カテゴリとみなす。第二に、対象がボランティア活動のメンバー同士か被支援者かに関わらず、主に E 以外の対象者が語りのなかで提示した現場での他者との「信頼関係」や「他のボランティアとの関係」は彼ら・彼女らの活動の継続に大きな役割を果たしている。本章では、こうした現場でしか構築することができない「信頼関係」を「現場での縁」と認識し、「状況での認識要因」で注目されるべき一カテゴリだとみなす。また、C と D は自身の孤独感や迷い、自死に対する世間一般とは違った考え方を組織から受け入れられたことを活動継続の理由としており、F も組織内での役割に応じたビハラー僧への他の職員によるサポートについて言及している。こうした要因は、彼らが所属する組織による情緒的ケアとして見られ、桜井（2005）が提示した「組織サポート」という要因に帰結できる。

獲得の時期や効果の強さには差異と変化があるものの、表5で分かるように、長期的なボランティア活動の参加者は同時に複数の継続動機を有している。例えば、筆者が調査を実施した時点では、A の救援隊の活動継続は主に「信仰の実践」、被災者との「信頼関係」や「ロールモデル」によって維持されている。この知見は、桜井（2002）がボランティア活動の参加動機へのアプローチ方法を論じた際に提示した「複数動機アプローチ」によってある程度説明できるだろう。言い換えれば、対象者の活動の継続要因は複合的であり、筆者が考察する際には、ある要因の有無に留まらず、個々の対象者の中におけるそれぞれの要因の重要度や扱いの相違にも留意すべきである。

本章では、筆者はこれから本研究の調査で確認された独自の要因である「個人ストーリーの延伸」、「現場での縁」について説明を行い、「宗教的な関わり」の効果を考察する。その上で、それぞれの対象者の語りから反映された〈贈与のパラドックス〉への超克を検討する。

6.1 人生のストーリーとともに綴られたボランティア活動

長期的なボランティア活動の参加者のなかでは、活動を人生の一部としてみなしている者は少なくない。実際、本研究のなかでも、インタビューにおいて B の「人生の軸」や C の「自分の本流」のような、ボランティア活動を自分の人生の一部として意味づけている表現がよく見られる。しかし、それぞれの対象者のライフストーリーを最初まで遡った場合、こうした意味づけは結果こそ似ているものの、対象者個々の主観のなかでそれがなさ

れるまでのメカニズムには相違が見られる。最も顕著な違いとして、A、C、E と F は現在のボランティア活動以前からボランティア・社会貢献活動自体、または現在ボランティアとして長期的に活動している分野に関する課題を持っている。一方の B と D は、最初のボランティア活動を巡る「衝撃的な体験」により活動に長期的に関わりたいという思いを獲得し、活動するなかでこれを人生の一部として意味づけたのである。筆者は、この二つの類型を「個人ストーリー」タイプと「衝撃的な体験」タイプに分類した。

「個人ストーリー」タイプでは、ボランティアはその主観的な意識のなかでこれまでの人生を一貫して抱えてきた課題・テーマが存在しており、彼らが現在従事しているボランティア活動はその課題に対応する、あるいは関わる手段の一つとして絶えず意味づけられている。さらに、この意味づけのなかでは、「自発性」、「無償性」、「公共性」などといったボランティア活動が本来有している性質は後景化し、背景または観察された結果として彼らの活動に関与している。

具体的に見ていくと、A、C、E、F はそれぞれ実際の困っている人の助けになる「信仰の実践」、「生きる意味」が問われる「孤独感」、興味である「子どもと関われる」こと、そして幼少期の多病の経歴から抱いた「医療への憧れ」である。これらは対象者らの人生を貫くテーマであり、その重要性はそれぞれの対象者の語りに高い割合で関わっていることから見て取れる。例えば、A の「信仰の実践」に対する熱意は A が災害ボランティア活動に参加したきっかけ、活動、人生における「ロールモデル」、活動での葛藤への超克などの対話から読み取れた（抜粋 A-1~A-5）。また、C の友を亡くした経験、センターに受け入れられた経験や相談者から人生の一部を譲り受けた経験などほとんど全ての語りのなかでは、「孤独感」は常にその背景として存在感を示していた（抜粋 C-1~C-7）。E に関しては己の興味である「子どもとの関わり」は現在活動している団体に加入し、長年辞められなかった理由として捉えられている（抜粋 E-4、E-5）。そして、F はほとんど全ての職場、活動の場での人生の経験を医療に関連する施設に結びつけている（抜粋 F-2~F-6）。こうした関わり方は、それぞれの対象者が活動のなかで直面する葛藤への対応にも寄与している。具体的に言うと、対象者らの「ボランティア活動を己の人生を生き抜くために必要的だ」という捉え方は、彼らの活動そのものに対する責任感を引き起こしており、その活動のなかで困難に遭遇した場合、避けるのではなく、活動を継続させるために自らの力を注いでそれに立ち向かう選択を取る確率が高くなる（抜粋 A-5、C-8、E-7、F-8）。言い換えれば、この対象者らの認識のなかでの人生のテーマに変化が起きず、現在のボランティア活動もそれに対応する手段としての役割を保っていれば、活動の継続は保証されると考えられる。

特に活動の継続に寄与する過程のなかでは、対象者らのボランティア活動に対する人生のストーリーに関わり、自らが抱えているテーマへの対応という意味づけは、多くの場合それ自体としてではなく、よりわかりやすい「実践での不満」、「他のボランティアとの関係」といった要因を補強する背後の論理としてその効果を発揮していた。つまり、この意味づけ自体は非表出的な側面を持っており、いわば Arzu ら（2015）の言う「暗黙的な

動機付け」として活動の継続を支えている。Arzu らは暗黙的な動機付けはそれ自体としてではなく、明示的な動機付けを陰から補強する形でボランティアの持続的活動に寄与していると指摘している。

対象者らの継続的な活動を支え続けてきた人生のテーマだが、その多くは挫折の経験に由来している。時期から見れば、C の寂しい思い（抜粋 C-1）と F の多病（抜粋 F-3）はともに幼少期、青年期の経験に関連するが、F はそこからさらに医療現場で多くのスタッフから助けられたことを経験していることから、そのテーマには「好ましい被援助体験」（高木・玉木, 1996）による影響が見られる。一方、A は 30 代前後で金光教の教師になった時に、目指そうとしている宗教者像と現実との大きなギャップにショックを受けて、そこから「信仰の実践」により拘るようになった（抜粋 A-3）。ただし、E の人生のテーマは挫折ではなく、むしろ積極的な意味での興味から生じている（抜粋 E-1）。また、表 5 で示しているように、A、C と F は「個人ストーリー」タイプでありながらも「衝撃的な体験」をし、それを活動に参加した要因として提示している。これに対し、筆者が指摘したいのは、ここでの「衝撃的な体験」はこの 3 名のテーマへの対応を変えたり、現在のボランティア活動に繋がったりしたもの、彼らの人生のテーマそのものを変える、または新しいテーマを付与することには至らなかった点である。つまり、「個人ストーリー」タイプのボランティアにとって、「衝撃的な体験」は「個人ストーリー」の一部として解釈されうるのである。

「衝撃的な体験」タイプでは、ボランティアは主にショックな体験から受けた感銘、衝撃によってそれまでの人生の軌跡を一変させ、ボランティア活動への関心と長期的な活動定着への意思を獲得するのである。例えば、D は活動に関わる前に肉親を自死で失ったことからショックを受け、精神が迷走している状態のなかで偶然センターに出会い、そのメンバーによって精神ごと受け止められた経験から活動への参加意欲を獲得している（抜粋 D-1、D-2）。一方、B は初めての災害ボランティア体験と救援隊との初めての活動体験中に被災地の状況からショックを受け、救援隊の活動に参加する意欲を得ている（抜粋 B-1、B-2）。B と D は、現在こそボランティア活動を人生の一部として意味づけているが、衝撃的な体験が起こるまでは興味をある程度持ちつつもこれとは無縁の生活を送ってきた。いわば、「衝撃的な体験」は、対象者らの人生を大きく変化させたと考えられる。また、このタイプの対象者らがボランティアを人生に結び付けるプロセスの特徴として、「気付いたら」という表現がよく見られ（抜粋 B-4）、活動組織での居心地良さの重要性（抜粋 D-5）も指摘されている。

さらに後述するが、活動の際に所属している組織と「現場での縁」への拘りはこの「衝撃的な体験」タイプでより強く反映されており、この現象に対して、筆者は対象者らが自身の活動継続の意思を補強するために現場で関われる他人との関係をボランティア活動のテーマにしていると指摘したい。

したがって、「個人ストーリー」タイプの対象者らのなかでは、人生を通して関わり続ける課題という「本流」が存在し、彼らの「内的時間」の流れを常に決めている。「ボラ

ンティア」はあくまで一要素、一支流としてその流れの中に加わったに過ぎない。これに対し、「衝撃的な体験」タイプの対象者らにとって、「ボランティア」は「衝撃的な体験」とともにもう一つの主流となり、それぞれのなかで流れてきた元々の本流と合流して、新たな人生の本流として捉えられているのである。

6.2 活動における他者との相互関係

従来のボランティア活動の継続要因に関する議論のなかでは活動参加動機として利他的な動機が頻繁に取り上げられるが、継続動機の場合、利他的な動機の効果は減衰し、利己的動機がより目立つようになる（Oda, 1991; 桜井, 2005）。そのなかでも利己的な動機としてよく指摘されるのがボランティア同士（Field et al., 1993; 稲場, 1998 他）や被支援対象者（高木・玉木, 1996; 陳, 2022 他）の両方を含めた、活動での他者との相互関係の構築と維持である。本研究においても、活動の現場での他者との関係性は対象者らのインタビューのなかでよく取り上げられており、本稿ではこうした要因を「集団性」「現場での縁」というカテゴリでまとめている。

「他のボランティアとの関係」、「他のスタッフとの関係」や「利他行ネットワーク」に代表される支援者間の相互関係は「集団性」と「現場での縁」のなかで最も普遍的に認められており、活動の継続動機として最もわかりやすいものである。ボランティアは、同じ現場で活動する他のボランティアと連携することで活動をよりスムーズに展開することができ、その連携を通じて顔なじみの関係となる。こうした関係は同じ現場での継続活動に参加する際の安心材料としての機能を発揮し、活動継続の選択肢をとりやすくしている。実際、本稿においても、支援者間の関係はほぼ研究対象者全員によって活動継続の要因とみなされ、筆者はこうした関係を「信頼関係」だと捉えた。そして、これらの「信頼関係」は対象者らそれぞれの意味づけの方向性のなかで個人差が見られた。具体的に言えば、筆者が調査を実施した時点では、A と C はそれぞれ救援隊とセンターのリーダー的存在であるため、二人のなかでは組織の中の他のボランティアは支えてくれる、信頼できる「仲間」として意味づけられていた（抜粋 A-8、C-8）。一方の B と D はそれぞれ A と C のサポート役として活動に関わっているため、二人のなかでは他の「仲間」たちとの支え合い以外に、リーダー格である A と C との関係も活動を継続していく上で重要なものであった（抜粋 B-6、D-7）。その他、F の現場での他者のなかでは、ビハラー僧はもとより、終末期医療現場の性質上、医師とスタッフとの調和的な関係が F が活動中の葛藤を乗り越えた一因となっている（抜粋 F-7）。また、A は組織内のみならず、組織外の現場で出会った縁も大切にしており、それによって組織自体の活動のレベルと社会的貢献度を引き上げている（抜粋 A-8）。

支援者間以外では、活動の現場にいる被支援者との「信頼関係」も「現場での縁」として一部の対象者の活動の継続に貢献している。本稿の対象者のなかでは主に A、B、C の 3 名のライフストーリーからこうした「信頼関係」による効果が認められた。具体的には、A と B は救援隊での最初の災害ボランティア活動の際に被災者の炊き出しとそれを渡した

ボランティアに対する尋常ならぬ感情と反応を受け取り（A の場合は本人が対象ではなかったが）、それまでの人生観を変えるほどのショックを受け、この関係性を構築することを活動の意味と目的としてみなすようになった。二人はその後この「信頼関係」を意識的に構築するようになり、その結果として長期的なボランティア活動の必要性に迫り着いた（抜粋 A-1、B-1、B-3）。特筆すべきなのは、この過程のなかで A と B が最初の活動で被災者から受け取った感激的な感情と反応は、解釈によれば疲弊している彼ら・彼女らをさらに消耗させるものであり、仁平(2011)においては被災者から何かを「奪う」形となった反対的贈与に当たる。しかし、A と B は逆にこれを真摯な態度と対称的な立場から受け止めることで、信頼関係の構築の基本的要素として活動に取り入れた。一方、C は電話相談のなかで相談者の人生そのものをその名前の一文字とともに受け止めた体験により、センターでの活動を人生の一部として認識するようになった（抜粋 C-7）。

全体的に見ると、活動への意味づけを変容させ、活動の継続に影響した要因としてのボランティア同士の「信頼関係」への言及はほぼ全ての活動対象者が行っているのに対し、被支援者との「信頼関係」への言及はほとんど救援隊に限られていた。これは活動の現場と様式といったそれぞれの活動の特徴から生まれた差異だと考えられる。例えば、電話相談はその特徴として一回性を有しているため（長谷川, 1990）、ボランティアは相談者との相互関係が極めて圧縮された時間のなかで、しかも相手の顔、身体が分からない状態のなかでしか構築できず、「信頼関係」に至るのは至難の業である。実際、C は相談者との「信頼関係」を経験したが、その電話は五時間以上かかっていた。一方で救援隊は災害ボランティア組織であり、その活動様式も A が意図的に同じ被災地域を頻繁に訪ね、炊き出しを渡す際は被災者の話をきちんと聞くように設定しているため、元々緊密な関係が生じやすい長期的な災害ボランティア活動以上に「信頼関係」が生まれやすい現場となっていた。

また、上述した「衝撃的な体験」タイプである B と D のライフストーリーを振り返ると、なかでは被支援者、組織の他のボランティアやリーダーである A と C との「信頼関係」を含め、「現場での縁」への言及の割合が他の対象者より圧倒的に多かった。これも留意すべき点だと考えられる。

こうした「現場での縁」による活動への参加、継続意欲の補強は現象学的社会学の視点を導入した場合にさらに分かりやすく説明できる。シュッツの社会的世界の中に存在する他者には共在者、同時代者、後続者と先行者が挙げられるが、他者との相互理解関係を論じる際には「私」と同じ時間、空間を共有し、「私」の身体の現前にある「共在者」が圧倒的有利であった。なぜなら「私」と他者が相互同調関係に近づくためにはお互いが自分の中の流れていく無数の「体験」に「意味」を付与し、それを「内的時間」として摘出した上で共有する必要があるが、「私」と同じ空間、時間を共有する「共在者」は他のものよりも多くの情報を「私」と共有することが可能であるからだ。本稿の文脈に合わせて説明すると、ボランティアと活動の現場における他者は同じ時間、空間を共有した上でさらにお互いの考えや経歴を共有することで「信頼関係」を形成できる。こうして形成した

「信頼関係」では、ボランティアと被支援者はお互いの本流によって関連づけられており、両方はこの関係を求めるために更なる交流を求めるが、それが活動の継続に繋がる。また、この同じ時空間にいるという条件はボランティア間では成立しやすいが、頻繁に入れ替わるボランティアと被支援者の間では相対的に形成しづらい。

6.3 家族・本人の過去のボランティア歴と宗教的な関連による影響

本稿では、筆者はボランティア個々人の幼少期、青年期の経験や個人としての宗教との関わりはボランティア活動に対する意味づけとその変容に明示的、あるいは暗黙的な動機付けとして関わっていると考えている。そのため、調査のなかでは、筆者は現在従事しているボランティア活動と一致するかを問わず、調査対象者らの人生での初めてのボランティア活動についての問いかけを質問項目の中に入れた。また、調査対象の選定時では、宗教関連の組織とそうでない組織を災害ボランティアと終末期現場から一組織ずつ有意的に選出した。本節では、研究対象者らのライフストーリーを考察しながらこの問題に対する検証の結果を示す。

まず、家庭環境についてだが、親のボランティア歴による子どものボランティア活動参加への影響の効果は直近の研究でも証明され、親と子どものボランティア活動参加は正の相関関係にある（Antonia ら, 2025）。本稿の対象者らのライフストーリーからは直接の親族のボランティア活動参加歴に関する言及はなかったが、その変形として 2 種類の体験を指摘できる。

一つ目は親が宗教者の場合である。三谷（2016）は子どもの社会化エージェントとして親族や隣人などを取り上げ、こうした人達の利他的性質の行動またはその宗教観念は幼少期の個々人に影響を及ぼし、ボランティア活動を促進する効果があると指摘した。本稿では、これと似たような表現が B、F の語りから見られた。B と F はともに寺院の出身であり、現在こそ一般の会社の社員と宗教者兼ビハラー僧と全く違う道を進んでいるが、二人はどちらも幼少期に、僧侶である父親からの教えを受けたり、父親の利他的行動を目にしたりすることで「人の役に立つ」という価値観を形成した（抜粋 B-5、F-2）。特に F の場合、就職先やボランティア活動を展開する場所はいずれも介護や医療に関連しており、従事する業務の内容もその現場での人助けであることから、父親から譲り受けた「人の役に立つ」宗教者像が、F の人生のテーマである「医療への憧れ」と結び付くことで、F の人生の選択やボランティア活動の参加と継続に強く影響したのである。

二つ目は親ではなく、ボランティア本人の過去のボランティア活動体験である。このような体験は C と E の語りから見られる。C は高校時代にカンボジアの人を支援するフリーマーケットでのボランティアに一回参加しており、E は大学時代から子ども向けのキャンプリーダーとしてボランティアという形式で一時期活動していた。しかし、C と E のこの体験に対する印象は決して類似したものではなかった。C にとって、初めてのボランティア活動はカンボジア支援のための活動としては成功しているものの、C 個人にとっては人生の課題である「孤独感」を解消するどころか、深まる体験だった。一方の E は先輩から

の誘いで活動に加わったとはいえ、活動内容が自分の興味である「野外活動」と「子どもと繋がる」ことに合致しているため、この活動体験を積極的に認識することができた。それにも関わらず、C と E は両方ともこうした自身の最初のボランティア活動の体験を通して被援助者（カンボジアの人達・キャンプに来る子ども）との繋がりを感じており、それがもたらした心地良さからボランティア活動に対する認識をより明確かつ積極的なものとして意味づけすることができた（抜粋 C-2、E-2）。つまり、個々人の過去のボランティア活動の体験はその善し悪しを問わず、本人のボランティアに対するイメージの向上とそれ以降のボランティア活動への参加のハードルを下げることに効果を持っている可能性が考えられる。

活動への意味づけに対するもっと純粋な宗教と信仰による影響は宗教者である A と F のライフストーリーから考察できる。先行文献から提示されているように、宗教者が行うボランティア活動（利他的行動）には彼ら・彼女らの「信仰」が深く関わっている（渡辺, 2011; 三谷, 2016）。F のなかでは、現在のビハラー僧は僧侶であり、臨床宗教師である自身の善行の実践であり、仏教に対する信仰は活動の現場での F の行動の基底と原則となっている。前節では F が現場での他のスタッフとの「現場での縁」を大切に扱っていると述べたが、こうした F の態度には正式の医療職員ではない僧侶である自認から培ったものだと考えられる。A の場合、第一節で触れたように、A の活動の軸は金光教の信者としての現代での「信仰の実践」である。A がこうした実践を求めるようになった原因として、教師になる過程で読んだ本の中で書かれていた 3 代目金光様と、はじめての災害ボランティア活動を経て知った有馬実成といった他人のことを全力で助ける宗教者としての理想像に対する A の追求が挙げられる。このような A の活動に対する意味づけは、宗教者の利他的精神の発達要因の一つの「ロールモデル」（稲場, 2011）に当てはまるものである。

最後に、一見すると宗教との関連が薄い C と D のボランティア活動だが、実はその活動の源流から宗教による関わりが見られる。第四章で説明したように、センターは元々大阪のとあるキリスト教会の中にその拠点を置いていたのに加え、その発展の過程でキリスト教の牧師国際ビフレンダーズ組織に所属するようになっていく。つまり、C と D の現在のセンターでのボランティア活動の土壌を整えたのはキリスト教の「善きサマリア人」の思想とそれを実践しようとしたキリスト教徒たちである。

6.4 活動意味の変容のなかで見られた〈贈与のパラドックス〉の超克

本稿は長期的なボランティア活動を行ってきた個々人の視点から、ボランティア活動に伴う〈贈与のパラドックス〉はいかに表れ、そして克服されていくのかを考察するものである。本章では、これまで研究対象者らのボランティア活動に対する意味づけとその変容のなかで強い影響を発揮していた四つの要因を中心に、それぞれの対象者が葛藤を乗り越え、活動の継続動機を獲得するプロセスを考察してきた。本節では、これまでの考察や対象者らのライフストーリーを踏まえ、彼ら・彼女らの葛藤体験における〈贈与のパラドックス〉の関わり方とこれを超克したプロセスの説明を行う。

まずは救援隊という現場だが、A と B のライフストーリーのなかで、本人が意識して提示した葛藤は周りによる長期的活動への反発（抜粋 A-5）、家庭環境の急変（抜粋 A-6）、生活様式の変化（抜粋 B-3）である。これらのなかでは家庭環境と生活様式の変化は極めて個人的な葛藤であり、〈贈与のパラドックス〉と関わる接点自体が見つけにくいいため、検討の対象としては不十分である。残りは長期的活動への反発だが、筆者はこれを加え、対話のなかでは自明的な問題として指摘されることなく対策のみを語られた葛藤として、被災地での長期活動に伴う被災者との関係の破綻を指摘したい。周りによる反発は主に A につきまとう葛藤である。これに関する語りのなかでは、A は金光教内の一部から「もうやめだ、もう終わりだ」と言われ続けた。この出来事のなかでは、東日本大震災の被災地で世間の主流の災害救援活動が沈静化し、現場が落ち着くなかで展開し続けていた A の長期的な活動は、恐らく教内の一部の信者から「偽善」、「経費の無駄」、「自己満足」の活動としてみられ、かえって被災者の自立を妨害するボランティアだと捉えられたのだろう。A 自身も、「いつまで続くか」という問題を抱えているため、これらの声に動揺し、〈贈与のパラドックス〉に悩まされたと考えられる。その時に A を支えたのは当時の教主の「あなたの好きにしたらよろしい」という言葉である。A はこの言葉を聞き、活動を継続したい自身の思いを肯定できるようになり、反発する声を受け流した。ここでは、A は自分の中の〈贈与のパラドックス〉を教主が補強した「信仰の実践」という信念で対抗したのである。

以上は金光教、いわば本部組織側による葛藤だが、視線を被災者に向けた際には被災地での長期活動に伴う被災者との関係の破綻というリスクも見られる。そしてこの葛藤は救援隊の全隊員に及ぶものである。具体的には、災害ボランティアとして長期的に活動するなかで生産される活動目的への猜疑心や、需要と供給が一方通行となる非対称な関係などの例が挙げられる。このような葛藤は被災地でのボランティア活動という文脈でよく言及されるもので、仁平が〈贈与のパラドックス〉を説明する際に提起した贈与行為による「マイナスの帰結」に当てはまる事例である。しかし、A と B の語りのなかではこの葛藤に対する言及がほとんど見られなかった。筆者はこの現象が起きる原因は、調査が実施された時に既に救援隊は「信頼関係」の構築を重んじる活動様式を取っていることにあり、特にその関係構築のなかで被災者の好意を適度に受け取っていることが重要だと指摘したい。第三章で述べたように、救援隊では、自ら志願した被災者も巻き込んで現地のメンバーとして活動を展開している。また、抜粋 B-2、抜粋 B-4 から見られるように、救援隊のメンバーは被災者の好意的な態度に応えることで「信頼関係」の構築を目指してきた。実際、筆者自身の参与観察の経験のなかでも、現場である程度活動を展開しており、被災者との相互関係も友好的なものになった救援隊は、活動の際に被災者が自ら申し出た活動に対する支援（仮設の集会所に宿泊させる、調理場のテントを用意するなど）を適度に受け入れていた。内尾（2013）は被災地での被災者の返礼行為を「反対給付」とし、これを受け取ることによって形成される支援者・被支援者の互酬関係は従来の与える・与えられる関係構築を問い直すことができると指摘している。救援隊も被災者の様々な形の反対給付

を受け入れることによって、被災者との関係を互酬性に基づいたより対称的なものにし、「信頼関係」を構築するとともに贈与行為のマイナスの効果を回避したと考えられる。

反対給付を受け取る行為とは限らないが、CとDがセンターの電話相談で常に意識し、遵守する「ビフrend」も、活動における〈贈与のパラドックス〉を克服するための手段だと考えられる。CとDの語りのなかで表出されている葛藤は主にセンター内の人間関係の難しさ（抜粋 C-7）、相談者との関係（抜粋 D-5）と日常生活との両立（抜粋 D-6）として反映されている。これらのなかでは特にDの相談者との関係から生じた葛藤は贈与行為の負の側面を体験している。Dは電話相談にまだ慣れない頃、センターが自身を「受け止めた」際と同じ態度で電話に対応し、逆に低すぎる姿勢から相談者に怒られた。この体験のなかでは、Dは電話対応のなかで自身の感覚をそのまま相談者に当て嵌めようとし、相手と視線を合わせられずにいたため、相談者にDの気持ちが自分に向いていない（贈与の偽善的な側面）ことを気付かれた。その結果、Dは電話対応の失敗を経験するが、その後バイザーの助言で「ビフrend」の姿勢を把握し、相談者とより対等的な関係構築に成功し、葛藤から抜け出した。この体験では、Dは贈与行為の偽善の側面を、相談者に目を向け接する姿勢を正すことで贈与活動のマイナス的な帰結を超越した。センターの「ビフrend」という態度をとるという活動のスタンスは、国際ビフrendーズを含んだイギリスより発祥した相談電話活動の一連の経験から得た、〈贈与のパラドックス〉を回避するためのマニュアルとも考えられる。

有償ボランティアでは、ボランティア行為に賃金が発生することによって〈贈与〉という行為から〈交換〉の意味が交わり（仁平, 2011）、ボランティアの活動における〈互酬性〉はより明示的な存在となる。この意味では、有償ボランティア活動は純粋な贈与の得体の知れなさが軽減し、一般の視点からより受け入れやすいボランティア活動の様式となっている。実際、本稿の対象となっている有償ボランティアのEとFが提示した課題はそれぞれ自身が従事しているボランティア活動の分野、施設の発展と保護であり、その中には〈贈与〉のマイナス的な側面を観測できなかった。逆に言えば、有償という活動の様式は確実にEとFを長期的な活動のなかで遭遇しそうな〈贈与のパラドックス〉から遠ざけていた。

総じて言うと、個人の視点から見た長期的なボランティア活動における〈贈与のパラドックス〉は活動の内容に応じた様々な様相を呈しており、特に活動の対人の場面で生じやすいが、これに対するボランティアたちの対応のなかでは、組織があらかじめ設定した活動の方針（信頼関係、ビフrend）、活動の様式（有償）によって整った個人の中の倫理付けは極めて重要である。これに加え、宗教者の場合は信仰の実践に対する強い信念もまた〈贈与のパラドックス〉の超克に寄与するものである。

第七章 結論

本研究では、筆者は長期的なボランティア活動における活動参加者の活動の「意味」の生成過程を現象学の視点を加えて解析し、それと活動の継続との関係を明らかにするために、災害ボランティア現場と終末期現場で長期的な活動を行ってきた計 4 つの組織に所属するボランティア 6 名を対象に活動の参与観察(一部)と半構造化インタビューを行った。そして、彼ら・彼女らのライフストーリーを分析し、活動に意味づけするプロセスを明らかにし、その中から活動継続に繋がる要因を摘出した。本章では、まずこれまでのデータの分析と考察に基づいて筆者が序章で提起したリサーチクエスションへの回答を示す。次に、本研究の調査、分析のなかで分析の枠組みとして採用したシュッツの現象学的社会学の理論と方法としての現象学的アプローチの効果について説明する。最後に本研究の限界と今後の展望について述べ、文論文の結びとする。

7.1 リサーチクエスションへの返答

本研究では、筆者は以下の二つの問題意識に基づいて調査と分析を行った。①長期的なボランティア活動を行ってきた複数の個人に注目し、彼ら・彼女らの視点においてボランティア活動に伴う〈贈与のパラドックス〉は如何に表れ、そして克服されていくのだろうか；②長期的に活動するのに彼ら/彼女らはどのような葛藤を経験し、自己変容してきたのか。本節では、この二つの問題に対する返答を以下に示す。

1 点目の問題意識について、まず仁平(2011)において、〈贈与のパラドックス〉は〈贈与〉という行動が持つ被贈与者の反対贈与の強要、偽善的行為や行為双方の平等を脅かす行為などの反贈与的なものになりうる側面を指すものだった。そして、その主な解決案として仁平は〈贈与のパラドックス〉を受け入れる事を社会全体のマクロの視点から提示した。これに対して、本研究では長期的なボランティア活動を行う個々人というミクロの視点から〈贈与のパラドックス〉を観測し、それが如何に乗り越えられ、または回避されたのかを考察してきた。

その結果、長期的なボランティア活動において〈贈与のパラドックス〉は仁平(2011)が提示したように 1990 年代からある〈贈与〉という行為に〈互酬性〉が加わる図式で克服されているが、その具体的な方法論にはボランティア活動の性質や場所によって相違が見られる。例えば、無償ボランティア(救援隊、センター)と有償ボランティア(NVNAD、あそかビハラー病院)を比較した場合、有償ボランティアは賃金という実質の報酬を活動参加者に与え、活動の様式を変えることで外側の認識の中のボランティアが持つ〈純粹贈与〉という側面の胡散臭さを解消している、一方、無償ボランティアは自らの被支援者との接し方を変え、実物に拘らずに感情的に寄り添い、より対称的な他者関係を強調し、求めることで活動中に発生する様々な〈贈与のパラドックス〉に対応している。さらに、組織レベルのこうした対処方法と経験は、活動の長期化とともにそれぞれの組織の活動の規則となり、新しいメンバーの個人レベルの〈贈与のパラドックス〉の克服に寄与している。

そして、無償ボランティアのなかでも、〈贈与のパラドックス〉はそれぞれの組織の活

動内容、場所によって現れ方に変化を見せる。救援隊の災害ボランティア活動の現場では、活動の長期化とともにその中の〈贈与〉の性質への疑問が周りから提示されがちである。特に救援活動が落ち着いた頃(仮設住宅生活が安定するなど)に続々と撤退する他のボランティア組織と比べると、救援隊の〈贈与〉行為は「偽善」、「無駄遣い」、「自立の障害」というラベルをより貼られやすくなる。一方、センターの活動では、電話相談の「即時性」、「一回性」、「密室性」といった特徴から、〈贈与〉が持つ反贈与的な側面はボランティアと相談者の会話の流れから生じるが、その生成プロセスのなかでは相談者以外の他者は存在せず、一旦電話が終了した後からは、ボランティアは〈贈与のパラドックス〉を自身のなかで認識し、対処する必要がある。

次に 2 点目の問題意識についてであるが、長期的な活動のなかでボランティアが経験する葛藤は多種多様である。羅列すると、A が主に経験した葛藤は「教内一部からの批判」と「家庭環境の急変」、B の場合は「生活様式の変化」、C は「組織内の人間関係の悪化」、D は「相談者との関係」と「日常生活との両立」、F は「活動環境の激変」と「患者の入れ替わり」である。E はこれまでの活動なかで感じる葛藤はなかったが、将来を向けた時に「ボランティアの拡散」を自身に取り組むべき課題としている。そして、これらの葛藤を含め、長期的なボランティア活動のなかでの出来事による活動参加者の意識の変容プロセスを考察した場合に、対象者らの中には二つの類型が存在する事を指摘できる。二つの類型はそれぞれ「個人ストーリー」タイプと「衝撃的な体験」タイプである。

「個人ストーリー」タイプでは、ボランティアはその主観的な意識のなかでこれまでの人生を貫く課題・テーマが存在しており、彼らが現在従事しているボランティア活動はその課題に対応する・関わる手段の一つとして絶えず意味づけられている。さらに、この意味づけのなかでは、「自発性」、「無償性」、「公共性」などといったボランティア活動が本来有している性質は弱体化され、背景または観察された結果として彼らの活動に関与している。そのため、「個人ストーリー」タイプのボランティアの活動に対する意味づけは多くの場合自分の持っているテーマに関連づけられるものである。彼らは自身が関わっている活動、または組織に対して主人公意識が芽生えやすく、現状に対する問題意識の元でそれを改善するために活動を継続する。また、前述したように、人生のテーマへの執着は活動での〈贈与のパラドックス〉の影響を軽減する一因となっている。本研究におけるこのタイプのボランティアは A (「信仰の実践」)、C (「孤独感」)、E (「子どもと関われる」) と F (「医療への憧れ」) である。

「衝撃的な体験」タイプでは、ボランティアは主にショックの体験から受けた感銘、衝撃によってそれまでの人生の軌跡を一変し、ボランティア活動への関心と長期的な活動の定着の意思を獲得する。このタイプのボランティアは「個人ストーリー」タイプよりも現場で培った人間関係に拘っており、「現場での縁」を活動の継続要因と見なす傾向が強い。本研究におけるこのタイプのボランティアは B と D である。

そして、この二つの類型の〈贈与のパラドックス〉への対処の方法を個人的レベルから見ると、有償ボランティアを含め、「個人ストーリー」タイプの長期的な活動参加者は活

動における葛藤を人生のテーマと結び付けることで活動中に発生する〈贈与のパラドックス〉も人生の本流の一部として捉え、それを抱え、対応し続けたまま活動を継続することが可能である。これによりこのタイプのボランティアは自身の行動に対する他者から評価の影響を最小限まで抑えることができる。これに対して「衝撃的な体験」タイプの長期的な活動参加者は「現場での縁」に注目し、現場にいる、自分の体に現前する様々な他者との相互関係に拘ることで、現場以外の他者からの指摘を濾過・解消してきたのである。

したがって、長期的な活動を展開するにあたって、ボランティアは組織による理論的・規則的なバックアップを受けつつ、現場における他者関係の構築に力を尽くす事で継続の要因を獲得することができる。また、活動を自身が抱えてきた人生のテーマと結び付く試みも大事である。

7.2 現象学的社会学の視点から見たもの

本研究は分析を行う際にシュッツの現象学的社会学の理論を採用した。シュッツの理論を採用した理由は第二章で既に論述しているが、本節では、考察の結果からシュッツの理論を採用した意味を改めて確認する。

本研究では筆者が最も重要視してきたのがシュッツの他者理解に関する理論であり、そのなかでも「相互同調関係」と「共在者」の概念は調査、分析のなかで大きな役割を果たしてきた。「相互同調関係」では、交流する「私」と「他者」は互いの「内的時間」を共有することでお互いが含まれる新しい「我々関係」を生み出し、経験してきた。ここで重要なのは、「私」と「内的時間」を共有する事ができるのはあくまで我々と時間を共有する「同時代者」と「共在者」であり、なかでも「共在者」は空間まで共有しているため、「私」と最も深い「我々関係」を構築できる。「相互同調関係」の効果は主に調査対象者が現場で直接な交流する被支援者との間や半構造化インタビュー調査の場にいる筆者と対象者らの間に見られた。

7.2.1 「現場での縁」と「共在者」

第6章で提示したように、「現場での縁」は長期的なボランティア活動の参加者が活動を定義付けし、活動の継続要因を確保する大切な手段である。そして、現場にいる以上、対象者らの語りのなかで出てくる者は誰であろうと、ボランティアと同じ時間、空間を共有する「共在者」になり得る。

諸対象者の語りのなかで、「共在者」という概念を最も体現しているのはBの経験である。まず大前提として、Bは「衝撃的な体験」タイプである事から、「個人ストーリー」タイプの他の対象者らよりも「現場での縁」、活動現場で構築される他者との「信頼関係」に拘っている。抜粋B-2ではBの初めての救援隊としてのボランティア体験が語られたが、そのなかでは、Bは初対面でありながら、被災者であるおばあちゃんの家の中まで入れ、災害以降から当日までの話を2, 30分ぐらい話した。Bはこれを「好ましい援助体験」と見なし、それ以降の救援隊でのボランティア参加を決めたのだが、本節で筆者が注目した

いのはそれが獲得するまでのプロセスである。Bが話したその現場では、Bはおばあちゃんと同じ仮設住宅に居るため、同じ時空間を共有している「共在者」として捉えられる。そして、その住宅のなかでおばあちゃんが話したのは災害以降の経験の振り返りである。おばあちゃんはBに知って欲しくてこれらの過去を語ろうとする際に言わば現象学で言う「内的時間」を相手と共有する活動である。Bは相手の聴衆となり、話を聞いていく間に自分自身の意識を相手の本流の中に付着することができ、「相互同調関係」になったと考えられる。こうした関係に置かれている人は、相手と本質的に繋がっているという感覚とともに快感を得ることができる。Bもまた、こうした感覚のなかで被災者と繋がる意味を見つけ、それを救援隊のボランティア活動に意味づけたと考えられる。

このように、「共在者」である条件を満たしているボランティアが「相互同調関係」を求めるのは、本人の主観上では「信頼関係」という目的のためである。しかし、これは同時に彼ら・彼女らが一方的な「贈与」という非対称な関係、パラドックスを、共有された「内的時間」に基づく対称的な「我々関係」へと書き換えるための、ボランティアの無意識的な生存戦略（防衛策）として解釈できる。したがって、電話相談のボランティアであるCとDが電話のなかで「ビフrend」な態度を常に保ち、可能な限り相談者目線に合わせ、「同時代者」でありながらも「共在者」の性質を求めたのもこのためだと考えられる。

7.2.2 筆者が「共在者」であることの意味

インタビューの場では、筆者は時間と空間を共有する「共在者」として研究対象者らに関わってきた。「共在者」という立場、筆者と対象者らをお互いに自分の「内的時間」を共有し(本研究の場合、過去の経験を一緒に意味づけていく)することで、お互いのより立体的な像に近づく事ができ、これによって筆者は相手の暗黙的な動機付けの考察をよりスムーズに行うことができた。

暗黙的な動機付けの解明は特に宗教との関わりについて筆者が追究した際に起きやすい。BとEは宗教、またAは普段の活動のなかで憧れ、あるいは目標として最も取り上げてきたのはシャンティと有馬実成(抜粋A-1)だったが、今回のインタビューでは筆者がそれ以前の状態について疑問を呈した事でAの活動を信仰の面から支えてきた最も深層的な存在である3代目教主がより言及されるようになり、そのお陰で筆者は最終的にAの「個人ストーリー」にたどり着く事ができた。

したがって、長期的なボランティア活動を展開する先駆者、組織側の視点から言えば、活動や人生の経験を振り返らせる/語るイベント、談話を定期的に開催することは個々の参加者に自身と活動との接点、または活動の意味の発見に繋がり、長期的に活動するボランティアの確保に寄与する要件と考えられる。

7.3 本研究の限界と展望

本研究では、仁平(2011)のマクロな視点に対して、筆者はミクロな個々人のボランティ

アの視点から彼ら・彼女らのボランティア活動に対する意味づけとその変容を考察し、活動における〈贈与のパラドックス〉の超克のあり方の解明に成功した。その過程の中で、筆者はさらに長期的なボランティア活動の参加者の活動継続要因をまとめ、「個人ストーリー」タイプと「衝撃的な体験」タイプという従来の研究ではあまり行われていなかった類型論の要因を指摘し、今後のボランティア活動において個々の参加者が長期的に活動するための要件を指摘した。また、活動参加者を支援する組織に対して、本研究は今後のサポートの重心について二つの案を提示した。活動の有償化や現場における「信頼関係」の構築を組織の規則、規定として決めておくこと(〈交換〉による負罪感を組織側で消化すること)と定期的に談話を開催し、振り返りを通してボランティアが活動と自身の生活/人生のストーリーを結びつけるきっかけを与えることである。

しかし、この一連の分析と提案には研究対象者の共通の性質による結論の偏りが見られる。本研究の研究対象者は全て現在も活動を継続している長期的に活動するボランティアである。そのため、個人視点の〈贈与のパラドックス〉はそもそも「乗り越えられるもの」として語られることが前提となっている。実際、仁平(2011)が提示した〈贈与のパラドックス〉の概念にもっとも近い葛藤を直接語ったのはAの「教内一部からの批判」のみで、その他の対象者らの葛藤と〈贈与のパラドックス〉との繋がりには本人の直接の意味づけではなく、それに基づいて筆者が解釈を加わった結果である。言い換えると、マクロな視点では絶えずに議論が重ねてきたにも関わらず、ミクロの個人視点から見た場合、〈贈与のパラドックス〉によって直接にもたらされた長期的活動の葛藤はほとんどないに等しい。この偏りに対して、筆者は長期的に活動していたものの、ある時点をもって活動を辞めたボランティアを今後の考察対象に入れることで本研究の結論の補強を図れると指摘したい。

一方、本研究では、現象学的社会学の視点を分析の枠組みに加えるために、現象学的還元をインタビュー調査のデータへのアプローチ方法として採用した。しかし、従来の現象学的還元の手法が最も良く使われてきたのが解釈学的現象学の分野であり、社会学的现象学、特に他者関係に特化した本研究との適合性には限界が見られた。筆者が特に指摘したいのは本研究の現象学的還元の手順にあるエポケーの項目などの設定は筆者の主観的な判断に委ねることが多いため、本研究の分析結果が研究対象者らの主観に完璧に近づく事はなかった。今後、本研究と類似した視点と手法で個々人の主観の解明を目指す研究がなされる場合、現象学的還元の手順の設定は複数の研究者によってなされるべきだろう。

参考文献

【日本語文献】

- Comte (1844) Discours sur l'esprit positif(=田辺寿利 訳(1938)『実証的精神論』岩波書店).
- Edmund Husserl (著), 長谷川宏 (訳)(1997)『現象学の理念』作品社.
- Edmund Husserl (著), 細谷恒夫・木田元(訳)(1995)『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論新社
- Luhmann, N., 1986, Die Lebenswelt-nach Rücksprache mit Phänomenologien, Archiv für Rechts-und Sozialphilosophie, 72. (=青山治城訳(1998)「生活世界—現象学者たちとの対話のために」『情況』第2期第9巻第1号、情況出版株式会社。).
- Martin Heidegger (著), 細谷貞雄 (訳)(1994)『存在と時間〈上〉』筑摩書房.
- R.D. パットナム (2006) 『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』 柴内康文 訳 柏書房.
- Schutz, A. (1932), Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie, Vienna: Springer Verlag. (= 佐藤嘉一訳(1996)『社会的世界の意味構成』木鐸社).
- , A. (1945)“On Multiple Realities,”Philosophy and Phenomenological Research 5, pp.533-576. (Collected Papers I (『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題〔II〕』) から引用).
- アルフレッド・シュッツ, トーマス・ルックマン (著) 那須壽(訳)(2015)『生活世界の構成』筑摩書房.
- シュッツ・アルフレッド(1996)『生活世界の構成 レリヴァンスの現象学』那須壽, 浜日出夫、今井千恵, 入江正勝 訳, マルジェ社.
- 青山美智代・西川正之・秋山学・中迫勝 (2000) 「老人福祉施設における介護ボランティア活動の継続要因に関する研究」『大阪教育大学紀要第IV部門: 教育科学 48(2)』pp.343-358.
- 安立清史(2022)「ボランティアと有償ボランティア」弦書房.
- 渥美公秀(1999)「グループ・ダイナミックスとボランティア研究」『大阪大学人間科学部紀要』pp.259-275.
- 渥美公秀 (2001). 『ボランティアの知—実践としてのボランティア研究』 大阪大学出版会.

- 渥美公秀(2014)『災害ボランティア』 弘文堂.
- 阿部志郎(1997)『福祉の哲学』 誠信書房.
- 有田モト子(1997)「電話相談の特性からみる光と影」『電話相談学研究 9』日本電話相談学会, pp.8-10.
- 安藤香織・広瀬幸雄(1999)「環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因」『社会心理学研究 15(2)』日本社会心理学会, pp.90-99.
- 飯田卓(2017)「「見かけの現在」の再検討: A.シュッツの行為論の観点から」『東京情報大学研究論集 21(1)』東京情報大学, pp.89-101.
- 石田敦(2024)「いのちの電話相談員の個人的成長を配慮したスーパービジョンーボランティアの個性の尊重という視点からー」『吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要 (25)』吉備国際大学, pp.27-36.
- 伊藤忠弘(2011)「ボランティア活動の動機の検討」『研究年報』 58, 35-55.
- 稲場圭信(2011)『利他主義と宗教』 弘文堂.
- 稲場圭信(2013)「災害時における宗教者との連携の力ーためされる宗教の公益」『宗教研究, 86(4)』 pp.735-738.
- 稲場圭信・黒崎浩行(編)(2013)『震災復興と宗教』 明石書店.
- 稲場圭信 桜井義秀編(2009)『社会貢献する宗教』 世界思想社.
- 井出(田村)志穂(2019)「子育て支援における有償ボランティアの意識: ファミリー・サポート・センター事業を事例として」『日本学習社会学会年報(15)』, pp.99-107.
- 井出(田村)志穂(2022)「ボランティア活動の有償性がボランティアの意識に及ぼす影響ー子育て支援活動を事例として」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要(28)』 pp.1-11.
- 入江幸男(1999)「ボランティアの思想ー市民的公共性の担い手としてのボランティアー」内海成治・入江幸男・水野義之編著『ボランティア学を学ぶ人のために』 世界思想社, p.5.
- 岩崎久志(2018)「現象学的アプローチにおけるインタビューの検討ーライフストーリー研究を参照にしてー」『流通科学大学論集. 人間・社会・自然編(30)』 流通科学大学学術研究会, pp.87-101.
- 植田嘉好子(2010)「現象学的視点から見た中高生における対人支援ボランティア体験の福祉教育的意義」川崎医療福祉大学

- 植田嘉好子(2012)「「夏のボランティア体験」への現象学的アプローチ：参加生徒からみた体験の意味と「他者」への接近」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 17 (0),』日本福祉教育・ボランティア学習学会, pp.26-39.
- 植田嘉好子(2018)「対人支援領域における現象学的研究の動向と展望—医中誌 5 年分の調査から—」『川崎医療福祉学会誌 28 (1-1)』川崎医療福祉学会, pp.1-14.
- 上床幸太(2023)「ボランティアの参加動機と年齢の関連からみる青年期以降の向社会的動機づけ—青年期までの発達プロセスとの比較—」『大阪商業大学教職課程研究紀要 第 6 巻 第 1 号』大阪商業大学教職課程委員会, pp.15-24.
- 内尾太一(2013)「東日本大震災の公共人類学事始：宮城県三陸地方における被災地支援の現場から」『文化人類学 78 (1)』日本文化人類学会, pp.99-110.
- 内野小百合(2018)「東日本大震災において派遣された陸上自衛隊員のレジリエンス(第 2 報) 災害派遣が自信獲得と再生のきっかけとなった A 氏の語り」『防衛医科大学校雑誌 43(3)』防衛医科大学校雑誌編集委員会, pp.114-127.
- 内海成治・中村安秀(2014)『新ボランティア学のすすめ』昭和堂.
- 大河内大博(2022)「地域共生社会における寺院の役割をめぐるアクションリサーチ：「苦」に出会いなおすための社会的実践の創造」『仏教文化研究 (66)』浄土宗教學院, pp.43-58.
- 大澤史伸(2022)「わが国の市民活動におけるボランティアの役割(2)—ボランティアの歴史からの検討」『専修総合科学研究 (29)』専修大学緑鳳学会 pp.107-120.
- 大菅俊幸 (2006)『泥の菩薩—NGO に生きた仏教者、有馬実成』大法輪閣.
- 大森彌(1980)「ボランティア活動論：断章」『ジュリスト増刊総合特集』第 18 号.
- 小笠原慶彰 (2013)「恤救規則」山縣・柏女編集委員代表
- 小澤千穂子(1998)「有償ボランティアの参加動機と活動継続意志の維持要因・阻害要因—世田谷ふれあい公社協力員へのケーススタディによる検討」『大妻女子大学紀要家政系(34)』 pp.221-231.
- 小澤浩 (2016)『人が助かることさえできれば——「戦争」と「テロ」の時代を見据えて』白馬社.
- 小野博明(2004)『ボランティア・デビューのすすめ』旬報社.
- 小野晶子(2005)「「有償ボランティア」という働き方—その考え方と実態—」『労働政策レポート(3)』独立行政法人労働政策研究・研修機構.
- 奥原幹雄(2018)「金光教の死生観：生きてても死にても天地は住家(生と死の物語)」『死生学年報 2018』東京：ヨベル, pp.187-208.

- 奥村隆(2001)「社会科学における「生活世界」の概念とその射程-シュッツ、ハバーマスからフッサールへ-」『社会学評論 39(4)』日本社会学会, pp.406-420.
- 桂木彩(2010)「電話相談の特徴と非専門家の電話相談ボランティアへのサポートに関する文献研究」『九州大学心理学研究(11)』九州大学大学院人間環境学研究院, pp.145-152.
- 川口清史, 田尾雅夫, 新川達郎編(2005)『よくわかる NPO・ボランティア』ミネルヴァ書房.
- 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美(2016)『質的社会調査の方法 -- 他者の合理性の理解社会学』有斐閣.
- 黒崎浩行 (2019)『神道文化の現代的役割—地域再生・メディア・災害復興—』弘文堂.
- 戈木クレイグヒル滋子, 三戸由恵, 関美佐(2012)「日本の医療分野における質的研究論文の検討 (第1報) —論文数の推移と研究法の混同—」『看護研究 45(5)』日本福祉教育・ボランティア学習学会, pp.481-489.
- 板井正斉(2011)「現代神道と社会課題をめぐる近年の研究動向: 福祉から社会貢献へ、まなざしの軌跡」『皇學館大学日本学論叢 (1)』皇學館大学現代日本学会, pp.153-174.
- 酒井経子(1994)「電話相談の歴史とその傾向」『電話相談学研究 6』日本電話相談学会 pp.43 -55.
- 坂野純子・矢嶋裕樹・中嶋和夫 (2002)「大学生における Volunteer Function Inventory の交差妥当性の検討」『岡山県立大学保健福祉学部紀要(9)』, pp.24-31.
- 坂野純子・矢嶋裕樹・中嶋和夫 (2004)「地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感の関連性」『東京保健科学学会誌 7(1)』, pp.17-24.
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学: ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚・小林多寿子 (編著) (2005)『ライフストーリー・インタビュー: 質的研究入門』せりか書房.
- 桜井政成(2002)「複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析--京都市域のボランティアを対象とした調査より」『ノンプロフィット・レビュー2 (2)』日本 NPO 学会, pp.111-122.
- 桜井政成(2002)「ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異」『ノンプロフィット・レビュー5 (2)』日本 NPO 学会, pp.103-113
- 桜井登世子・桜井茂男(2000)「PD57 ボランティアの動機についての検討」『日本教育心理学会総会発表論文集 42 (0)』日本教育心理学会, p.374.
- 佐藤誠(1999)「総論」『電話相談の実際』双文社 pp.9-24.

- 佐野章二(1999)「4 変革期の行政とボランティア」,内海成治・入江幸男・水野義之編『ボランティア 学を学ぶ人のために』世界思想社, p.70.
- 品川哲彦(1991)「他者の身体的現前と対他態度 -シュッツの社会的世界論における」『和歌山県立医科大学紀要 (20)』 pp.1-15.
- 島藺進 (編) (1992) 『救いと徳—新宗教信仰者の生活と思想』 弘文堂
- 庄司洋子、武川正吾、木下康仁、藤村正之編 (1999) 『福祉社会事典』弘文堂、P987.
- 白石哲朗(2019)「アルフレッド・シュッツの記号概念：シュッツ社会学における他者理解論の射程」『佛大社会学 (43)』佛教大学社会学研究会, pp.1-15.
- 鈴木聖子・山本克彦・吉田清子・櫻幸恵・阿部明子(2012)「スピスボランティア活動における継続要因と関連要因の検討」『社会福祉学 52 (4)』日本社会福祉学会, pp.54-65.
- 妹尾香織・高木修 (2003) 「援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果」『社会心理学研究(18)』 pp.106-118.
- 高木修・玉木和歌子 (1996) 「阪神・淡路大震災におけるボランティア—災害ボランティアの活動とその経験の影響—」『関西大学社会学部紀要(28)』 pp. 1-62.
- 高橋典史(2014)「宗教組織によるインドネシア難民支援事業の展開：立正佼成会を事例に」『宗教と社会貢献 4(1)』 pp.1-25.
- 田中幸治(1994)「電話相談の特性に関する一考察」『電話相談学研究 6』日本電話相談学会 pp.56-61.
- 田中雅文 廣瀬隆人(2013)『ボランティア活動をデザインする』学文社.
- 谷田勇人 (2001)「福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析」『社会福祉学 (41)』 pp.83-94.
- 田宮仁(1996)「仏教とターミナル・ケアの方法論」『仏教とターミナル・ケア』法蔵館 p226.
- 田邊裕子(2014)「音楽教育におけるコミュニケーションとしての音楽活動の構造：A. シュッツの「相互同調関係」の検討を通して」『学校教育学研究論集 (29)』東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科, pp.87-10.
- 中央社会福祉審議会(1993)「ボランティア活動の中長期的な振興方策について（意見具申）」
- 長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫 (1991) 「スポーツイベントのマネジメントに関する研究 (2) —ボランティアの継続意欲の視点から—」『鹿屋体育大学研究紀要 (6)』 pp.69-75.

- 陳重道 (2022) 「新宗教の信仰者による災害ボランティア活動の持続要因—金光教大阪災害救援隊を対象として」 『共生学ジャーナル(6)』, pp.152-178.
- 筒井のり子(1997)「第2章ボランティア活動の歩み—私たちの社会とボランティア—」、『基礎から学ぶボランティアの理論と実際』中央法規, pp.23-25.
- 寺澤重法 (2012)「宗教参加と社会活動」『現代社会学研究(25)』 pp.55-72.
- 寺田喜朗 (2019)「新宗教教団の支援活動②—創価学会・福島常磐総県の事例から—」星野英紀 弓山達也編『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』ハーベスト社, pp.167-196.
- 富樫ひとみ(2013)『高齢期につなぐ社会関係：ソーシャルサポートの提供とボランティア活動を通して』ナカニシヤ出版.
- 富重貴志 (2002)「学生のボランティア動機に関する探索的研究—超高齢者への談話ボランティアに対する学生の意欲との関連—」 『明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要(7)』 pp.43-53.
- 中尾元(2021) 「ライフストーリー研究の方法論」『人文×社会 1 (1)』『人文×社会』編集委員会, pp.125-137.
- 中野民夫(2012)「ボランティア」大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』弘文堂.
- 鍋島直樹(2016)「ビハーラ活動と臨床宗教師研修の歴史と意義」 『日本佛教學會年報 81 (0)』, pp.18-48.
- 鍋島直樹(2022)「実践真宗学の姿勢：ビハーラ活動と臨床宗教師の実際」 『親鸞教學 (114)』大谷大学真宗学会親鸞教学編集部, pp.72-98.
- 西原和久(1998)『意味の社会学：現象学的社会学の冒険』弘文堂.
- 西川正之 (2000)「援助とサポートの社会心理学」『21世紀の社会心理学(4)』, pp.82-93.
- 仁平典宏(2011)『「ボランティア」の誕生と終焉—〈贈与のパラドックス〉の知識社会学』名古屋大学出版会.
- 野上芳彦 (1974)『ボランティア活動入門』白樹社.
- 長谷川浩一(1992)「電話相談のなすべきこと,できること—電話相談心理学の提言—」『電話相談学研究 4』日本電話相談学会, pp.1-10.
- 早瀬昇(2011)「第1章 ボランティア活動の理」『テキスト 市民活動論—ボランティア・NPOの実践から学ぶ—』、社会福祉法人大阪ボランティア協会.

- 東根ちよ(2015) 「「有償ボランティア」をめぐる先行研究の動向」 『同志社政策科学院生論集(4)』 pp.39-53.
- 廣重剛史(2015)「東日本大震災の社会哲学的考察 -危機にある生活世界と再生への課題-」 『早稲田社会科学総合研究 16 (1)』 早稲田大学社会科学学会, pp.193-207.
- 藤井麻央 (2019) 「新宗教教団の支援活動①—天理教・いわき市の事例から—」 『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』 ハーベスト社, pp.144-166.
- 藤本瀬生(2009)「子育て支援と境内地の活用：神道の福祉の実現の場としての神社の可能性」 『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要(1)』 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター, pp.113-128 .
- 古賀幹章・井上果子(2015)「電話相談ボランティアの動機と活動継続阻害要因について」 『横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集 (15)』 教育相談・支援総合センター, pp.69-78.
- 古賀幹章・横澤希美・井上果子(2017)「電話相談ボランティアの長期継続動機とストレスに関する研究」 『電話相談学研究 24(2)』 日本電話相談学会, pp.4-16.
- 文化庁(1992)「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について（答申）」
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/archive/pdf/93790601_03.pdf
- 前田栞奈・伊藤一美(2025)「電話相談ボランティアのレジリエンスが長期継続動機に及ぼす影響について」 『研究紀要プシュケー (24)』 京都ノートルダム女子大学, pp.1-12.
- 町田怜子・愛甲哲也・松島肇・武正憲・庄子康・御手洗洋蔵・三上直之(2022)「阿蘇くじゅう国立公園における二次草原保全活動ボランティアの活動継続と制約の要因」 『ランドスケープ研究 85 (5)』 日本造園学会, pp. 637-640.
- 三谷はるよ(2016)『ボランティアを生みだすもの：利他の計量社会学』 有斐閣.
- 南彩子(2002)「ボランティアの原点を求めて：生き方としてのボランティアリズム」 『天理大学人権問題研究室紀要 (5)』 天理大学, pp. 13-21.
- 箕浦康子 (2005).『フィールドワークの技法と実際:マイクロ・エスノグラフィー入門 6』 ミネルヴァ書房
- 村社卓(2018)「高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェに参加する住民ボランティアの継続特性——ボランティアの「楽しさ」に焦点を当てた定性的データ分析——」 『社会福祉学 58 (4)』, pp. 32-45 日本社会福祉学会.
- 森井利夫(1994)「ボランティア—これまでとこれから—」 『現代のエスプリ』 321 号.

- 森岡清美 (1981) 「宗教組織——現代日本における土着宗教の組織形態」『組織科学 15(1)』, pp. 19-27.
- 森山花鈴(2016) 「緒言 自殺対策の現状：「自殺対策基本法」の成立から 10 年」 『社会と倫理 / 南山大学社会倫理研究所 編 (31)』 南山大学社会倫理研究所, pp. 101-106.
- 米澤美保子(2010)「ボランティア活動の継続要因」『関西福祉科学大学紀要 14』 関西福祉科学大学, pp. 31-41.
- 山下祐介(2008)「リスクの拡大と社会の変容—現代的災害とリスク」, 菅磨志保・山下祐介・渥美公秀編『災害ボランティア論入門』 弘文堂, pp. 32-41.
- やまだようこ(2007)『喪失の語り 生成のライフストーリー』 新曜社.
- 吉田忠彦・桜井政成 (2004) 「戦略的人的資源管理論アプローチによる NPO のボランティアマネジメント」 『生駒経済論叢 (1)』 pp.313-325.
- 吉田渉人・徳田智代(2012)「対人支援ボランティアにおけるボランティア満足とバーンアウトの関係」『久留米大学心理学研究(11)』 pp.108-116.
- 李妍焱 (2015) 「東日本大震災における災害ボランティア組織の事例研究—「ボランティアの日常性を如何に獲得していくか」『駒澤社会学研究,(47)』 pp.115-140.
- 渡辺一城 (2011)「宗教による社会的活動の意義と天理教におけるひのきしん活動の在り方」『天理教大学人権問題研究室紀要(14)』 pp.23-35.
- 渡辺実 (1995) 「災害ボランティア・今後のあり方を考える—阪神淡路大震災からの教訓—」『地域安全学会論文報告集』 pp.107-144.

【英語文献】

- Allen, N., & Rushton, J. P. (1983). Personality characteristics of community mental health volunteers. *Journal of Voluntary Action Research* 12, 36-49.
- Aydinli-Karakulak, Arzu、Bender, Michael、Chasiotis, Athanasios、Van de Vijver, Fons、Cemalcilar, Zeynep、Chong, Alice、Yue, Xiao Dong (2015) A Cross-Cultural Study of Explicit and Implicit Motivation for Long-Term Volunteering Non-Profit and Voluntary Sector Quarterly 1-22.
- Black, B., & Kovacs, P. J. (1999). Age-Related Variation in Roles Performed by Hospice Volunteers. *Journal of Applied Gerontology*, 18(4), 479-497.
- Chambré, S. M. (1993). Volunteerism by elders: Past trends and future prospects. *The Gerontologist*, 33(2), 221-228.
- Clark Moustakas (1994) *Phenomenological Research Methods* SAGE Publications, Inc.
- Clary, E. G., & Snyder, M. (1991). A functional analysis of altruism and prosocial behavior: The case of volunteerism. In M. S. Clark (Ed.), *Prosocial behavior* (pp. 119-148). Sage Publications, Inc.

- , G. et al. (1996). Volunteers' motivation: Findings from a national survey. *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly* 25, 485–505.
- , G. et al. (1998). Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology* 4, 16–30.
- Cnaan, R. A., & Goldberg-Glen, R. S. (1991). Measuring motivation to volunteer in human services. *Journal of Applied Behavioral Science*, 27, 269-284.
- , Handy, F. and Wadsworth M. [1996], Defining who is volunteer: Conceptual and empirical considerations, *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, 25(3), 364-383.
- Colaizzi, P. (1978). Psychological research as a phenomenologist views it. In: R. Valle and M. King (eds.), *Existential-Phenomenological Alternatives for Psychology*, Oxford University Press, New York.
- David Gerard (1985) What Makes a Volunteer?. *New Society* 8 : 236–238.
- Davis Smith, J. (1996). Volunteering in Europe. *Social Work in Europe* 3, 19–24.
- Field D, Johnson I. (1993) Satisfaction and change: a survey of volunteers in a hospice organisation. *Soc Sci Med.* Jun;36(12):1625-33.
- Frisch, M. & Gerrard, M. (1981). Natural helping systems: A survey of Red Cross volunteers. *American Journal of Community Psychology*, 9:567-579.
- Gidron, B. (1984). Predictors of Retention and Turnover Among Service Volunteer Workers. *Journal of Social Service Research*, 8(1):1–16.
- Giorgi, A. (2009). *The descriptive phenomenological method in psychology: A modified Husserlian approach*. Duquesne University Press.
- , (1985a). Sketch of a psychological phenomenological method. In: A. Giorgi (ed.), *Phenomenology and Psychological Research*, Duquesne University Press, Pittsburgh, PA, 8–22.
- , (1985b). The phenomenological psychology of learning and the verbal learning tradition. In: A. Giorgi (ed.), *Phenomenology and Psychological Research*, Duquesne University Press, Pittsburgh, PA, 23–85.
- , (1989). Some theoretical and practical issues regarding the psychological phenomenological method. *Saybrook Review*, 7(2):71–85.
- Güntert ST, Strubel IT, Kals E, Wehner T. (2016) The quality of volunteers' motives: Integrating the functional approach and self-determination theory. *J Soc Psychol.* 156(3):310-27.
- Hannawacker, A., Rose, L. D., & Preuss, H. (2025). Key factors influencing long-term engagement: a quantitative analysis of Special Olympics World Games 2023 volunteers. *Frontiers in sports and active living*, 7, 1503863.
- Heather Tan, Anne Wilson, Ian Olver (2009) Ricoeur's Theory of Interpretation: An Instrument for Data Interpretation in Hermeneutic Phenomenology *International Journal of Qualitative Methods* 8(4):1-15.
- Janet Pierucci, Richard C. Noel (1980) Duration of participation of correctional volunteers as a function of personal and situational variables. *Journal of Community Psychology* 8(3):245-250
- John Wilson, Thomas Janoski (1995) The Contribution of Religion to Volunteer Work. *Sociology of Religion* 56(2):137-152.
- Keishin Inaba, Kate Loewenthal (2011) Edited by Peter B. Clarke 『Religion and Altruism』 *The Oxford Handbook of the Sociology of Religion*.
- , (2016) Religious Altruism 『Osaka Human Sciences, 2』 73-84.

- M.Dickens(1996) Befriending: The American Samaritans Popular Pr of Bowling Green State.
- Marx, J. D. (1999). Motivational characteristics associated with health and human service volunteers. *Administration in Social Work* 23, 51–66.
- Oda, N. (1991). Motives of volunteer works: Self- and other-oriented motives. *Tohoku Psychologica Folia*, 50, 55–61.
- Omoto, A. M., and Snyder, M. (1993). AIDS volunteers and their motivations. *Nonprofit Management and Leadership* 4, 157–176.
- , M., & Snyder, M. (1995). Sustained helping without obligation: Motivation, lon-gevity of service, and perceived attitude change among AIDS volunteers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 671-686.
- Payne S. The role of volunteers in hospice bereavement support in New Zealand. *Palliative Medicine*. 2001;15(2):107-115.
- Planalp S, Trost M. Motivations of hospice volunteers. *Am J Hosp Palliat Care*. 2009 Jun-Jul;26(3):188-92.
- Roessler A, Carter H, Campbell L, MacLeod R. Diversity among hospice volunteers: a challenge for the development of a responsive volunteer program. *Am J Hosp Palliat Care*. 1999 Sep-Oct;16(5):656-64.
- Salamon, M. L., Sokolowski, S. W., & Geller, S. L. (2012). Holding the fort: Nonprofit employment during a decade of turmoil. *Nonprofit Employment Bulletin*, 39, 1-17.
- Schutz, A, (1962) *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff.
- , (1971) *Phänomenologie und die Sozialwissenschaften, Gesammelte Aufsätze-1*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 136-161.
- SCHÜTZ, A. (1951). MAKING MUSIC TOGETHER: A Study in Social Relationship. *Social Research*, 18(1), 76–97.
- Shin, K. R. (2002). Using Hermeneutic Phenomenology to Elicit a Sense of Body at Mid-Life. *International Journal of Qualitative Methods*, 1(2), 39-50.
- Shin, K. R, Kim M. Y, Chung S. E. (2009) Methods and strategies utilized in published qualitative research. *Qualitative Health Research*, 19(6), 850-858.
- Smith, D. H. (1981). Altruism, volunteers, and volunteerism. *Journal of Voluntary Action Research* 10, 21–36.
- Smith, J. K. A. (1999). Liberating Religion from Theology: Marion and Heidegger on the Possibility of a Phenomenology of Religion. *International Journal for Philosophy of Religion*, 46(1), 17–33.
- Van Manen M. (1990). *Researching lived experience*. New York: SUNY Press.
- Yeung, A. B.(2001). Manifold motives for volunteerism: A study on the motives of the people inspired to volunteer by a Salvation Army advertisement. *Journal für Psychologie* 3, 37–47.
- (2004), *The Octagon Model of Volunteer Motivation: Results of a Phenomenological Analysis*. *VOLUNTAS: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations* 15, 21–46.

注

¹ 全社協 全国ボランティア・市民活動振興センター(2024) 「全国の社会福祉協議会が把握するボランティア数の現況及び推移

<https://www.zcwvc.net/volunteer/reference/zenshakyo-vc/>

² 衆議院 日本国憲法

https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_annai.nsf/html/statics/shiryo/dl-constitution.htm#3sho

³ 内閣府ホームページ <https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/shiminkouken-chousa/2022shiminkouken-chousa>

⁴ 「和」「和合」「調和」に最大の価値を置く道德意識

⁵ 取次（とりつぎ）とは、教祖・生神金光大神によって始められた、参拝者の願いを神様に届け、神様の願いを参拝者に伝えて、神様と人が共に助かる生き方を求めていく、金光教の信仰活動の中心である。

⁶ 認定 NPO 法人国際ビフレンダーズ大阪自殺防止センター 『ボランティア・ハンドブック』を参照

謝辞

本論文の執筆にあたり、金光教大阪災害救援隊、大阪自殺防止センター、日本災害救援ボランティアネットワーク、あそかビハーラ病院の皆様においては、本論文の調査段階で活動同行、インタビュー調査の許可や情報の提供など、たくさんのご支援とご協力を頂きました。金光教本部教庁の職員の皆様にも、情報の提供によるご協力を頂きました。心より感謝申し上げます。

また、本論文の執筆にあたり、ご指導を賜りました稲場圭信先生（大阪大学）、渥美公秀先生（大阪大学）、宮本匠先生（大阪大学）、福田雄先生（大阪大学）及び稲場研究室の皆様に心より感謝申し上げます。